
騎士と魔女と御伽之話

十握剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と魔女と御伽之話

【Nコード】

N3676N

【作者名】

十握剣

【あらすじ】

これは電撃文庫《オオカミさんと七人の仲間たち》に新たな人物が入っているお話です！ 御伽学園学生相互扶助協会に所属している主人公は魔女先輩ことマジョーリカと一緒に学園生活を送るちよっとしたラブストーリー♪

第1話「出逢い」(前書き)

ちよっとおかしいですが、読んでいってください！

第1話「出逢い」

むかしむかし、ある所に父から過激なまでに暴力をふるわえ何度も死にかけてた少年が居ったそうなの。

その少年は何度も父から逃げることを試みたが、次々と失敗してしまった。

少年は暴力を振るっている父を母に告白する、だが、その母もまったく聞き耳を立ててくれず、逆に父から受ける暴力が一層酷くなった。

ああ、どうして自分は産まれて来たのだろうか。

少年は毎日のようにそう思っていた。

それもそのハズです、父から肉体的苦痛を与えられ、母から精神的苦痛を受けているのだから。

そして少年はある日決心しました、この地獄のような日々を終わらせる為に。

自殺だ。

自殺をすれば良いんだ、と。

少年は決意し、どうせ死ぬなら外で死にたい。

死んで親^{アイツ}らを迷惑をかけてやると、少年は思ったのだ。

少年は意を決して、親が寝静まった夜中にこっそりと家から出て、どこで死のうかとぶらりぶらりと歩いて行く。

少年は思った。

普通死に行く者は怖がるのだと、死にたくないと呼びながら足掻くのだと、だが少年にはそんな気持ちにならなかった。普段から受けている苦痛のせいで少年にはどこか壊れてしまった所があるらしい、『生』に対する執着心が無さ過ぎるのだ。

暗い夜道を歩く少年。

ひたすら足を歩かせる。

足掻こうとせず、『死』へと歩を進める。

だが、その少年の前に突然、

「もおー、ヨナカになればなにかみつかるとおもったのにーなにもみつからなかった」

少年の同年、より少し下のような女の子が虫取アミを片手に走っていた。

少年はまさかこんな夜中に人と会うとは思わず、その場で足を止めてしまった。

「あ、ソコのひとー、ソコで呆けてるひとー」

そして女の子は止まってしまった少年の元へと駆け寄って来た。少年には普段同世代の友達や、ましてや女の子とは話したことが無かったのだ。

「こんなよなかに一人でであるくのはあぶないよー？」

女の子は少年の近くまで近寄りそう言って来た。

少年は驚く、その近寄って来た女の子は完全に外国の人だったのだ、

日本人にはあり得ない金色^{こんじき}に髪に、青い瞳、外国人だ。

だが少年は表情には出さなかった、少年にとっていちいち表情にするのは“無駄”だと知っているからだ。

「むう、きいてるの？」

その金髪の女の子は片手に持っている長い虫取アミをトントンと音を鳴らしながら少年に聞いた、ちゃんと答えていなかったからだ。

「・・・・・・・・・・」

だが少年は気付いた、この自分より小さな女の子は糸も簡単に日本語をペラペラと喋っていることに、少年は英語を知らない、勉強を受ける環境では無かったから。だから少年は女の子になんて話しかければ良いか分からなかったのだ。

「・・・ねえ、なんでキミはそんな目をしているの？」

少年が困っていると金髪の女の子はそんな質問をしてきた。

「なんだか、何もみてない、かなしい目をしてる」

何故か女の子も少し悲しそうな目で少年を見てきた。

少年はただ無表情にそれを聞く。

「なにか・・・・・・・・あつたの？」

女の子は聞いて来る、だが少年も見知らぬ赤の他人に自分の今の置かれている状況や気持を話す訳も無い。少年は再び歩を進めた。

そうだ、早く死なないと。

少年は女の子の横を通ろうとした、だが次の瞬間、

ガバッ！

「・・・！？・・・」

少年は女の子に押し倒させられたのだ、自分より小さな女の子がこんな力が強いとは思わなかったらしい、簡単に倒れた。

「はなしをきけー！」

女の子は少年の胸に顔を埋めさせて大声で言う、父から受けた暴力で骨を折ったことで少し痛めていた右足を我慢する少年、静かに少年は女の子の肩を掴み、剥がそうとする。

所詮はやはり男と女、少年が少し力を入れて剥がそうとすると簡単に放せる事が出来た、少年は無表情のまま女の子の顔を見た。

「・・・泣いてるのか？」

女の子の青い瞳から涙が雫となって少年の衣服に落ちる。

「・・・何で泣いている」

少年は無表情のまま、だが少し困ったような顔をしてまだ少年の上に乗ってる女の子に聞いた。

「かなしいからだよ、キミからとってもかなしいかんじがするの！」

女の子は大量には無いが少しずつ涙を流す。

どうして泣く？

自分には関係無いのに。

少年はそう思いながら起き上がろうとするが女の子は少年に抱き着く。

「・・・・・・・・退いて」

「いや」

「・・・・・・・・どい」

「いや！」

「・・・・・・・・ど」

「いや!!」

女の子は断固として少年から離れようとしなかった。

少年は仕方無くそのまま立ち上がる。

なんとも苦にもせず簡単に立ち上がる少年、女の子も驚いて少年に抱き着いたまま浮かぶ。

だがこのままでは自殺出来ない。

少年はそう思い近くにあった公園に入り、そこにあった木製の椅子に座る。

「・・・・・・・・」

少年は未だに離れない女の子を見ながら考えた。

これ、どうしようと。

「しゃべってよ、私にはテンサイ的なズガイがあるんだから何かか
いけつするかもしれないよ」

「・・・・・・・・頭蓋じゃなくて頭脳？」

女の子は自分が間違えた事に赤面して、少年から離れる、だが手を握られていた。

とても、とても柔らかい。

「・・・・・・・・どうしたの？ なんで急に泣きそうなかおをするの？」

女の子は少年の顔を見てそう言ってきた。

少年はハッとする。

手を握られたことで何かが崩れ掛けた。

少年は女の子から手を払おうとするが、強く握り締められる。

「……や、めろ。離せ」

少年は少し怒気の含んだ声で女の子に言う。
もうすぐ、もうすぐ何かがきてしまう。

少年は早く女の子から手を離そうとする。だが、女の子はまた断固として離そうとせず、逆に強く握り返して来る。

「やめろ、離せよ！」

そして少年は女の子に怒りを露にして叫んだ。

普通ならば泣くか逃げるだろう今の場面に金髪の女の子は真剣な眼差しになり、そしてもう片方の手を少年の頬にペタと着けた。

「いやよ、だってキミ、泣いてるんだもん」

女の子に言われ、少年はハツとする。頬に伝わるこの冷たい何か、それは涙だった。

少年は自分の手で涙に触れる。

ああ本当だ、泣いてる。

壊れたであろう感情の一部分が治っていた。少年は女の子の温かく、そして柔らかい手を強く握り返していた。

こんなにも、こんなにも柔らかいものなのか、人間はこんな温かくて安心出来るものなのか。

親からバットやら皿、花瓶、酒瓶で殴られ続かれ、こんな温かく柔らかい感触なんて産まれて初めて感じたかもしれない。

少年は女の子が頬に付けている手に自分の手を据えた。

「温かい、こん……なにも温かいんだ。それに、柔らかいかい……
・・・だっ……ウグッ、ヒグッ」

少年は女の子の手を握る、ただそれだけでどんどん涙が溢れ出てきた。

こんなに優しく温かい、そして冷たく固くない。

「うぐう、ガァっ、グガァ、アガァ！」

少年は声に出さずにと必死に声を消して泣いている、すると女の子は。

「泣いて、いいんだよ。ここにはだれもないから」

女の子は少年の顔を引き寄せて、胸に抱き寄せた。

そして少年は、硬く氷らせていた感情を溶かし、爆発させた。

「うわああああああああああ……ヒグッ、うぐああ
あああああああ！」

少年は女の子をギュッと抱き着き大声で泣いた、苦しかった、誰かに助けてもらいたかった。救われたかった。

少年は心の中でそう叫びながら泣いていた。

「……泣き疲れたのかな、ねむっちゃった」

少年はあの後、プスツと泣き止み、今までの精神の疲れが本の少し晴れたことで睡魔に襲われたのだ。

そして今は女の子の膝を枕に寝ていた。

女の子は少年の髪を弄りながら身体を触り、診察していた。

「……身体の至る所が紫色にパンパン腫れてる、普通の部分の方が少ないってどういう、……！……酷い」

女の子は少年の髪を弄りながら凄い傷を見つけた、頭に何かに強打されて裂けていたのだ、血で髪が固まっていた。

そしてその後に骨にひび割れしている部分が七つ、折れている所を二つ見つけた。

「……酷すぎる、きつと、この男の人は、死に行こうとしたんだわ、死んだような目をしていたもの」

女の子は手を少年の頬にピタツとつけると、少年はパチツと目を覚

ました。

「……俺は、寝てしまったのか」

「と言っても数分だよ」

女の子の声が真剣になっているのに少年は気づくと、起き上がった。

「……済まない、見知らぬ人の膝を借りるとは」

「知らないよ」

「……なに？」

「私は君を知ってるの」

「……それは、何でだ？」

女の子は真剣な面持ちで少年の向き合った。

「私は貴方を迎えに来たの、『黒^{くろ}軋^{ぎん}ガウェイ^ン』くん」

少年はいきなり自分のフルネームを言われて驚いた、無表情だが。

「私の名前はマジョーリカ、君のお祖父さんに名前をつけて貰ったのよ」

「……俺の祖父ちゃんか？」

コクリと金髪の女の子、マジョーリカは頷いた。

「ふふふ、君のお祖父さんは『アーサー王伝説』が大好きだからその中に登場する者から名前を取って、付けたらしいのよ。だから君の名前は円卓の騎士の一人である『ガウエイン』から取ったのよ」

マジョーリカは可愛いらしい笑みを浮かべて少年、ガウエインに言った。

「……名前なんて、どうでも良い、そのせいで親に何度も、何度も……」

ガウエインはまた死んだような目でそう呟く、するとマジョーリカはまた手を握ってくれていた。

「大丈夫だよ、もう、あの家に帰らなくても良いの」

「……なに」

ガウエインは不思議そうにマジョーリカの顔を見る、マジョーリカは笑みを浮かべていた。

「私の親は今頃、君の親の所に行ってる。君を引き取りに来たの」

「引き取り？　　どうして？」

「どうしてって、居たいの？　　暴力を振るう親の所に」

マジョーリカの言葉にガウエインはピクツと反応した。

「……なんで暴力が振るわれているのが分かった」

「君、の至る所に傷が残ってる」

マジョーリカの指摘にガウエインは黙る。

「えっとね、私の両親、というより父親は君のお祖父さんと知り合
いで、お祖父さんは君の境遇を知り、私の父親に頼んで里親になっ
て貰いたいって言ってきたの。本当は君を引き取りたいと言ったの
お祖父さんんだけど、訳あって無理みたいなの、それで私の父親
に頼んできた、という訳」

分かった？

とマジョーリカは首を傾げてガウエインに言う。

「……それで、どうして俺がこんな時間に出て来るって分か
ったんだ？」

ガウエインはマジョーリカにそう聞くと、まるで困ったような顔に
なり渋々答える。

「私もその、両親と一緒にしようとしたんだけど、途中ではぐれち
やって、携帯で連絡して待ち合わせをしていたんだけど、私が探し
ていた研究材料の薬草とか幼虫とか動物とか見つけて、それで追
かけて来たら……」

「つまりブラブラしている所で俺と会った、という訳か？」

マジョーリカはゆっくり、渋々頷く。

「……あの親から離れられるなら、それだけで、充分だ」

ガウエインはもうすぐ暗い夜空が段々と青くなるのを見上げていた。

「ジー」

マジョーリカはガウエインの顔を覗いてきた。

「なに」

「私が思うに、君はその恵まれない環境で何か欠けているんだと、私は判断した」

「なにをいきなり」

「だから私がその欠けている所を埋まらせてあげる！」

マジョーリカはそれだけ言うと、ガウエインの頬にキスした。

「なにしてんの？」

だがガウエインは何の反応もせず、その行為を聞いてきた。
マジョーリカはため息を吐いて言う。

「君には“愛情”が注がれていないんだよ。だから私は君に空となつた“愛情”の器を充たしてあげるよ」

マジョーリカはまた満面は笑顔でガウエインに言った。

それが騎士と魔女が

初めて出逢った日だった。

第1話「出逢い」(後書き)

感想とコメントをお待ちしています！

第2話「おかし荘」

ガウエインとマジョーリカと出逢ったあの日、ガウエインはフェイ家一家に身を預ける形になった。

ガウエインの両親は最初は断固のように断っていたのだが、子供虐待の話や裁判などの話を持ち上げてみれば簡単にガウエインに関する荷物や書類をマジョーリカの両親に預け、姿を消した。それほど自分の息子に関心を持っていなかったのだ。

ガウエインにとってどうでも良かった、あのままだったら絶対に殺されていたのだから。

だがガウエインは己の姓だけはそのまま『黒軋』で名乗っていた。公の場ではガウエイン・ル・フェイと名乗っているが黒軋の名だけは捨てなかった。

マジョーリカの両親もそれは黙認してくれていた。

そしてガウエインはマジョーリカの義理の兄としてフェイ家の位置についていた。

マジョーリカの両親はとてもガウエインのことを愛^{いつく}しみ、久しい暖かい抱擁^{ほうよう}で義理の息子を愛撫^{あいぶ}してくれた。息子が出来たと逆に喜んでくれた。

ガウエインにとって初めての体験ばかりだった。歳相応に泣けば良

かった、と後から思ったらしい。

そして何より、マジョーリカとガウエインはとても仲が良くなっていた。

「マジョーリカって名前、長いよ」

「そしたらガウエインっていう名前だってそうじゃない？」

ある日ガウエインとマジョーリカは互いの名前が長いことに話していた、そこでガウエインは一つ考えた。

「マジョーリカは長いから、最初の字と最後の字で『マカ』はどう？
女の子らしくて可愛い名だよ」

ガウエインはとても恥ずかしい事を言っているのだが恥じることは無く、相変わらず無表情のままマジョーリカに言う。

「マカ……か。な、なんか照れるね／＼／＼」

マジョーリカは頬を赤くして照れていた。そしてマジョーリカもガウエインの名を考え、そして、

「ガウエインだから、『ガーくん』はどう♪ とってもカッコ良
いよ！」

マジョーリカは身体を乗り出して言ってきた。

「ガ、ガーくん？」

「そう、ガーくん♪」

「・・・・・・・・・・」

「ムフフ♪」

二人は数分見つめ合う、というよりガウエインが放心している。

なんていう名前を付けるんだと、ガウエインは心の中で恥ずかしがっていた。

「・・・・・・・・他には？」

「えー、他に？ うーん、ガーくん以外はもう無いかな」

マジョーリカは満面な笑顔でそう言って来た。

マジョーリカの家に住むようになったガウエインは一つだけ分かることがあった。

最初に会った時からそうだがガウエインはマジョーリカのこの満面な笑顔がとても弱かった、つまりとても、いや、無茶苦茶可愛いらしくて直視出来ないことが分かった。

だがこれからは義理とは言え、兄妹となったのだ。こんな感情を持つてはいけないと思うのが当たり前だ？と思った？。何分ガウエインは感情が所々が欠けている為に別にそんな風に思っていたり、思っていないかったりしていた。

そして次の日からガウエインはマジョーリカに『ガーくん』と呼ばれるようになったのは言うまでも無かった。

長い年月が立ち、ガウエインはとうとう高校生となる歳となった。

ガウエインが引き取られたのは小学生六年の頃であり、三年はフェイ家でお世話になっていた。

だがガウエインもずっとお世話になるのは心苦しいと思い、一人暮らしをする事を決意した。

フェイ家に来てからはまともな食事にまともな教育、まともな生活を送って来たガウエインは一般常識や教養を身に付けた。

なので一人暮らしくらい出来ると判断したガウエインはさっそくフェイ夫妻に相談した。最初は駄目だ、と頑なに言われ続けて来たがガウエインもいつまでも世話になるのはとても辛いと答えた所、フェイ夫妻も折れ、許可が下った。

「……ここが『おかし荘』か」

ガウエインがやって来たのは御伽花市おとぎばなしという街だ。

御伽花市には五つの地域に分けられており、学校関係の施設がある北区、様々な店が集まっている御伽花市の中心である中央区、東区は寮や学生マンションなどの学生たちの住まいが多く、南には一般住宅の建ち並ぶ住宅街、西区が工場などが建ち並ぶ工業地区となっている。

街の歴史はそれなりに古いが発展してきたのは凄く最近なので、新しい街ならではの区分けが行われているのだ。

そしてガウエインが今日の前に建っているのが南区と東区の境にある『おかし荘』である。

そこには庭付きの比較的大きな家が建っており、表札には『村野』と書かれてある。

その家はそれほど豪奢で成金的な建物ではないが、それでも金がたくさんあるな、と感じさせるほどに大きく、それに比例して庭も広がった。

「……広い」

ガウエインは庭をジイーと見つめて答えた。

するとその大きな家から誰かが外に出て来て、ガウエインに近付いて来た。

「よう、お前が黒軋くろぎしっていう奴か？ ……つてうわッ！ その黒バイクお前のか！」

出てきたのは長身でぼさぼさに伸びた髪を無造作に後ろで縛った化粧っ気のない眼鏡の女性だった。

「……今日からお世話になる黒軋ガウエインと申します、どう

ぞヨロシクお願いします」

「おう、現代の若者の癖に異様に礼儀が良いんだな」

「祖父から貰った本にありました、《騎士道》の一つ『礼儀正しさ』と、そして日本にもある《武士道》の徳目“礼”『尊と卑を分別し謙虚にて上を敬い下を侮らない心』それを実行したままです」

ガウエインが真剣にそう言うと言と眼鏡の女性はポカンとしていると、次の瞬間大口を開けて笑いだした。

「アツハツハツハ！　良い！　気に入ったね、ちょっと堅いかもしれないが、まあそれは後々治ってくださる」

女性はガウエインに近付き肩にパンパンと何度も叩いた。

元気な人だ。

ガウエインの第一印象だった。

「私の名前は村野雪女、むらのゆきめこのおかし荘の宿主って所だ」

雪女と名乗った女性は家の隣にある二階建ての全八戸ほどの部屋数のアパート風の建物を指差した。

「……（アパート）」

ガウエインはそんな風に思っていると、まるで心を読まれたように雪女は言ってきた。

「まあ建物的にはアパートだな、だがこれはれっきとした下宿なんだ」

にっと笑った雪女はある所に指を指した。

「……あのアパートと住宅は渡り廊下で繋がっているんですか？」

「おう、そうだ。部屋には小さなユニットバスはついているんだが、本邸の方が大きな風呂があるんでほとんどの住人がそこ使ってるな。あと、飯もついてくる。朝と夜はみんなで食べるぞ」

「……確かにアパートというより下宿ですね。……それで名前はおかし荘？」

建物にかかっている看板を目を細めて読むガウエイン。

「ハハハハ、こいつはお菓子と、おもしろそうっていう意味の「おかしそう」が、掛かってるんだよ」

そうなんですか、とガウエインはおかし荘を見上げながら答える。

「八つ部屋があるんだが、ほとんどが空いてる。だか好きな部屋使って良いぞ」

雪女はそう言って家に入ろうとしたが、戸の前ピタッと止まり、ガウエインに聞く。

「……ずっと気になっていたんだが、その黒バイクはお前のか？」

雪女はガウエインが横でずっと支えていた大型のバイクに指差して聞いた。

「俺のです、名前はGALLー10でちゃんと免許も持ってます」

「ほー、コイツは良い買い出し係を手にな……ゴホゴホっ、いや、何でも無い。邪魔にならない所に置いとけよ。あと昼飯がもうすぐだ、荷物運んだら食べに来い」

いやあ、本当に便利な奴が来たぞ、と凄く嬉しそうに雪女は家の中へと入って行った。

「……使われるな、俺は」

そう言ってガウエインは黒い大型のバイクGALLー10をおかし荘の隣に持って行く。

バイクは中学生の頃に免許皆伝した、高校生になるし一人暮らしで色々と思うと思い、通う高校を調べのバイク通学OKを知り、バイクを“貰った”。

どこから貰ったかはいずれ話そう。

「ここなら邪魔じゃ無いかな」

ガウエインはバイクをおかし荘の影の所に置いて、バイクに乗せてあった荷物を片手で担いでどの部屋にしようか迷っていた。すると、ある部屋から白くて長い髪に黒縁眼鏡くろふちをかけた暗い雰囲気

をまとった少女が出て来た。

ガウエインはその少女に挨拶をした。

「今日引越して来た黒軋ガウエインと申します、ヨロシクお願いします」

ガウエインがそう言うのと少女はビクッと驚いて逃げて行ってしまった。

「いきなり過ぎた、マカから色々と教わったのだが……」

ガウエインは一人でそう思いながら空いてる部屋に入り荷物などを置いた。

「今日からここが、俺の家か……良い部屋だ」

昔にろくでもない親に押し付けられていた部屋より数倍、数億倍良かった。

「……変わっていいこう」

ガウエインは一人部屋で誓った。

ここから変わっていいこうと。

ガウエインは、誓った。

第2話「おかし荘」(後書き)

感想やコメントをお待ちしています！

ど、どうか感想を下さい！

第3話「騎士と魔女と」(前書き)

もうすぐ受験・・・。

やばいいいいいい!!

第3話「騎士と魔女と」

御伽学園高等部二年生となった、この物語の主人公である黒^{くろ}軋^ろガウエインは今現在、漆黒の大型二輪自動車、つまり大型のバイクにまたがりながらある場所へと向かっていた。

因みに今のガウエインの姿は黒いライダースーツに身に纏っているのだが、そのライダースーツはとにかく特別製に作られており、まるで西洋の鎧甲冑を思わせる、鎧姿だった。

ヘルメットが騎士の兜^{かぶと}鉢、両腕に手甲、足部分に脛^{すね}当^{あて}を付け、胴部分や他の所は黒いコートを身に纏っていた。

この恰好にはちゃんとした理由があるのだが、それはまたの機会にて。

「・・・・・・・・」

ブルン！ とバイク特有の爆音を鳴らし・・・・・・・・とはいかず、爆音対策をしているらしく静かなエンジン音を鳴らしながら疾走している。

漆黒のバイクだけでも目立つと言うのに、更に目立つ恰好をしているガウエインはまったく気にしないで疾走。

そして行き着いた場所はと言うと、御伽学園内にあるとあるボロいプレハブ小屋、そのプレハブ小屋付近までやって来たガウエインは、大型のバイクを巧みに操り、影にバイクを置いた。

「……頭取も人を使うな、わざわざコンビニまで菓子を買わせに行かせるとは」

愛用のバイクから降り、兜ヘルメットを取り外し、他の鎧カバも外す。

鎧ライダーズーツ甲冑を脱いだガウエインの恰好は両腕と両足の鎧カバを外しただけで、黒いコートのままで漆黒の髪を伸ばし、丁度前髪で片目が見えなくなっており、黒縁くろぶちメガネを掛けていた。

御伽学園は制服が何種類か用意されていて、且つ条件付きで改造が許されているのでそれらは少しずつ形が変わっている。

許されているというよりは、ぶっちゃけ生徒数が多すぎるので、顔だけではなく服装でも区別できるようにと黙認されているらしい。

黙認される条件は、校章が見える部分について御伽学園の学生だと一目で分かること、過度な露出や危険な装飾を取り付けないこと、公式行事用にノーマルな制服を一着用意すること。

常識を逸脱するなということだが、その常識が個人の良識に任されているため、ものすごいことになってたりする。

特にガウエインの恰好は確かに校章が見えてはいるのだが、まるでどこかの『真っ黒の契約者』や『●星の双子』に出てくる死神の恰好に似ていたりする。

ガウエインはバイクの後頭部にある荷物などが入れる所からコンビニ袋を取り出した。

そのままプレハブ小屋に入ろうとすると、

ガラガラー。

「あら、お帰りなさいですの、騎士先輩」

と先に扉を開いて現れたのはガウエインの御伽学園高等部一年生の、つまりガウエインの後輩である小さな可愛いらしい赤髪の女の子が立っていた。

「林檎^{りんご}か、今から何処かに行くのか？」

「はいですの、これからちよーっと仕事がありまして、ストーキングしているところある男性を退治しに行く所ですの」

その言葉を聞いたガウエインは少し目を細める。

因みに騎士先輩とは、黒^{くろ}軋^{ぎし}のきしから取って呼ばれているらしい。それ以外にもガウエインの行動や性格によって「騎士」の名が合っていることを学園の殆ど生徒が知っている。

「荒事や運送係は俺じゃなかったのか」

「騎士先輩は恰好とかがこの御伽学園や御伽花市で有名ですから無

理ですの、それに騎士先輩には『黒騎士』の二つ名が持ってあるの
で・・・やっぱり無理ですの」

「そういうこった、わりいな、騎士先輩」

そして、赤髪の女の子の後ろからまるでスケ番のような恰好をした
女の子が出て来た。

紺のセーラー服タイプの制服で、スカートが長く、動きやすいよう
に左右にスリットが入っている。

その為に時折見える足が艶かしい。

「涼子か、御伽銀行の『赤頭巾』と『おおかみ』が出ると言うなれ
ば、俺は不要だな」

ガウエインの目の前にいる二人の女の子たちは、ガウエインが所属
する組織『御伽学園学生相互扶助協会』という非営利組織の仲間で
ある後輩だ。

スケ番のような恰好をしているのが大神涼子おおかみりょうこで小さ過ぎて高校生な
のか、と疑いが掛かるほど小さい女の子は赤井林檎あかいりんごと言う。
知る人は知っているが、知らない人はまったく知らない二人組であ
る。

ガウエインは買って来た菓子をおオカミさんとりんごさんにあげた。

「怪我はするなよ、危なくなった必ず連絡を寄越せ」

ガウエインは力強い眼差しで二人に言うと、二人も力強く頷く。

「危なくなつた頼むよ、騎士先輩」

「頼りにしてるのですの、騎士先輩♪」

オオカミさんとりんごさんはそう言って歩いて行った。

ガウエインは二人を見届けた後にプレハブ小屋に入る。

そこには汚いソファーやボロボロの椅子。ガウエインはそのままキツチンの中へと向かう。

キッチンにはくすんだステンレスの流しに錆びたコンロ、大きいがボロの食器棚。ガウエインは食器棚に触れ、大きな食器棚を片手で開けるとそこには地下へと続く階段があった。

誰かが秘密基地みたい、とか言ってきそうな雰囲気だ。

ガウエインはそのまま地下へと降りて行った。

そしてとある大きな部屋の扉を開けると、

「いやー、やっぱり早いね？ バイクは？」

「頭取、菓子です」

ガウエインが入った部屋には、地下とは思えないほど広い空間の部屋で、部屋の左は壁一面本棚でさまざまな本や資料などが所狭しと並び、右側には大画面液晶テレビやDVDプレイヤー、ゲーム機に巨大なスピーカーとどこのお金持ちの部屋かといういたれり尽くせりっぷりの部屋で。正面に見えるのは社長室にでもありそうな大きな机と革張りの椅子。机の上には液晶モニター。その後ろの壁には大きな書の掛け軸があり、そこには達筆で『あなたより大切な物はないこともない』と微妙な文が書かれていたら、足元にはふかふかの絨毯。部屋の中心には正方形のテーブルが置いてあり、その三辺には座り心地の良さそうな高級ソファーが置いてある。

「お帰りなさいませ、ガウエインさま」

「おー、おつうか」

おつうと呼ばれたメイドの恰好(?)をした女性はガウエインに
っこり微笑んでお辞儀を一つしてきた。

ガウエインは買ってきた菓子をおつうに渡す。

「補充だ」

「はい♪」

菓子を受け取ったおつうはそのまま地下本店にあるキッチンへと向
かって行った。

このメイド服に身に包んだ少女は鶴ヶ谷おつうと言って、ガウエイ
ンと同年であり、同じクラスである。

「さっき涼子たちと会ったのですが、依頼内容はなんなんですか？」

ガウエインは高級ソファアに座ってどんな依頼の話なのか訪ねる。

「別れた彼氏が未練がましく、何十回もストーキングするらしく、
そのストーカーを退治しに大神さんたちを行かせました」

答えてくれたのは御伽学園高等部三年、御伽銀行の副頭取である桐
木アリスであった。まんま秘書のような恰好をしていて絶対零度の
切れ目を持つクールビューティーの女性だ。

「ストーカー……危なくないのでしょうか」

「まあ、大神くんが居るから大丈夫だと思うよ？」

そして、この御伽銀行の『頭取』、つまり責任者を務めているのが、マイナスもプラスもなく、目立たない容姿をしていて、髪の毛は短く切り揃えられている。服装はなぜか燕尾服であり、白いタイがまぶしく見え、黒いベストを身に付けているため体型はよく良く分からない、だが机の上で組んだ手は男とは思えないほど白くほっそりとしている。その細面からもやしっ子という言葉がしっくり来そうなのが桐木リストという少年だった。

何故、アリスと同じ苗字だと言うとリストとはいとこ同士だかららしい。

「……頭取のその曖昧で断言しない口調は相も変わらずですね」

ガウエインはチラーと頭取を見てみるが、顔をゆっくりと逸らす。

「何かあったら連絡を、と伝えておりますから、黒軋くろぎしさんは何時でも行けるように準備をお願いします」

「最初から出来てますよ」

ガウエインは立ち上がり、扉へと向かった。

「では、ご苦勞様です。無事大神さんたちが依頼達成したら、後ほど教えてあげます」

アリスがそう言うのと、ガウエインは片手を軽く上げパタパタしながら出て行った。

広い部屋に二人きりとなった頭取とアリス、だが二人共静かに出て行った二年生後輩について話す。

「うん、一年の頃よりは十分愛想良くなったんじゃないのかな？」

「そうですね、まだ少し感情の無さを感じさせますが……」

「そうだね？　まああとは魔女くんにも任せようか？」

「……………」

「あ、あれれ？　きゅ……急にどうしたのかな、アリスくん？」

「こんな時でも人任せとは、さすがは“駄目人間”を名乗るだけあるな、と思ひまして」

「え？　あれ？　僕そんな自虐的な名乗った憶えが無いんだけど」

どなく？　あと『駄目人間』と言う言葉に妙に強調してなかったかい？」

「現実且つ、事実且つ、真実を述べたまでなのですが、何か？」

「ア、アハハハ？……………」

部屋には頭取の苦く乾いた笑い、苦笑いが音響していた。

コンコン

「入るぞ、マカ」

「良いヨー」

ガウエインは部屋から出ると、すぐ近くにあった部屋にノックをして入る。

そこには大きな本棚に数々のオカルト的な本が並べられており、部屋の真ん中には大きな鍋のような物が置かれていた。鍋の中の色が紫色になってグツグツと何か煮込んでいた。

他にも黒魔術に用いる陣や魔術の参考書やら、何やら怪しい物が盛り沢山集合していた。

ガウエインがそう思ったのは物の一分、その一分後には侵入者を撃退する為の迎撃用トラップが発動した。
シュン！

「・・・・矢？」

ガウエインは駆けてくる矢を素手で掴む。だが、その矢の鋒さきには袋のような物があり、それが破裂する。

「コシヨウか」

袋の中には小数のコシヨウの粉が入っており、ガウエインの顔面に

ぶちまかれようとした。

だがガウエインは軽く数歩下がり、それを回避した。
だが、

カチッ

(ん・・・?)

「掛かったヨー！」

ガウエインは何かのスイッチのようなものを踏むと、上から十数個の鉄球が降ってきた。

だがガウエインはまた表情を変えずに鉄球を素手で払う。

ガガガガ！

鉄球は床へと落ちて、見事な重さで床を凹ませる。

が、ガウエインは手違いで鉄球が上手い具合にマジョーリカに飛んでいってしまった。

「ヨヨヨー!？」

マジョーリカは思いもよらなかった展開に反応出来ず、固まっ
ていと、

ガシッ！

鉄球はマジョーリカの目の前で止まった。

「済まない、まさかそこまで飛ぶとは思わなんだ」

ガウエインは瞬時に鉄球を掴んだのだ。

マジョーリカは驚いた、あんなにも離れていたのに、瞬時にここまです移動するとは、と。

「マカの悪戯も段々と上がっているように思うのだが？」

「実験の為だヨー♪」

とニカッと笑って来るマジョーリカ。

御伽学園高等部二年生であり、ガウエインと同じクラスでもある。

服装は黒衣のブレザー（丈が長すぎてローブのようになっている）

と三角帽子、簡単に魔女が被るようなトンガリ帽子を被り、牛乳瓶底ぐるぐる眼鏡と正統派魔女ルックの姿だ。

髪はストレートの金髪で地に付くほど長い。

外国人の風貌だが日本人であり、その事で昔ちよつとした事件があったが、それはまたのお話。

「……俺の前までそんな喋り方なのかな？」

笑っているマジョーリカにガウエインは微笑み返しながら聞く。

「ならまずそっちから普通にしろヨー、……そんな言い方じゃなかったよね？」

マジョーリカはグルグル眼鏡を少し下げて、眼鏡の脇から綺麗な瞳をガウエインに向けて素の言い方になりながら呟く。

「ごめん、祖父から色々なこと叩き教えられたら、こんな変な言い方になっちゃったんだよ」

ガウエインも素の状態、というより楽な話し方でマジョーリカと向き合う。
すると、

ガシッ

マジョーリカはガウエインにいきなり抱き付いた。

だがガウエインの身長は御伽銀行の中で一番長身であるからして、マジョーリカは丁度ガウエインの胸板に顔が当たり、埋もれている感じになった。

見た目は、優しいお兄さんに抱き付いている甘えん坊な妹を連想させる。

「・・・さっきはごめんね、迎撃用トラップを仕掛けないと、その、ガ・・・ガーくん安心して話せないから・・・」

「・・・（イジイジ）」

「あぁー♪ やっぱガーくんの懐は安心するなぁ♪ ふむゆふみゅー♪」

「・・・(さわさわ)」

「・・・髪フェチにも大概だよガーくん、無言で私の髪をなぞったり、見つめたりしないですよー」

マジョーリカはずっとガウエインの胸に顔をむふむふさせていたのだが、肝心のガウエインは綺麗で長いマジョーリカの金髪を弄っていた。

「・・・綺麗だ」

「・・・ん？」

「綺麗だよ、マカ」

「・・・うん」

マジョーリカとガウエインは互いに顔を向き合わせる。ガウエインは真剣な顔でマジョーリカに言う。

マジョーリカも真剣な顔をしているが、互いに違う所を見ていた。

(たぶん髪だ)

「この輝く艶つややか金色こんじきの美髪」

やっぱり、といった感じにマジョーリカは片手でガウエインの隠れている片方の髪を上げて、左目を診る。

「・・・痛くない？ ガーくん？」

「……ん、ああ。痛感覚の反応は無しだ」

こんどはちゃんと反応してマジョーリカの問いに答える。

「そういう時は『痛くないよ』でしょ、まるで自分の身体じゃなくて、他人の身体を診ている感じだよ？」

「痛くないよ」

マジョーリカはぷくぷくと可愛らしく頬を膨らませてガウエインの言い方を直させると、ガウエインは正直に直して言い返す。
それを聞いたマジョーリカは満面な笑顔でガウエインに再び抱き付いて呟いた。

——そうだよ——

ガウエインとマジョーリカはマジョーリカの工房、ガウエイン曰く《魔女さん工房》と名付けたらしい。

その工房の中でガウエインとマジョーリカは椅子に座りながら話をしていた。

「また何か造ってるのか」

「そうだよ♪　ちょーっと電気回路が繋がらなくて困ってるんだけどね」

カチャカチャと器用に作業をするマジョーリカを眺めるガウエイン。それがガウエインの日課になっていた。

クラスでも一緒だと言うのにガウエインはマジョーリカを安心しきったような目で見つめていた。

この学園に来て、ガウエインは少しずつだが変わっていった。

常識的な知識は祖父やマジョーリカ、友達に教えてもらったり、感情も一部分ずつ回復していつている。だが完全では無い、『歓喜』『恐怖』『怒』『悲しみ』と限りがあった。

だがガウエインは感じていた。

マジョーリカのお陰で俺は死なず、生き、未来を歩むことが出来ているのだと……。

「マカ」

「ん？」

「ありがとう」

ガウエインはマジョーリカをまっすぐ見て、そう言った。

マジョーリカは「何が？」といった感じにポカンとしていたが、ガウエインの顔を見てマジョーリカは微笑みを浮かばせ、

「どう致しまして♪」

ガウエインの頭を撫でていた。

騎士が魔女に救われたお話。

第3話「騎士と魔女と」(後書き)

おかしな点などがありましたら、報告お願いします。

第4話「円卓の騎士」(前書き)

今回はアーサー王伝説にも登場する王直属の騎士『円卓の騎士』達が登場します。

やっぱガウェインと言えば円卓の騎士だな、と思いオリジナルキャラで登場させました。

かなり可笑しくなっちゃったかもしれないかもしれませんが、面白く書きたかった故なのです……………悪気ありません(涙)

第4話「円卓の騎士」

ガウエインは朝早く起床し、御伽学園に来ていた。

何故こんなにも早く来ないといけないかと言うと、理由は簡単であり、それは。

「あゝ、来た来たあゝ♪」

「……遅い」

そこには黒曜石の瞳と、頭の上でまとめられた髪はゆるりと流され腰の辺りで揃えられている女子高生が二人立って居た。その黒く濡れた長い髪に若干の興奮を覚えるガウエインだったが、ここは自制し、普通の対応。

「おはようございます、桃子先輩。今日もお早い通学で」

ガウエインは勿論のようにバイク通学だ。

だが、御伽学園の生徒はあまりバイクを乗らないらしく、バイク通学をしているのは唯一ガウエインだけだ。

相変わらず騎士甲冑のようなライダースーツに身に纏っているガウエインは門の近くで降りる。

「早起きは三文の徳よ〜ん、それより、こっちにも挨拶しなきゃ、ダメよ〜」

そして御伽学園の校門に立って居たのはセーラー服を着た女子高生なのだが、何分そのセーラー服はけしからん位に改造されてあったのだ。

まず、おへそが見えている、つまり裾が異常に短く、スカートも短い。最早ミニスカだ。

そして腕には風紀委員の腕章。つまり風紀委員に所属しているらしいのだが、完全に風紀にケンカを売ってるしか思えない恰好をした風紀委員だった。

外見的に「乱れる性、最近の十代」とかいう感じでいかがわしい週刊誌の中扉くらい飾りそうな露出度だ。
だがこれで女子高生で通る範疇らしい。はんちゅう

そして何より、何よりも目立つものを持っている女子高生であるのも事実。

胸のボリュームが女子高生レベルではない。

反則？

異常？

負担荷？

危険？

エロい？

なにもかも当てはまる。

そして腰にはゆるく何重にも巻かれた革のベルト、それがその白い腰を美しく引き立たせている。

女子高生ではなく女王様である。

『黒騎士』の異名を持つガウエインにとって、騎士故か、それとも

何かに目覚めよう故か、とてもじゃないが逆らえなかった。

そして、女王様の隣に立っているのは、白い髪を背中まで伸ばした、これまた『美』が付くほどの少女が立っていた。

恰好もまた独自で改造されており、ドレスと鎧を上手く組み合わせたような恰好をしている少女はガウエインに一睨みする。

「何故私には挨拶をしないのですか、黒靴ガウエイン殿？」

「これは申し訳無い、だが朝から睨まれてはこちらとしても困るのだが……、フェイル」

「ふん、私の名は確かにフェイル・サーベル・ド・ランスロットですが……気安く貴方に名で呼ばれる間柄ではありません」

フェイルと呼ばれた白髪美少女はガウエインと顔を逸らす。

「ああん♪ そっぱを向くフェイちゃんも可愛いわねえ♪」

そして女王様こと、桃ちゃん先輩はフェイルを豊満な胸に押し寄せ、埋もらせた。

因みに桃ちゃん先輩は両刀使いであります。

「はぶっ！　ちょ、吉備津先輩殿！　く、苦しいー！」

フェイルはバタバタと暴れるが一向に離さない桃ちゃん先輩。見馴れた風景にガウエインは愛用バイク“GALL-10”を校門の通

り道を邪魔にならぬ所にお氣に行く。

何故ガウエインがこんな早朝に御伽学園の校門に来ているかと言うと、基本的にガウエイン個人で桃ちゃん先輩の手伝いに来たのだ。ガウエインは根本的に、絶対的に人に頼まれたり、女性の人から頼まれた事はほとんど苦い顔せずに『手伝い』をしているのだ。

祖父に教わった教である『騎士道』の中の一つ“親切心”と『武士道』の徳目の一つ“信”を貫いているからである。

と、カッコ良く言っているが、簡単にガウエインは女性からの頼みを上手く断れないだけであるからだ。

ガウエインも無理難題を押し付けられても、別に良いか、という考えを持って行なっているので器の大きさを良く分からせる性格だった。

勿論、女子だけの頼みを断れないだけでは無く、見事に男子からの頼みも断れないらしい。

「騎士道の一つ“寛大さ”」

ガウエインは呟きながら、黒いコートを靡きながら桃ちゃん先輩の元に戻り、風紀委員の仕事の手伝いをしたのであった。

因みにフェイル・サーベル・ド・ランスロットは生徒会に所属しており、風紀委員の手伝いにかもしだされていたらしい。

※

時間は過ぎて昼頃、ガウエインは一人屋上にて読書をしていた。

読んでる本にはカバーが付いている為なにを読んでいるのか分からない。

だが、ガウエインはかなり集中した瞳で本を読んでいる。するとそこに、

「よう、こんな所に居たのか、ガウエイン」

「一人だなんて、寂しい過ごし方してるわね」

ガウエインは本から目を離して見ると、目の前には金髪を独自に編んだ髪が特徴な青年と、長いオレンジ色の髪をした女性が居た。

「取須^{トリス} 弾^{タン}と萌仁^{モニカ}香・ルーカンか、どうした」

「ご挨拶だな、寂しそうに本を読んでいるガウエインを見つけたからやって来たって言うのによお♪ あと俺をトリスタンと呼べ」

「……名は弾^{タン}だろ」

「いや、トリスタンだ、苗字と名前を付けるのは確かにおかしいが、トリスタンだ」

「……また面倒なことになってるんだな、萌仁香」

「なんでフルネームで呼ばれたんだろうと考えている私って……
・もしかしたら今というKYなのかしら！」

「聞いてないか」

取須弾ことトリスタンは、自分の名前と苗字のことに暑く語りながらガウエインの横に座り、ルーカンは空いているもう片方のガウエインの横に座った。

「それで、何か用」

ガウエインは本に目を戻しながら二人に聞く。

「んゝそうだなゝ、萌仁香が言ってく……」

「嫌よ」

「即答スか!!? 最後まで言わせて!」

「さん、ハイッ! どうぞ」

「ええッ! いきなり! え、あつ、えと、んゝそうだなゝ、萌仁香が言ってくりえ……囁んだ!!」

とトリスタンとルーカンが漫才をしている中、ガウエインは本を五ページくらい読んでいた。

「分かったわ! 自分で言あわい! あのな、ガウエインに学園から、いや……《学園を守護せし円卓の騎士》から命が出た」

トリスタンは真面目な表情になってガウエインに告げた。ガウエインもトリスタンから出てきた《学園を守護せし円卓の騎士》という言葉に反応する。

「最近になり鬼ヶ島高校の生徒たちの行動範囲が広がっているみたいなよ、そこで鉄馬バイクを持っており、《円卓の騎士》内で『最強』の称号を受け持っている黒靴ガウエインに正式に荒神洋灯あらがみらんぶ学園長から命が下りました、という話なのよゝ」

ルーカンの言葉を聞いたガウエインは少し訝しげな顔をするが、承諾したように、本を閉じて、言う。

「《円卓の騎士》の一人、この黒靴ガウエイン、主しゅである荒神洋灯パトロール学園長の命により今晚から市内の警邏パトロールを実行する、以上」

横になりながら答えたガウエインだった。

「《円卓の騎士》の一人、この取須 弾、騎士ガウエインからの命令実行の意思を確認、貴公の武運を祈る。まあテキトーにやっつけ」

「《円卓の騎士》の一人、この萌仁香・ルーカン、騎士ガウエインの命令実行意思を確認、貴公の武運を祈る。……大変だけどがんばってね」

トリスタンとルーカンも最初は真面目な顔をして、後はガウエインを労う言葉を掛ける。

《学園を守護せし円卓の騎士》

それは学園を己の武力で護る為に結成された組織であり、学園長である荒神洋灯を主とした十二人の『騎士』が存在している。

ガウエインはその《学園を守護せし円卓の騎士》の一員であり、御伽銀行の一員でもあるのだ。

正式名称が《学園を守護せし円卓の騎士》なのだが、長いので《円卓の騎士》と略されている。

そして、その『騎士』となった者は学園を護り抜き、無事に卒業までいけば学園長からなんでも願い事を叶えることを約束され、護れなければ白紙と、かなり際どい仕事なのだ。

だが、ガウエインは荒神洋灯に“借り”を作ってしまった為に上手く利用されているガウエインなのだ。

《円卓の騎士》メンバーと別れ、自分のクラスにへと戻ろうとしたガウエイン、すると廊下でぴよこぴよこと歩いて来るピンク色のツインテール女の子を見掛ける。

背はあまり高くないが、細身の身体はすらっとした印象を与え、ツインテールに纏められた長い髪はどこか兎の耳を彷彿とさせる。つぶらで大きな瞳以外の顔のパーツは小振りで、どこことなく可愛らしい愛玩動物のような雰囲気を漂わせている。美人というより、可愛いという言葉が似合う少女だ。

ガウエインの顔見知りな為に声を掛ける。

「宇佐美か」

「アラア、騎士くんじゃない。相変わらず長身ね」

宇佐美と呼ばれた少女は長身であるガウエインを見上げながら答える。

容姿に合わせるように制服も少女趣味な改造が施されている。白を基調とし所々にピンクをちりばめたゴスロリファッションと化した御伽学園指定制服のなれの果ては、しかし、とても宇佐美には似合っていた。

そしてガウエインは、自制していた。
己の欲望を抑えて、

（相変わらず何て綺麗なピンク色の髪なんだ、あの二つに別れさせたツインテールなんて最高な組み合わせだ、そして何より……長髪だ……）

ガウエインはそれはもう必死に抑えながら、宇佐美と向き合う。

「……？……どうかしたの騎士くん？　　なんだか目が痛いことになってるわよ」

宇佐美はギンギンと隠れていない片方の目を見開きながら、何気なく髪を直視しているガウエインに訪ねる。
だが、ガウエインは我慢出来ず、制御解除リミッターアウトしてしまった。

スサツ

「えっ！」

ガウエインは宇佐美と同じ目線にする為に膝を床に付けさせて、宇佐美と見つめ合う。

まるで騎士が王女に跪くひざまずような体勢になり、そしてゆっくりと、ガウエインは宇佐美に近付いて行く。

「へっ……あっ、なっ……」

「動くな、宇佐美」

ガウエインは優しく、そして何処か凛々しく宇佐美に言う、すると宇佐美はピシッと固まる。

※注意

廊下です」(ゝゝ；)」

ガウエインは手を伸ばし、そして、

「髪に、ホコリが付いている、今払うから動くなよ」

何気なく酷い事をポツリと言ったガウエインなのだが、宇佐美は目の前で起きている事態で頭が回転してなかった。

ホコリのある場所に赴いたのならまだホコリが被る理由が分かるのですが、普通にしていた人の頭にホコリがあるなんて、あるハズがありません。

つまりそれは風呂に入っていないという意味になりうるかもしれませんが、失礼な言葉だと思うのですが………本人はそれどころじゃ無いみたいです。

(あああゝっ♪ マカの金色に輝く金髪も良いけど、宇佐美のこのピンク色の髪はかなり、かなり触り心地が……良い！)

ガウエインは宇佐美の髪を弄りながら見つめる。

※注意

廊下だっつーの(ノ<ヅ>ノ

「ちょ……ちょっと、恥ずかしいわよお」

宇佐美は顔を赤くして言う。

「ま、まだホコリがあつてだな、もうちょっとだけだから・・・
綺麗だな」

ガウエインの発言一つ一つに宇佐美は顔を赤くして、逃れようとするが、ガウエインの大きな身体で覆われておる為に、逃げられない。

だが、そこに、ガウエインにとっての「抑え付け」がやって来たのだ。

「・・
・・・・・・・・・・・・・・・・ガークン」

ビクッ!!!

果てしなく驚いたガウエインは思わず体勢を崩してしまい。
宇佐美を押し倒す形になってしまった。

「きゃ、きゃあ／＼／＼／」

「しまっ!」

ガウエインはずば抜けた身体能力で宇佐美を上手く庇うようにして廊下に倒れる。

だが、上手い具合に宇佐美を胸の上に抱き上げた恰好で倒れてしまっている。

ガウエインはすぐに興奮していた己の欲望が血の気を引くようになっていく。

そして、目の前には、

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ニコニコ）」

満面な笑顔を浮かばせ、片手にバズーカを構えている、金色の魔女が居た。

「宇佐美呼び止めて済まなかったあと髪を触らせて貰ってありがとうそれじゃ」

物凄い早口で宇佐美にそう言うや、ガウエインはすぐに廊下の窓を開け、そして、

「とう！」

飛んだ。

「ちょっ!!!?」

宇佐美にとって驚愕過ぎる展開で最早思考が追いつけなかった。だが飛び降りたガウエインに追撃しようとする人物が唯一人居た。それは、

「アハハハ！ 待つヨー！」

マジヨーリカだった。

ドガアアアアン！

マジョーリカは容赦無く黒大砲^{バズーカ}を発射^うつ。
だが、弾は流石に火薬では無い、だが、

「バブツ！？　　こ、これは水玉か！？」

砲弾はゴム袋に水をギュウギュウに積みし込んだ水玉だった。
ガウエインは空中でマジョーリカ特性水弾を受け、体勢を崩し、地面へと落ちていった。

「あんた何してんのよ！？」

宇佐美は当然に落ちていくガウエインに弾を放ったマジョーリカに驚きながら、窓からガウエインを見る、するとガウエインは糸も簡単に地面に降り立つ。

「……甘いな、マカ」

ガウエインは上に居るであろうマジョーリカに、挑戦的な瞳で見ると、濡れた恰好のまま逃走に掛かろうとする、だが、

「ぐふふふ☆　　甘いのはそっちだヨー♪」

（なに？）

マジョーリカは牛乳瓶底型眼鏡をクイっと上げて不気味な笑みと、
黒大砲^{バズーカ}を肩に掛けながら言う。

ガウエインは疑問に思い、自分の身体をもう一度見ると、段々と水弾で受けた濡れた場所が白くなり、固まっていた。

「こ、これは」

「それは特別な液体で作ったヤツだヨー♪ 乾燥すればコンクリートのように硬化し、動けなくなるヨー♪」

マジョーリカの言った通り、濡れた場所から次第に白色に変わり、硬い錘のように重くなっていった。

（こ、これは……）

「ヨヨ〜ヨ♪ 今日こそガーくんを止めてみせたヨー！」

「いけるな」

「待ってるヨー、今すぐ行って私の研究に手伝ってもらおう……ヨ？」

ガウエインは硬化したままガシנגアシンと歩いて行った。

「んなー！」

「確かに硬くなってはいるが、普通に歩ける程度だ」

ガウエインはそれだけ言うと、すぐに逃走していった。

「しまったヨー！ 普通の人間なら動かなくなるけど、“ガーくん”には効かなかったヨー！」

マジヨーリカはすぐにガウエインの後を追って行くのであった。

「一体なんなのよ・・・」

そして途中から空気になっていた宇佐美は、凄すぎる二人を見て啞然としていたのであった。

※

「なるほど、了承したのじゃな、黒軋は」

「はい・・・しかし何故アイツなのですか、荒神理事」

「そうじゃのう、簡単に黒軋は移動手段に困らんじやろうし、鬼ヶ島の生徒がおっても簡単に蹴散らすじやろうて、故に黒軋に任したのじゃ」

「……確かに『円卓の騎士』内では黒軌ガウエインは強いかもしれませんが、純粹に強さだけならラモラックの方が――」

「確かにラモラックも言わずと知れた強者^{つわもの}じゃ、しかし故に純粹だけの強さだけでは最強になりえぬのじゃ」

「では……黒軌ガウエインにはその『純粹の強さ』以外の何かを持ち合わせておられると、言われるので」

「そうじゃな。その通りじゃよ」

「……………」

「理解しかねるかの？」

「いえ、理事長^{おうち}の命は絶対であり、仕えし騎士は命令^{それ}を実行するまですでございます」

「敬意を払うのは結構じゃが、社会に出たらどうなるのじゃろうな、お前のその性格は」

「……『学園を護りし円卓の騎士』は理事長^{おうち}命を受け、騎士ガウエインは命を実行する確認を確認、私はこれにて……」

「むう……忙しい奴^{せわ}じゃのう。じゃが、黒軌ガウエイン、あ奴はなかなかの逸材じゃ、儂の荒神財閥に必要な……な」

第4話「円卓の騎士」（後書き）

まさかの吉備津桃子さんこともちゃん先輩登場です、ももちゃん先輩に関するオリジナル話も考えておりますから楽しみにしといて下さい（＊＾Ｏ＾＊）

それとどうでしたか？

円卓の騎士さんたちは？

是非是非感想やコメントをお待ちしておりますので、気軽に書いていって下さい！

第5話「騎士と獵師」 (前書き)

ちよつと変になつてゐるかもしれません (汗)

何せ夜中に投稿したので (汗)

オオカミさんと七人の仲間たち第二期を密かに期待しちゃってます・
・・・。

第5話「騎士と獵師」

「この場所に降ろせば良いんだね？」

そう言っただけでガウエインはゆっくりとだが校庭に置いてあったサッカーで使うゴールを、誰も来なさそうな場所に置いた。

「あ、相変わらず。凄いわね、騎士くん……」

とても一人じゃ動かせないであろうサッカー場にある白いゴールをガウエインは掴み、浮かばせて、邪魔にならない所に移動させた。

「よっと」

どんっ！！

ガウエインはゴールを置く。

「また何かある？」

「う、ううん。もう無いよ、ありがとうね黒靴くん、御伽銀行って以外と頼りになるんだね」

「これから御伽銀行を宜しく」

※

ガウエインが手伝っていたのは陸上部の皆さんで、授業でゴールを出したのは良いが片付けてなかったので、練習が出来なかったらしい。

ならば、皆で動かせば良いのでは？　と思うのだが、そこにもきちんとした理由があり、今現在の御伽学園のサッカーゴールは超合金やら、ガンダムに使うガンダニウムやら、闇の結社が特殊な武器を作っている材料がオリハルコンなどで出来てあり、サッカーゴールを運ぶ為の運搬車があるらしい、何故そんな風に作られたかと言うと、卒業して行った先輩達の中で、何故か『作りたい！』と考えた人が居たらしく、秘密裏に作られていたらしい。

そして、そんな超重量のサッカーゴールを運ぶ運搬車がその日に限って修理に出していて運べなかったらしい。

そこで、学園で幾つもの問題（荒事）を解決してきたガウエインに頼み込むと、ガウエインは普通に了承して、見事に運搬車しか運べないサッカーゴールを運んだのだ。

「うーん・・・・・・・・・・以外と重かったな」

そして運んだ本人はまったく表情を変えないで、御伽銀行本店に戻っている途中だった。

「よう、ガウエイン。またまた相変わらず無表情のまま歩いてやがるな」

「・・・トリスタンか」

ガウエインは声を掛けられた方を見ると、金髪に独自に編んだ髪が特徴な青年、取須弾トリスタンが居た。

「これから何処行くんだ？」

「御伽銀行だ」

「んゝ、そうか」

ガウエインはスタスタと御伽銀行があるプレハブ小屋に向かおうとするが、何故かトリスタンも付いてくる。

「・・・何か用があるのか？」

ガウエインは付いてくるトリスタンに質問する。

「いやあ、暇だから付いてっただけなんだけどね。ついでに御伽銀行に寄らせて貰おうかなと♪」

「餌をやるから何処かに行ったらどうだ」

「あっはっは、人を犬みたいに言うなよなあ」

トリスタンはニカニカしながらガウエインに答える。ガウエインも溜め息を吐きながらまた歩を進める。

（別に良いか）

ガウエインはそう思いながら御伽銀行へと戻って行った、若干一人を足して。

※

ガウエインとトリスタンは御伽銀行地上店と言い張る、ボロボロなプレハブ小屋に着くと、ガラガラーとドアが開く。

「・・・！・・・騎士先輩」

「うん？ 涼子か」

ドアから出て来たのは御伽銀行に所属している一年の大神涼子で、何やら苛々している雰囲気だった。

「・・・失礼します」

「ああ」

大神はガウエインの横を通り過ぎ、帰って行った。

「なんだ、なんだ？」

そして一緒に居るトリスタンは若干自分だけ挨拶されなかった事を

気にしつつ、今の展開に興味を示す。

ガウエインはトリスタンを無視してプレハブ小屋に入ると、そこには前髪を下ろして目を隠している男の子と、御伽学園で『赤頭巾ちゃん』と有名なロリキャラの赤井林檎が居た。

「お帰りなさいですよ、騎士先輩、あら？ トリスタン先輩も一緒ですよ？」

「失礼しますよ、赤井ちゃん」

林檎が帰って来たガウエインと、トリスタンに挨拶をする。

「依頼は無事に終了した。副頭取に連絡をしといてくれ」

「はい、分かりましたですよ」

「あと、邪魔だったか？」

ガウエインは物凄くビクビクしている男の子に申し訳無く言う。

「あ、あれ？ ガ・・・ウエインさんですか？」

そしてビクビクしていた男の子は、ガウエインを見るとハッとする。

「うん？ 君は・・・ああ、りょうし亮士か」

「はいッス！」

ガウエインに気付かれたビクビクしていた男の子、亮士はガウエインに名前を呼ばれて元氣の良い挨拶が帰って来た。

「ご存知なのですか？」

「ああ、同じ寮で暮らしてる」

ガウエインはそう言いながら壁に寄りかかる。

「それで、何かあったのか？」

ガウエインがそれを言うと、亮士は黙ってしまった。

「何か訳ありね」

そしてトリスタンは興味津々に理由を待つ。

「まあ、かくかくしかしかかなのですの」

「そうか、この前の仕事でストーカーに襲われた涼子は影でジッと見ていただけたの亮士に怒って出て行ったのか」

「えっ！？　今ので分かったの！？」

「しかも亮士は涼子に惚れていて、告白したのは良いが、視線が怖くてヘタレになっていると・・・」

「マジで！？」

「だが亮士も亮士なりに涼子を守るように援護射撃をしたと・・・言う訳か」

「はっ！・・・ま、まさかの読心術を心得ているのかガウエイン！」

ガウエインが次々に理解していつてるのに驚愕を示すトリスタン。

「凄いスね・・・ガウエインさん。でも・・・何を言おうと、飛び出せなかったのは変わらないっスよ。人前に出るとヘタレて身体が思うように動かなくなる、それが分かってたっスから。あの十数メートルはおれには長すぎたんスよ。・・・情けないっスね。あれほど自分が情けなかったことはないっスよ」

林檎とガウエイン、トリスタンは黙って亮士の独白を聞く。

「それなのに告白したのはっスね、すぐ側にいれば、突っ立ってるだけでも盾変わりにはなるだろう・・・そう思ったからなんっスよ。でも・・・考えてみればこれも逃げっスよね、自分を変えようとしていない」

・・・ほんと情けない。

ガウエインの耳に亮士の最後の一言が届く。

亮士はその一言を絞り出すようにそう言って、立ち上がった。

「それじゃあ帰ります。どうもっした」

とぼとぼと部室を出ていった亮士、ガウエインはその後ろ姿を見て少し寂しい目をする。

「・・・亮士」

「・・・んまあ別にな、盾になるだけが『守る』って意味じゃない

と思うけどな、俺は」

「私もトリスタン先輩と同じ意見ですの、でも、まあ、男の子的には騎士ナイトになりたい年頃なのかもしれないのですの」

三者三様の反応する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・んーやっぱり欲しいですね」

「亮士をか？」

「ハイですの！ 涼子ちゃんの内面を見抜いた彼なら頑なな涼子ちゃんをどうにかできるかもしれないですし、何より・・・・・・・・」

一旦言葉を切った林檎にトリスタンは不思議にがり、聞いてみる。

「何より、どうしたの赤井ちゃん？」

「ふふふふ、二人を絡ませるといじりがいがさらにありそうですのよ。でも涼子ちゃんは頑固ですし、今の状態で森野君を受け入れるなんてのは余程のことがない限り無理でしょう。ほんと、ままならないものですのねえ」

（な、なんて子なの！？）

そう静かに頭の中で思ったトリスタンでした。

※

ガウェインは受け持った仕事を全部終わらせたので、お馴染みの魔女工房へと向かうと、そこには。

「おジャマしてるよ♪」

萌^{モニカ}仁香・ルーカンが居た。

「・・・んで此処に萌仁香が居るんだよ」

「私も聞きたいな、と思ったら間違いかしらマジョーリカさん？」

「んゝ間違いじゃないヨー」

ルーカンとマジョーリカはグツグツと巨大な鍋が何かを煮込んでいる横でお茶しながらガウェインとトリスタンを見た。

「萌仁香か、どうしたんだ？」

「マジョーリカさんをお願いしたい物があってね、それより何で弾^{タン}が此処に――」

「タンじゃねえよ！ “トリスタン”だ！！」

ルーカンの間違いにトリスタンは怒り奮闘して訂正させる。

「良いじゃない、本名がタンなんだから」

「・・・嫌だ」

「私もそう思うヨー♪」

「嫌だ」

「俺もおも——」

「嫌だアツ!!!!」

「必死か!?!」

トリスタンは物凄い剣幕で本名を毛嫌う。

「この名でどれ程の苦勞をしてきたか分かるまい!」

トリスタンは近くに居たガウエインの肩を揺すぶりながら大声で叫ぶ。

「静かにしろよ・・・」

「いいいや! お前らには前々から一回俺の説明をするべきだったんだ! 良いか、この名前はな——」

——そして—— あれか

——俺は—— あの日か

——ら——」

急に自分の名前について詳しく、そして熱く語っているがガウエイ

ンの頭の中では、

(ああゝ髪触りたいや)

物凄い関係無いことを考えていた。

そして説明が終わったトリスタンは、

「——そして俺はこの『トリスタン』にプライドを持つようになったんだ、……分かったくれたか、ガウエイン」

「そうか、お前も大変だったんだな」

「お……おお！ やっと、やっと分かってくれたかガウエインよ！」

「ああ」

「おお！ 我が友よ！ 我が盟友よオォー！」

「髪は素晴らしいよな」

「何の話だアアアア！！」

正に感動な場面になり掛かろうとした瞬間に、トリスタンはガウエインの横を通り過ぎ、ガシャーン！ とマジョーリカが作った数々の発明品に突撃してしまった。

「てめえガウエイン！ 人が名前についてどれだけ熱く語っていたと思ってんだって……痛たたた！ 痛い何コレ痛い！ 手

が挟まったぞ！」

「おおー！ トリスタンも私の実験に手伝ってくれるのかヨー♪」

「実験って何ッ!? てか痛いんですけど、この鳥を捕まえる為のトラップ的な物！」

「おりよ？ ソレは『相手絶対逃避不能！ 必殺トリートラップ』だヨー！」

「何そのツツコミ所が満載な品名！ 取り敢えずコレ取れないの!? さっきから俺の肉の食い込みようが半端無えんだけど！ 痛えんだけど!?」

「取れないヨー♪」

「えっ、あつ、取れないの!? あっ！ そういえば『相手絶対逃避不能』とか前置きあったわ！ つうか痛い！」

「ぷっ（笑）」

「（笑）じゃねえよ萌仁香アアアア！！ てか食い込みようが半端無えよオオオ！」

痛いイイイイ！ とトリスタンが床を転がっている中、ガウエインは頭を押さえて考えていた。

また頭取にコキ使われるな。

ガウエインはそう思いながらトリスタンを足で止め、食い込んでいたトラップ的な物をガウエインは糸も簡単に取ってあげて、簡単に取れたことにショックを受けているトリスタンに『へボいな』と止めの一言に突きつけ、トリスタンのプライドと精神と“何か”をトリプルブレイクしたガウエインだった。

第5話「騎士と獵師」(後書き)

もつとマジョーリカとLoveって良いのか、分かんのですよ・・
・、(´ー、)ノ

Loveって良いスか？

そしてトリスタンはギャグキャラとして活躍していく予定です！

どうでしたか？

トリスタン(笑)

第6話「騎士の夜回り」(前書き)

睡魔と戦いながら書いたので、ちょっと変な風になってるかもしれないが、どうか暗黙を、暗黙をッ!!

暗黙オオオオオオ!!

第6話「騎士の夜回り」

ガウエインは夜の御伽花市を愛用二輪車“GALL-10”で巡回中であつた。

だが、ガウエイン一人だけでは無く、もう一人居た。

「うひゃあー♪ はやいヨー♪」

そう、マジョーリカ・ル・フェイと一緒にツーリングしているのだ。

「ヘルメットちゃんと被れよ」

ガウエインはかなり早い速度で移動しているのだが、軽い感じでマジョーリカのヘルメットを片手で、ポンツと叩く。

そう、今のガウエインの二輪車にはサイドカーを付けてあり、かなり無理そうな感じで取り付けられていた。だが、そこを不安にさせないべく、早い速度且つ安全運転をしているガウエインにも称賛に値する。

「今夜のGALL-10は走りが良いな、ステアの拳動もエンジンの響きも心地良いし、道路のコンディションも丁寧だ。思わず速度^{スピード}を出してしまう程に刈りたたされる！」

そして若干、二輪車が調子よく走る為にテンションが少し上がっているガウエイン。

「……荒神財閥が加わっている新型二輪車、超電動リニア二輪も気になるヨー！」

そして隣で少しガウエインのテンションに驚いていたマジョーリカだったが、ガウエインが好きそうな話題を振り掛けてみると、顔は無表情だが、ガウエインは目をかなり喜びを表しながらマジョーリカの話に花を咲かせていた。

「ふう・・・夜の外は寒いだろ、マカ。何か暖かい物を買って来るよ。何が良い？」

御伽花市を大抵巡回したガウエインとマジョーリカは、コンビニの近くで休んでいた。マジョーリカの恰好は、いつもの学生服に大きなローブを着、牛乳瓶底型の眼鏡を掛けてちょこんと座っていた。ガウエインの恰好も変わらない、黒いコートの上に、ヘルメットヘルメットとライダースーツと言う名の兜、そして甲冑を着ていた。

「んー、それじゃ私は冷たい炭酸水と、アイスが欲しいヨー」

「却下だ、聞いているだけで寒くなる。まあ・・・俺が適当に買っておく、マカの好物は熟知しているつもりだからな」

ガウエインは兜ヘルメットを被りながらは流石にコンビニに入れないので取り、スタスタとコンビニに入って行った。

（ふふふ、『マカの好物は熟知しているつもりだから』・・・か）

マジョーリカは頬を赤くさせながらサイドカーで待っていた。

※注意、高校生が大型二輪車と大型特殊二輪車、つまりサイドカーを付けたバイクは乗れませんよ☆★

「^{パトロール}警邏・・・か」

ガウエインたちは最近チラつく鬼ヶ島高校生が御伽^{ウチ}学園にちよっかい出しをしてこないかを見回る仕事を受け持ったのだ。
もしかしたら『荒事』になるかもしれないからだ。

そして、ガウエインはコンビニの中から外に居る奴らを発見させる。

（アイツらは・・・鬼ヶ島高校の奴ら・・・か）

外に居たのは、数人の学生で、結構な人数で集まっており、駐車を我が物として座っていた。

「・・・すみません」

ガウエインは店員に聞く。

「は、はい」

レジに居た女性の店員が反応する。若干ガウエインの恰好を見て驚いていたが、無視。

「あそこで集まっている学生はいつもああやっているのですか」

ガウエインは親指を外に向けさせ、質問する。

「ああ、はい。ここ最近なのですが、良く駐車場で集まるようになってああやって駐車を邪魔しているんです……」

女性の店員は溜め息を吐きながら言う。

するとガウエインは顔色変えずにこう答えた。

——俺が、なんとかします。

「きやははは！　でよく羽坂がよオ」

「マジで！？　アイツばかじゃねエの！？」

会話を花を咲かしている学生たちなのだが、いかんせん場所や時間帯が悪い。

そんな少年たちを叱る大人たちは居なかった。

だが、一人の少年が注意しにやってきた。

「・・・・・・・・お前ら、邪魔だぞ」

「あァん!？」

鬼ヶ島高校生の少年たちは注意しにやって来た相手を見てみると、

「・・・・・・・・何？」

「んっ！ お前は『黒騎士』!？」

鬼ヶ島高校の学生たちはガウエインを見た瞬間にさっきまでの去勢が無くなっていた。

「なっ、なんてたって此処に黒騎士が居やがるんだよ!」

「お、俺が知る訳無えだろうが!」

「俺達だって分かんねえよ!」

鬼ヶ島高校の各々たちは、互いに今の状況を理解しようとしていたが、その場に居た一人の学生が、

「オイオイ、何ビビってんだよ。御伽学園の奴だろコイツ、なら・・・」

ガウエインに近寄りながら、馬鹿にしたような顔でガウエインの胸ぐらを掴む。

「オウオゥウ、坊っちゃんが何の用だ! あァン!」

かなり威勢良く言って来た鬼ヶ島高校の学生の男、男は決まったぜ、
と言わんばかり決め顔をしていると、かなり焦った声が男に浴びさ
せる。

「ば、馬鹿野郎ツツッ！！ 黒騎士^{そいつ}に手を出すな！ “死ぬ”ぞ！
？」

焦った声で言って来たのは、この集まりで頭と思わせる大柄な男は、
手を出した男を止めようとしたが、

「遅い」

打撃。

たったそれだけだった。

「——ッ！！？」

ガウエインの胸ぐらを掴んでいた男は生まれて初めて脳が揺さぶら
れる感覚に襲われていた。

ガウエインが行ったのは簡単な一動作だけ。

ただ『殴った』だけだ。

たったそれだけで男は意識が飛んでしまう程の衝撃に襲われ、数本
の歯が折れて口から血が流血していた。

「・・・しまった、血を流させてしまったな。済まない。医者に行
くか」

そしてガウエインは無表情のまま、殴った相手が流血しているのに
気付き医者まで送ると言ってきたのだが。

「ひ、ヒィィ!!?」

「は、初めて人が人を殴り飛ばした所を見たかもしれねえ……
！」

「化物……化物だッ！」

他の学生たちは一目散に逃げしており、残りの鬼ヶ島高校の学生たちは
気絶して、パクパクさせている男を拾って、撤退していった。
駐車場に残った血痕が物凄く嫌な感じになっていた。

（面倒事は全部、あのエロ魔神にでも押し付けよう……うん、
それだ）

ガウエインはそう思いながら、買ってある暖かい食べ物や飲み物を
マジョーリカの下へと持って行こうとした。

※

「はあはあ……な、何なんですかアイツ！ 何であんな破壊力拔
群なパンチを持ってるんスカ！」

「俺が知るかよ！　とにかくこのバカを病院に連れてくぞ！」

鬼ヶ島高校の学生たちは散り散りになり、その日は解散となって怪我をした男・佐東さとうを病院に送り届ける為に走っている佐林さはやしと高山たかやまが居た。

「ああ！　でも、こんな暴力を働くアイツに訴えれば……」

そして佐林と呼ばれている男は佐東の後頭部を押さえながら高山に聞く。

「あぁ止めとけ、黒騎士アイツを訴えたいのなら、パトカーを30車くらい準備しないと無理だ」

高山は佐東の両足を担ぎながら走っていた。

「佐東は馬鹿だし、アイツと会うのは初めてだったから喧嘩を売ったが、圧倒的だったろ？　無知な奴ほど酷いものは無いな」

佐林はガウエインのパンチを思い出し、身震いをする。

「アイツ『戦才』せんさいなんだよ、戦いの天才、つまり喧嘩がかなり強いんだ。もうアイツと喧嘩をしていると圧倒的過ぎて逆に清々しくなっちゃうくらいに強いんだ」

病院が見えて来たので高山はペースダウンして、しっかりと佐林に教える。決して喧嘩を売ってはいけない相手を、

「良いか佐林、良く聞けよ。御伽学園には『騎士』という称号を持っている人物が数人居る、その騎士と呼ばれている人物は一人一人

が桁外れた戦闘力を所持しており、喧嘩を売れば最後、ボコボコにされてお仕舞いだ」

病院に着いた高山と佐林は佐東をぽいっと投げて、話の続きをする。

「絶ッッッ対に喧嘩を売るなよ!! 巻き添え喰うのはまっぴらだからな!」

「し、しません! 絶対に喧嘩を売ったりしましえん! つか怖いッス!!」

高山と佐林は互いに見つめ合い、そして、

「よしッ!」

と言って、二人とも散って何処かに行ったのであった。

※

「さっきは大変だったみたいだヨ」

「アイツらも懲りずによくやるよ」

ガウエインはマジョーリカに買ってきたホットのカフェオレとコンビニ限定肉汁たっぷり肉まんを渡し、ガウエインはコーヒーを飲んだ後に、また巡回の為にバイクを走らせていたのだ。

すると、バイクを走らせていたガウエインの懷から携帯の着信音が鳴った。

ガウエインは道路の邪魔にならない所で一時停止し、携帯を取る。

「もしもし」

『あつ、こんばんわですの騎士先輩』

電話の相手は同じ御伽銀行に勤めいる、後輩の赤井林檎^{あかいりんご}からだった。

「どうした、何かあったのか」

ガウエインがそう言うのと林檎は焦りながら内容を言う。

『はいですよ！ さっき涼子ちゃんから電話があったんですの、この前涼子ちゃんと私が受け持った依頼でお灸を添えてあげた愛の戦^{スト}士^{イカ}がどうやら逆恨みで涼子ちゃんを襲^{イカ}ってるらしくて……』

「復讐か」

ガウエインは静かに呟く、そして林檎も聞こえたらしく電話越しで「そうですよ！」と認める。

「分かった、林檎の寮は近いから今すぐ迎えに行く」

『すみません、お願いしますですよ！ 私もすぐに外に出て待てるですよ！』

林檎がそれだけ言うと、ブツンと通話を終了させた。

「・・・マカ」

「内容は分かったヨー。武器は揃ってるヨー♪」

マジョーリカはブカブカのブレザーから色々な発明品を取り出し、不気味な笑い声を出しながらガウエインにさっさと発進しろ的な目線で居るとガウエインも頷き、そして、ブオオオオン！ とエンジンを吹き鳴らし、林檎の寮へと向かっていった。

※

その頃、オオカミさんこと大神涼子は、おおかみ・りょうこ通っているボクシングジムはくば・おうじの帰りに何故か一緒に帰ることになった白馬王子と現在、愛の戦士ストーリーカーに逆恨みで襲われている所だった。

大神と白馬の前には数人の男たちが立ちふさがっており、相手が女だからと油断していたお陰で何人かは道路で躓つまずくまっており、そしてその中の一人、頬に大きなガーゼを当てた男、愛の戦士は焦っていた。

こんなハズじゃなかった。

そう、こんなハズでは無かったのだ。

相手は女だから大人数で押せば何とかなると考えていた愛の戦士、最初は余裕をかましていたのだが、今の状態につれ、そんな余裕は消えていた。

そして、数人居た男の一人が鉄パイプを振り回し、大神の頭上へと振り下げていた。

「くっ」

前いた連中だけでなく、後ろにも奴らが居たらしく、伏兵となり大神を襲ったのだ。白馬は他の男を相手にしている為にこちらにこれない。

大神は覚悟を決め、最悪攻撃を受けても意識を保とうと歯を食いしばる。

だが、次の瞬間……。

ゴスッ！

そんな鈍い男が辺りに響いた。

大神はいつまで経っても頭上から振りかかる衝撃がこないのを不思議に思ったが、その隙に目の前の男を地に沈め振り返る。そこで見たのは倒れている一人の少年だった。

※

ガウエインはすぐに林檎を拾い、大神が襲われている現場にへと向かっていた。

「は、早いのですのーッ！」

そして林檎はサイドカーにマジョーリカが居る訳で結果的にガウエインの後ろに乗る結果になったのだが、もの凄い速さでバイクを飛ばすガウエインに声を掛ける。

車では無いので勿論シートベルトなんてものは存在せず、己の腕力だけで突き離されないようにガウエインの背中に抱き着いていた。余裕があれば林檎特有の腹黒い何かをしてくるかと思えば、そんな余裕は無かったらしい。林檎は力一杯にガウエインにしがみついていた。

「速いか？ 一応、時速ギリギリで走っているんだが」

「きゃあ~~~~~！」

ガウエインは前を向きながら喋っているのだが、風がびゅんびゅんと風きってるので声が聞こえていなかった。

物凄い速さで現場周辺に着いたガウエインはスピードを緩やかにし、大神を探していた。

因みに林檎はかなり脱力しながらガウエインの背中に寄り掛かっていたりする。

「・・・ん？ あそこに居るのは涼子たちではないか？」

「あっ、本当だ、居るヨー」

「マ・・・マジですか？」

ガウエインは器用にバイクを捻りさせながら大神たちと倒れている男たちを発見した。

「あれは、亮士か？ 何であそこに・・・」

ガウエインがそう言っていると、いつの間にか被っていたヘルメットを置き、降りていた林檎は大神の傍へと駆け寄っていた。

「・・・・・・・・いい雰囲気ですね」

「うわっ、りんごいつの間に！」

「今さっきですよ」

林檎は若干真実を曲げたこと言ったがあながち間違えでは無かったのでスルー。

走ってきた訳では無いのに、息は荒く、嫌な汗で髪の毛もおでこに張り付いている。

速いのは速かったのだが、変わりに死ぬ思いをしたので元気ではなかった。

だが大神は林檎の様子を見て、そんなに心配してくれたのかという嬉しい気持を隠しつつ、照れ隠しに憎まれ口を叩く。

「ずいぶんと、お早いお着きだな」

「・・・・・・・・寮まで近いですし、何より騎士先輩のバイクで来たので、ち、超特急で、来ましたのよ？」

林檎は頑張っていたが、足ががくがくと震え始めてきて、その場でペタンと座り込んでしまった。

「それはさておいて、何故ここに亮士と、白馬先輩が居るんだ、理由を求める」

林檎の後ろから大型二輪車サイドカー付きを引っ張り歩いて来たガウエインはすぐに亮士や白馬に質問した。大神はガウエインの姿を見て驚いていたがスルー。

「君は確か、高等部二年生の―――」

「黒軋ガウエイン（くろきし・ガウエイン）と申します」

白馬もガウエインの姿を見て驚きながらも、ちゃんと対応する。

「騎士先輩、理由はオレが話します」

改造したガウエインの黒色の西洋甲冑ライダースーツに驚きながらも、大神はガウエインに説明した。

「……………分かった。白馬先輩、涼子を助けていただきありがとうございます」

「いやいや、どういたしまして」

「これは御伽銀行の借りといたしますので、何か俺たちの助力が必要なときは、おっしゃって下さい」

「そんなことはしなくても構わないよ。こっちが勝手にしたことだしね」

ガウエインは大神から話を聞いて、白馬に大きな借りを作ったこと

にお礼を言う。会話に復活した林檎も入ってきた。

「貸しは貸し、借り借りですの。私ども御伽学園学生相互扶助協会ですよ？ 一方的に借りを作るのは私どもの沽券こけんに、はては存在理由にまで関わりますの」

それを聞いた白馬は仕方なく引く。

「分かったよ、じゃあ何かあったら頼むとするよ」

「はいですの。……と、これから警察呼びますの。白馬先輩はどうしますの？ 警察には私どものOBがいますので、そうそう悪いことにはならないと思いますけど、面倒には違いありませんの」

「そうだね、お暇ひまさせていたどうかかな」

そう言って帰り支度を始める白馬に大神たちは頭を下げる。

「では、ありがとうございました」

「ありがとうございましたの」

「・・・助かりました」

「どうもっス」

「いやいや、それじゃおやすみ」

白馬は王子様スマイルできらーんと齒を光らせ、手を振りながら去っていく。林檎は笑顔で白馬が見えなくなるまで手を振り……

見えなくなった所で笑顔を消した。

「…………仕方ないとはいえ」

「ええ、まずい方に借りを作ったかもしれませんが」

「そうか？　確かに体育会に借りを作ったのはまずいかもしれないが」

「体育会というよりは白馬先輩に借りを作ったのがまずいんですよ」

「確かになんとなく気に入らないけどな。でもそこまで気にするとか？」

大神がそう言っているとガウエインが口を開き静かに言う。

「白馬王子という男は、たらしという話だぞ」

「…………それがなんの関係があるんですか？」

ガウエインの無表情顔を少しだけ深刻そうな表情に変えて言う。

「白馬王子という男は、今日のことと涼子のいいところに気がついてしまったかもしれない。もしかして、もしかすると——」

「はっ！　まさか、今日の貸しを使って涼子ちゃんにあんなことやそんなことまでっ！！」

林檎は目をクワツと限界まで見開く。

それを聞いた亮士は、

「そっ、それはまずいっす」

亮士が慌ててそう言った。だが、大神はどこ吹く風。

「オレを口説こうなんて物好きはそうそういねえだろ」

「物好き一号として意見はどうですか？」

林檎は亮士に振る。

「お、大神さんは、とても魅力的っす！」

と三人が仲良く話している中、ガウエインは安心して見守っていた。

無事で良かった。

ガウエインそれだけ思って、警察が来るまで後輩たちと一緒に居た。

因みにマジョーリカはというと、色々とブレザーの中に発明品を入れ過ぎたせいでサイドカーから出られない状態になっていたのを知ったのは、数分後だった。

第6話「騎士の夜回り」(後書き)

すみません！

マジすみません！

何とか早く話を進めたく書いたのですが、やはりマジョーリカとL overしながら書くのはかなり困難かもしれないッス(涙)

今回も雑だったかも……………(泣)(泣)

早く一冊分は終わらせたい十握剣でした☆

感想やコメントを心高らかにして待っています♪

第7話「騎士とメイド」(前書き)

長いですね、これで終わらせようとしたのですが、終わりませんでした(泣)

そして円卓の騎士新キャラ『ケイ』を出してしまいました。喋り方と良い完全にモデルは西尾維新さんの大河ノベルに出てくる忍者キヤラですね(泣)

すみません(泣)
こんなキヤラがオオカミさんシリーズに出してもOKかなと思いました。

そして駄文ですので色々間違っている箇所が多数あるかもしれませんが(泣)

そこもご了承ください(T | T)

もう……すみません。

第7話「騎士とメイド」

御伽花市のパトロールをした結果を、ガウエインが所属しているであろう御伽銀行に居る頭取に報告していた。

「ふうん、やっぱり鬼ヶ島高校の人たちが群がっていたんだねえ？」

そして御伽銀行の責任者であろう頭取・桐木リストがガウエインから報告を受けていた。

「街からの苦情も何件ありますね」

そして頭取が使っている机の傍に立っているのは、知的なメガネと見た目まんま秘書な桐木アリスが分厚いファイルを見ながら答えた。

「はい、俺が見つけた鬼ヶ島高校の生徒は計36人、その全ての生徒には『注意』をした上で聞き入れを拒否され、更に『説得』を試み、それでも尚聞き入れないと俺が認識した場合には『自己判断』し対処しました」

「う、うーん？ 僕には注意が『警告』に、説得が『最終警告』に、そして自己判断が『自決解決』で対処したように聞こえるんだけど？ 僕がおかしいのかな、アリスくん？」

「……難しいですね」

ガウエインは相変わらず何の表情も無しに淡々と頭取とアリスに報告するが、その報告内容がとても、凄過ぎた。

彼は確かに最初の二回くらいは言葉で注意をして、すぐに鬼ヶ島高校の生徒が居なくなるなら何もしなかったのだが。それでも、齒向かったり、注意を聞かない生徒が居れば『実力行使』という名の暴力的解決法で鬼ヶ島高校の生徒たちを退けさせて居たのだ。

その内容を見た頭取とアリスは、一気に言葉を無くして、ガウエインを見た。

「……君は本当に『荒事』専門家だね？」

「全くもって」

二人の言葉の内容が分からないガウエインは少しばかり思案する。すると横から、メイドさんが現れた。

「どうぞ、出来上がりの紅茶です」

メイド姿の鶴ヶ谷おつうだった。

「……言葉の内容が分かん」

「まあまあ、そうなんですか？ 取りあえずこちらにお座りください」

鶴ヶ谷はガウエインの腕を引っ張りながら御伽銀行地下本店の中央にある長イスに座らせ、机の上に香ばしい紅茶を、では無く緑茶を置いた。

「……おお、緑茶だ」

「はい、ガウエイン様はこの前に『紅茶は、苦手だ』とおっしゃっているのを憶えていたので、紅茶ではなく緑茶にしてみました♪」

鶴ヶ谷は満面な笑顔でガウエインにそう言うと、ガウエインは鶴ヶ谷に向けて、

「ん・・・（グー）」

「グーです♪」

緑茶を飲みながら鶴ヶ谷にビシッと親指を立てると、鶴ヶ谷も返すようにグーをした。そんな鶴ヶ谷をメイドスキーマな人が見ていたら失神ものの可愛いさを出していた鶴ヶ谷だった。

「そう言えば？ 赤井君から聞いたかい、黒軋君？」

頭取が思い出したように、座りながら緑茶を飲んでいるガウエインに聞いた。

「・・・？・・・何も聞いてません」

ガウエインも正直に答える。

すると頭取はニコリと笑いながらガウエインに言う。

「どうやらね？ 僕ら御伽銀行に新たな仲間が加わるかもしれないんだよね？」

※

頭取から聞いた話だと、林檎が亮士能力を買い、御伽銀行の新たな仲間しようというらしい。

気配を消す能力に尾行潜入能力などで大活躍する亮士を是非とも仲間に入れたらしく、もう地上店で大神たちと話しているらしい。ガウエインは緑茶をすすりながら聞いていると、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「ふふふ、どうやら上手くいったみたいだね？」

頭取が微笑みながらそう言うのとドアが開いた。

「あ、騎士先輩。この間はありがとうございました」

「ん？ 涼子か。気にするな」

ドアから入って来たのは、可愛らしいフリルのついたボリユームのあるスカートを着ている女の子、赤井林檎とまんまスケ番のような恰好をした少女、大神涼子に、長い前髪で目を隠し、ビクビクしながら歩いて来る少年はガウエインの同じ寮に住んでいる森野亮士だった。

大神は部屋の中央に備えられたソファに座っているガウエインにこの間のお礼を言った。

そして林檎と大神にメイド・鶴ヶ谷がにっこり微笑んでお辞儀を一つ。

「お帰りなさいませ、りんごさま、涼子さま」

「おつう先輩こんにちはですの、騎士先輩も」

「どうも」

「はい」

「おう」

にこにこにこと慈愛あふれる笑顔で後輩たちを迎え入れる鶴ヶ谷、湯飲みを片手に持ちながら後輩たちの挨拶に反応するガウエイン。そして大神たち二人の後ろに彫像のごとき固まったまま突っ立っている亮士に気付いた鶴ヶ谷。

「あら、そちらの方が噂の……」

「そう、期待の新人森野亮士君ですの」

「いったいどこが期待の新人なんだよ」

「涼子ちゃんのハートをゲットするかもしれない人なんですから、期待の新人ですの」

「はっ、ありえねー、ありえねー」

手を振り呆れたといったジェスチャーをする大神、だが、

「涼子ちゃん顔真っ赤ですよ？」

「なっ!!」

そんな大神と林檎のじゃれあいを横目に鶴ヶ谷は亮士に挨拶をする。

「それはそれは、申し遅れました。わたくし鶴ヶ谷おつうと申します。以後お見知りおきを」

「……森野亮士っス。よろしくお願いするっス」

亮士は何故か、かなり驚きながら鶴ヶ谷に挨拶する。まるで生まれて初めてメイドを見たように咄然としたまま答えていた。

「それですので、森野君に皆さんを紹介しようと思うんですの」

自分の名前が出てきたことでやっとメイドの世界から現世に帰還したような亮士を、ガウエインは心配そうに見ていた。

「頭取、仕切っていただけますの？」

「えー僕がかい？　こういうことはアリス君が適任じゃないかな？」

頭取はそう言って自分の隣に立つ大人びた少女に話しかけるが、一言でばっさりと切られた。

「頭取、たまには働いてください」

アリスはその切れ長の瞳が絶対零度の冷たさで頭取を突き刺している。その鋭利な美貌がその冷たさに拍車をかけている。

「ん、ん？　黒軋君もそう思うよね？」

アリスから受ける冷たい視線を掻い潜り、ガウエインにへと助けを

求める。

「・・・正直俺はどっちで・・・も・・・」

「黒軋さん」

「アリス先輩の言う通りだと俺は思います」

ガウエインもアリスから凄みの掛かった声を聞いた瞬間にアリスに寝返った。

「えゝゝ黒軋くゝん？」

「頭取、お早く」

「ん、んゝそうだねゝ？」

そしてアリスの凍えそうなほど冷たい視線を気にもせず、思いきりやる気のなさそうな顔でどうにか話をそらそうとしている頭取、わき上がる非労働意欲を隠そうともしていない。と、そんなダメ人間一直線の頭取に救いの手がさしのべられた。

「・・・ちょっと待って、お客さんみたいだよ？」

「あらそうですの？」

「うん、ほら」

机の上に置いてある液晶モニターをくるりと回して皆に見えるようにする頭取。その画面には部室の前に立ってノックするかしまいか

と迷っている少女が映っていた。

「アリス君、確か今日の当番は二年生組だったよね？」

「はい、そうです」

「じゃあ、それに一年生組も加わってもらおうかな？ 実際見てもらえばただ紹介するよりみんながどんな人間か分かるんじゃないかな？ 百聞は一見にしかずと言うしね？ そう思わないかい？ ねえアリス君？」

嬉しそうな顔でそう問う頭取にアリスはクールに言った。

「頭取はただめんどくさがっているだけでしょう」

「ははは、そんなことないよー？」

「まあ、頭取の言うことも一理あるので依頼によっては一年生組と二年生組の共同作業ということにしましょう。ただ、上の支店に上がるのは二年生組のみで、一年生にはここで待機してもらいます。全員で行ってしまうと依頼者を怯えさせることにもなりかねませんので、邪魔ですし」

「分かりましたの」

一年を代表して林檎が答える。

「では、お願いします黒軋さん、鶴ヶ谷さん。とりあえず、非常勤の方を呼ぶかどうかは依頼を聞いたあとで決めましょう」

「分かりました」

「かしこまりました」

そう言ってガウエインはスタスタと地上店へと繋ぐ階段に向かい、深々と一礼したあと、ガウエインの後を追うように部屋から出て行くおつう（メイド）さん。

ガウエインと鶴ヶ谷が上に上がるまでに簡単な紹介をした頭取とアリス。

色々と女子から攻めたてられていた頭取だったのだが上に着いたガウエインと鶴ヶ谷に視線が一気にモニターに集中する。

『いらっしやいませ。お飲み物は何にいたしますか？　コーヒー紅茶日本茶などの簡単なものなら用意できますが？』

画面の中でメイドな鶴ヶ谷が言った。

『こっ、紅茶をお願いします』

『緑茶』

何気なくガウエインは鶴ヶ谷に注文する。

メイドにもてなされる少女はおどおどとし、可哀想なほど緊張している。

少女の外見は茶色がかった長い髪を後ろで三つ編みにしている。制服はセーラー服をベースに所々手を加えている。というか改造というよりは修復だろうか、なんともなく生活感が漂う少女で、生活感が少女の可愛らしさを打ち消してしまっている。

そんな主婦予備軍といった感じの少女。その少女の目の前に飲み物

が用意されたあと、鶴ヶ谷が口を開いた。

『それでは今日のご用件は……と、申し遅れました。わたくしは鶴ヶ谷おつうと申します。以後よろしく願います』

『俺は黒軋ガウエイン。よろしく願える』

『灰原かかりです。よ、よろしく願います』

『灰原さまですね。それではさっそく本題の方に入れらせていただこうと思います。こちらのシステムの方はご存じでしょうか？』

『は、はい、力を貸してもらおうかわりにこちらでも力を貸すんですよ？』

『そうだ。俺たちが貸した「貸し」、これはいつか俺たちが必要になった場合に返していただくことになる。ただ、灰原が背負った「借り」はそれに見合った協力しか求めないのでご安心を。あと、何か耳寄りの情報を貰えば、それで「貸し」を相殺することが出来るので記憶に留めておいてくれ』

『は、はい、わかりました』

そんな鶴ヶ谷とガウエイン二年生組とお客様である灰原のやりとりを見た亮士はなるほどと呟きながら納得し、頭取から色々と説明を聞いている中、ガウエインたちは着々と話を進めていく。

『それで依頼の方はなんなのでしょ』

鶴ヶ谷が微笑みとともにきりだした。それを聞いた灰原はゆつくりと口を開く。

『はい……黒軋先輩や鶴ヶ谷先輩は二年生の^{おおじ}大路先輩をご存じですか？』

『はい、存じています』

『明弘か、確か大きな怪我をして……』

ガウエインがそこまで言うのと灰原の口が開いた。

『そうです。もう、テニスが出来なくなって……』

『それも存じております。一時期ニュースになりましたから』

同学年のガウエインと鶴ヶ谷は知っていたらしく、鶴ヶ谷の表情が少し暗くなる。だが、ガウエインは無表情のまま灰原の話を聞く。

『先週まで入院してたんですけど、今週から学校に来たんです。でも……私は見てられなかった』

画面の中で暗い雰囲気の流れる中、大神がぽつりと言った。

「大路って誰だ？」

それを聞いて林檎は啞然とする。

「涼子ちゃん……本気ですの？」

「んなこと言われても知らねーし」

「……はあ。涼子ちゃんは女の子として大事な部分がどこか欠けてますの」

「うぐっ」

「お、おれも知らないっすけど……その大路先輩ってのはどんな人なんっスか？」

大神をちらちら見つつフォローに入る亮士、実にかいがいしい。

「おおじ・あきひろ大路明弘二年R組、スポーツ科？ その整った容貌、テニスの上手さ、そして名前から、テニスのおーじさまと呼ばれているね？」

頭取が自慢気に答える。それを聞いた皆の反応はというと……

「おーじさま……ぎりぎりだな」

「ぎりぎりですの」

「い、いや、微妙にアウトじゃないっスか？」

「間違いなくアウトです」

様々だった。

『それで、明弘がどうかしたのか』

ガウエインは出来る限り《礼儀正しく》していた。

これも騎士道の一つだからである。

そして何気に大路のことを名前で読んでいることに鶴ヶ谷が気付き、ガウエインに聞いてみると、

『アイツから頼み事があったからな、覚えていた』

大路から受けた頼み事は、テニスの練習相手だったらしく、ガウエインがテニス出来ることに鶴ヶ谷やモニターで見ていた大神たちも驚いていた。

「練習相手って、相手はテニスのエースじゃねーのか？」

「まあ黒軋君なら相手出来るんじゃないかな？ 反射神経や反応速度がズバ抜けて学園一位だからね？」

それを聞いた亮士は驚く。

「学園一位っスか！？」

「うん、彼は本当に凄いよ？」

頭取は笑顔で答える。

『昔・・・私もテニスをしていたことがあるんです。・・・家庭の事情でやめましたけど。テニスやめたあと、いろいろ辛くてくじけそうになることがあって、そんな時にテニスコートを一人で眺めてたんです。そして私相当暗い顔をしてたのか、大路先輩が声をかけてくれたんです』

灰原は思い出を蘇よみがえさせながら顔を綻ほころばせていた。

『それから暇があるときにテニスコートを眺めに行くようになったんです。私はただ見ているだけ、話すといっても二言三言。でもそれだけで良かった。大路先輩が楽しそうにテニスをする姿に元気づけられました。そんな交流が、大路先輩が中学を卒業するまで続いたんです。でも大路先輩が怪我したって聞いて、テニスが出来なくなっちゃって聞いて・・・。私は辛いときに大路先輩に助けてもらった。救われた。だから・・・。だから、今度は私が、私が・・・。』

そして灰原は決意を秘めた眼差しで前を向き・・・目を爛々と輝かせテンションが異常に高い鶴ヶ谷の姿に面食らった

『恩返し!! 恩返しなのです!! なんと素晴らしいことですよ』

『落ち着け、おつうよ』

胸に手を当て恍惚としたまま、灰原ににじり寄る鶴ヶ谷、そしてそれを止めようとするガウエイン。

「むちゃくちゃテンション高いっスね」

「いやー鶴ヶ谷君は恩返しという行為に目がなくってね。だから、お世話になった人に恩返しをするというシチュエーションにぐっと来るものがあるんだと思うよ？　そもそも、うちに所属しているのも恩返しのためだしね？　むかし僕らが鶴ヶ谷君を助けたことがあるんだよ？　で、灰原君の家庭の事情は・・・アリス君お願いするよ？」

アリスはカチャカチャとキーボードを操作し画面に灰原の個人情報呼び出す。

「中学二年の秋に母親を亡くなられたようですね」

「ふーん、それで家事をするためにテニスをやめたと？」

「それだけではありません。母親は病死で、その治療費として多額の費用が必要だったようです。金銭的な面からテニスを続けることが出来なかったのでしょう。テニスを持ち前の運動神経を発揮し、前途有望だと期待され、実際に良いところまでいっていたようです。これが春に行われた体力測定です」

画面に映し出される体力測定の結果。

「へえ、こりゃすごいね？」

そんなことを何気ない様子で話す二人に亮士は驚きの顔で聞く。

「そんなことまで分かるんスか？」

「そうだよ？ でも一応プライバシーに関わることは外に漏らしちゃいけないよ？ もし漏らしたら・・・君の個人情報が学園内を駆けめぐることになるよ？ いやー恐ろしいなー？ 情報は基本的に、目には目を歯には歯をどころか、目にも歯にも利子をしっかり付けて返すことにしてるからね？ まあ、僕らは人選からしてしっかりしてる、そんな不屈き者は今まで出てないけどね？」

「りよ、了解ッス」

一通り騒ぎ、ガウエインもなんとか宥め、どうにかテンションが下がってきた鶴ヶ谷。

『わかりました。恩返しに大路さまを立ち直らせればよいのですね？』

『はい。でもどうすればいいのか分からないので、ここに相談に来たんです』

そう困っている灰原に鶴ヶ谷は簡単なことだと答える。

『単純に考えれば、新たな生き甲斐を見つければよいのでしょう。大好きで大好きでたまらなかったテニスに振られてしまった。だから今の状態になっているのですから』

『はい、それはそうかもしれませんが』

『なら、灰原さまが癒して差し上げればいいんですね』

鶴ヶ谷はにっこり微笑んで言った。

『えっ、えっ？』

予想もしてなかった話の流れについていけない灰原。

『ああっ恩を返すために伴侶のように側に寄り添い傷を癒す。・・・
・・・たまりませんわ！』

『おつうよ、トリップするな』

暴走気味の鶴ヶ谷にガウエインは緑茶を飲みながらツツコミを入れる。凄い温度差だった。そして、そんな鶴ヶ谷に灰原は訪ねる。

『なんでそんなことに・・・？』

『灰原さまは大路さまのことを憎からず思っているのではないですか？』

『それはあの・・・その』

灰原は頬を染めつつ乗り気ではないようで、少しの沈黙のあとに答えた。

『・・・大略先輩テニス部をやめるつもりなんです』

『残念だが、それは仕方がないのではないか？』

ガウエインはため息をつく。それには灰原ですら異存はない。

『はい、やめるのはしょうがない事だと思います。……もうできないんですから』

しかし、それだけでもなかった。深刻な顔で灰原は続ける。

『でも、今はまだまずいと思うんです。なし崩しに、心の整理もできてないままテニスから離れるのは。このままだと、先輩は絶対に後悔する。……私みたいに』

※

上でガウエインが度々テンションが上がる鶴ヶ谷を押さえ込むのに四苦八苦しながらも下でさっそく対応策を練りたててた。

「んーとうことはまずやることは時間稼ぎだろうね？　どうするにせよ時間が必要だし？　取りあえず明日を乗り切れば……」

「なんで明日を乗り切ればいいんだ？」

大神は頭領に聞くと、正式に退部するためには、部長、顧問、担任から承認を貰った後、体育会に提出し承認を得る必要があるらしい。

一度退部した場合、再入部が認められていないかららしい、何事もよく考えてから自分で決断させ、自分の決断には責任を持てと、そういうことらしい。

それを聞いた大神は呟く。

「逆に言えば、そこまでの覚悟を持って大路先輩とやらはテニスをやめるつもりなわけか」

「そうだね？ 中途半端な説得じゃどうにもならないだろうね？ 話を戻すよ？ それで最後に退部届を持って行く体育会は構成しているのが体育会系のクラブメンバーなわけで、週末の金曜日にそれぞれのクラブが持ち回りで体育会室を詰めることになっているんだよね？ つまり、今日は木曜だから、明日退部届を提出させさえしなければ、一週間ほど時間ができるということだね？ まあ、今日明日で何が出来る訳でもなし？ 明日をしのいでその後、本格的な作戦を立てるって感じかな？ タイムリミットは明日の五時半だね？」

「いえ、明日は休日なので体育会室が開くのは今日です」

頭領の言葉にアリスはクールに返す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一年生三人の視線が頭取に集中し・・・・・・・・。

「……アリス君、携帯電話を」

「はい」

そう言われたアリスはどこから鞆を持ってきて開く。そこに並べられているのは沢山の携帯電話。それぞれ携帯の上には男女関係なく人の名前が書いてある。

「えーと、テニス部の部長と知り合いなのってなっちゃんて良かったかな？」

「はい、二宮夏美さんでテニス部に接触したはずで。確かに一緒に合コンをしたのではなかったですか？」

「あーあー、そうだったそうだった」

頭取はずらりと並んだ携帯電話の中から二宮夏美と書かれた携帯電話を取り出す。

「ごほん。あーあーあー、あめんばあかいなあいうえおー」

喉の調子を確認。そして、アドレスからテニス部部长を呼び出し電話をかけた。

「……………何してるんっスか？」

亮士が林檎と大神に小声で聞く。

「まあまあ、見てくださいの。おもしろいですよ？　だてにこの昼行灯の穀潰しの宿六さんが頭取やってるわけじゃないというこ

とですの」

「確かにこれは大した芸だな」

そう言われて亮士は頭領に視線に移し……信じられないものを見た。いや聞いた。

『あつ、どうもご無沙汰してます、はい夏美です。その節はどうも』

どう見ても男子高校生の頭取の口から、可愛らしい女性の声が流れ出していた。

『それです、ね、大路先輩どこにいらっしゃるか知りませんか？』

えっえっえっ？ と頭取と大神たちの間を亮士は視線が往復する。

「ま、こういうことですの。頭取は変装が趣味で、変装してはここをアリス先輩に任せては遊びに行くんですの。そこにある、携帯電話の数だけ変装のレパートリーがあるということですね。聞いての通り声帯模写も見事で、男に化けたり女に化けたり。まあ、怪人二十面相の廉価版ですね。一応男らしいんですけど、本当かどうか微妙に疑わしくなってきましたのよ」

「確かに、ありゃあ女にしか見えねーな」

女性した頭取を脳裏に思い浮かべ、うんうんとうなづく大神。

頭取が部長である二宮夏美さんと話が終わったらしく、頭取が携帯電話を置く。

「どうやら、困ったことにもう出発したらしいです」

「頭取、声と口調女のままです」

「あつごほんあーあーあー。うん、これでいいかな？　かな？」

アリスに注意され、いつものしまりのない顔と声に戻る頭取。

「えーっと今は五時二十分か、大路君もやっぱり悩んでたんだねえ、こんなぎりぎりな時間に退部届けを出しに行くなんて、もう十分しか時間がないよ？　でも、これは逆にチャンスかもしれないね？　テニスコートから体育会室までは距離は結構あるからね？　松葉杖をついているはずだから、歩く速度は遅いと思うし急げば間に合うかもしれない？　だから、どうにか邪魔をして五時までに到着できないようにすれば大丈夫かもね？」

そんなことをまるで人事のように言う頭取。アリスは机の上のマイクを手にとると上の支店に向けて話し始めた。

「鶴ヶ谷さん、黒軋さん、緊急事態です。どうやら、大路さんは退部届けを持って体育会室に向かったようです。十五分ほど前のことですから、この学校の広さ、松葉杖であることを考慮したとしてももう体育棟に到着しているかもしれない。しかし、ここは体育棟の隣です。急げば間に合うかもしれません」

その放送にガウエインは一瞬ビクンツと驚きながら音源を捜して回るように首をフリフリとボロツちい部屋を見渡し、灰原はというと、

『そ、そんな！！』

焦りの混じり合わせた叫び声が響いた。あまりの急展開にパニックになる灰原。

『ど、どうしましょう！』

『時間がないので、急いで無理矢理にでも止めるしかありません。退部届けを出してしまえば終わりですから』

『でもいったいどうしたら？』

『こうなったら、小細工なしです。灰原さまの思いの丈をそのままにぶつけるしかないと思います！』

『………はい!!』

あたふたとしていた灰原だが、その言葉に覚悟を決め頷いた。ガウエインは心配そうな顔をしながら鶴ヶ谷と灰原を交互に見た。

(上手くいけば良いのだが………)

と、熱血青春ドラマ風に二人が走り出そうとしている中ガウエインがそう思っていると、ちんにゅうしや闖入者が現れた。

『話は全部聞かせてもらったヨー。すべてこの魔女っ娘マジョーリカにお任せヨー』

『……波乱の予感がする』

現れたのは正統派魔女ルックの少女、とんがり帽子に丈が伸びすぎたローブのようになった真っ黒なブレザー。いやどちらかといえ

ローブというよりは科学者の着るような白衣に近い。しかし色が黒なので白衣ならぬ黒衣といった所だ。とんがり帽子から漏れるのはガウェインが一目見るだけで興奮してしまいそうなサラサラストレートの金髪、ぐるぐる牛乳瓶底眼鏡。ともかく現れたのは魔女だった。

『まずこれ履くヨー』

マジョーリカは奇妙な効果音と共に取り出したのは、微妙に厚底の運動靴。

『えっえっ』

『いいから履くヨー！』

『は、はい』

その剣幕に思わず頷き履いてしまう灰原。

『よし、それじゃ行くヨー！』

そしてマジョーリカは鶴ヶ谷で灰原を引き連れて外に出ていく、その後を心配半分渋々半分のガウェインが重い足取りで付いて行った。

疾風のようにやってきて疾風のように去っていった魔女について亮士は聞いた。

「えっと、あの人は……」

「二年の魔女君だよ？ 本名はマジョーリカ・ル・フェイ。黒靴君以外のみんな魔女さんと呼んでるけどね？ うちの備品担当って所

かな？ あ、大神君のねこねこナツクルも彼女作だよ？」

「あ、あれですか！？」

「工房の方で一部始終見ていたようだね？ ……
とりあえず僕らも外に出ようか？ なーんか大事になりそうな気がするしね？」

「賢明です」

困った顔でそう言う頭取に、今日初めてアリスは心底からの肯定の意を示した。

五人が外に出ると噂の魔女さんが何やら大仰な物を体育棟に向けて構えていた。それは大砲のような外見だったが、……
・なぜか先にカボチャが付いていた。

「えっと黒軋君？ あれはいったいなんなのかな？」

皆を代表して頭取がマジョーリカの後ろで見守っていたガウエインに聞く。

「なんでもワゴンオブパンプキン一号らしいですよ。あれを打ち込んだら先端のカボチャが割れて引っかかるみたいです」

確かによく見るとマジョーリカの足下にはロープがとぐろを巻いている。

なるほど、あれを撃つとこのロープを伴っていくのか。亮士はマジョーリカが何をしようとしているのか理解した。思わずツツコミを

入れる。

「いやそれまずいっすよ!？」

「なんでヨー？」

不満そうなマジョーリカ。マジョーリカの狙いは体育棟の四階一番左の窓、その窓の向こうには体育会室がある。

「窓閉まってるじゃないっすか！」

「派手でいいヨー。ガラス破りはアクションの基本ヨー」

「いや、下手すれば怪我人が出るっすよっ!! 下手したら死人が出ますよ!!」

「んーわかったヨー、死んだら流石に直せないヨー」

ガラスをぶち破るという派手さが相当捨てがたかったが、流石に怪我人はまずいと渋々承諾してマジョーリカは狙いを変えた。マジョーリカは右端に近い場所の開いた窓を狙い、ワゴンオブパンプキン一号を撃った。

ポシュウツとそんな音とともに二本のロープを伴ったカボチャが空を飛ぶ。

「なんてシユールな光景なのだろう」

「まったくですの」

視線をカボチャから離さないでガウエインがそう言うのと、林檎も同意していた。

カボチャは狙い変わらず窓の中に吸い込まれて行った。マジョーリカはロープを何度か引っ張り、ちゃんと引っかったことを確認。

「うまくいったヨー。というわけで、かかりちゃんこっち来るヨー」

「えっ、でも、早く上がらないと」

カボチャに心奪われていた灰原。正気に戻って早く上に上がりたい旨を伝える。というか、自分の運命を悟ったのかいやいやと無意識に首を振っている。しかし、マジョーリカは人の話を聞かないとか通知票に書かれるタイプらしく。

「いいからいいから」

そう言って何かベルトを灰原にはめ、もう片方のロープをこの場に
いる皆に渡した。

「あのっ、そのっ、階段上がった方が早いんじゃないっ……」

さしてそう言う灰原を無視して……

「引っ張るヨー」

と叫んだ。

どうやらあのカボチャの根本には滑車が付いているらしく、それに繋がるロープの片方はみんなの下に、そしてもう片方は灰原の腰のベルトに。

本当にいいのか？

そんな視線がこの場で最上位の責任者、頭取に集まるが、せの頭取はマジョーリカ押さえ付け役であるガウエインに顔を向けた。

「いいのかな？」

「・・・ふう、しょうがないとは言え、これは危ない。こういう時は俺に任せてください」

と言ってガウエインはマジョーリカに近付く。

「（これは危ないから俺に任せてはくれないか？）」

ガウエインは小声でマジョーリカの耳元でそう呟くと、

「ふ、ふにゃあっ！？　　いい良いヨー！　　うんそれでOKヨー！
！」

マジョーリカは赤面になり、バタバタとガウエインから離れて呟かれた耳元を触る。耳まで赤くなっていた。

「分かってくれたか、ありがとう」

ガウエインがそれだけ言うのと灰原と向き合った。

「で、どうするんだい？」

「ちゃんとマカの道具は使いますよ、使わせてもらいます」

そう言ってガウエインは灰原が履いていた微妙に厚底の運動靴に履き替えた。

もちろん灰原は普通に履いてきた靴になっている。

そして、灰原がはめていたベルトとガウエインもはめたベルトを結合させた。

体勢はと言うと、灰原を背負ったガウエイン。となっている。

「ま、まさかガウエインさん」

「そのまさかをやるんだぜ、この先輩は」

亮士はガウエインがやろうとしている事に半分信じられなさそうに見ていると、横で尊敬の眼差しで見ている大神が居た。

「……………掴まっててくれよ」

「あ、あのー、一体何を」

ガウエインはしっかりと固定しているベルトを何回も確認した後、走る構えを取り、そして、

「はッ！」

爆走。

かなり踏ん張りの聞いたスタートに一瞬でガウエインは走っていた・……………ロープを上を。

「うきやああああー！！！！」

灰原を落ちさせないような絶妙なバランスを保ちながら上手い具合にロープを上を走る、走る、走る。

その運動神経とバランス感覚は正に神業。

そしてあつという間に四階へと進入した。プロ過ぎる入り方だった。

「いやー凄いね？」

「凄いねってレベルじゃねーぞ？ あれ絶対どつかでレスキュー活動してたって」

「まあ騎士先輩ならあり得ない話では無いですよ」

「いや！ 普通に人間技じゃないっすよ！？」

人体、というかガウエインの身体能力に神秘的“なにか”を目撃した御伽銀行の皆さん。亮士はガウエインの凄さに異常なまでに驚いていた。

「ファイトです灰原さまー！ ガウエインさまもー♪」

恩返しのサポートができた鶴ヶ谷は、とても達成感に満ちた顔をしていた。

体育会室の扉に手を掛けた大路を発見したガウエイン。すぐにベルトから灰原を外し促した。

灰原はまだバクバクする心臓を落ち着かせながらも大路へと走り出す。

「先輩！ 待って下さい！ 今、やめたら先輩は絶対後悔・・・」

大路に向かって叫ぶ灰原。しかし大路はそれに気づかず無情も扉は開き大路は松葉杖を進め・・・。

「・・・・・・・・間に合わないか・・・・・・・・」

ガウエインがそう呟く、が、いきなりガウエインが履いていた靴の厚底部分が分離し・・・・中からタイヤが出てきた。靴がいきなりインラインスケートに変形してしまった。

「・・・・・・・・はっ？」

ガウエインはいきなりインラインスケートに変形した靴をまたもや巧みに乗りこなす、がシュボツと靴が巧みに抜けた。またもガウエインは愕然としながら飛ばしていく靴の方向を見る。

その靴は上手い具合にロボット飛行機みたく分離し、必死に走っていた灰原の靴と『合体』した。

「へっ、あっ、きゃーきゃーきゃー！」

いきなり靴がインラインスケートに変わった為にあたふたとしていたが、両手をわたたさせながらどうにかバランスをとる。

ガウエインは耳に無線機のような小さなものから伸びたイヤホンを付け、御伽銀行の会話を聞く。（マジョーリカがガウエインの為に作った作品の一つ）。

『こっ、これは？』

恐らく亮士がモニターを見ながら言ったのだろうとガウエインは推測する。

『名付けて、《大好きなあなたの下へとまっしぐらー！　ガラスの靴一号》でース！』

『なんてことするんっスか！？』

『なんでヨーあれなら十分間に合うヨー？』

『いや、確かに速くなりましたっスけど、どうやってあれを止める気っスか！　あの様子見ると、どう考えてもかかりさんはインラインスケート初めてっスよ？』

マカか。

ガウエインはそれだけ聞き取っていると、前方で手を振り回したまま滑り続けている灰原を見た。もう大路の目の前だ、持ち前の運動神経を発揮しているのか転びはしていないが、それも時間の問題だろう。

（別に止めに入っても良いんだが……行くか）

ガウエインが靴が無くなった状態で灰原を止めに入ろうとしたが、

〔おまえ尾前はないガイリンでは内か〕

突然と現れた人物によってガウエインはその場に立ち止まった。

〔戸々（なにここ）で無二にをしているのだ〕

現れたのは白い前髪で目を隠し、口を隠している白いマフラー。服装は一つに纏まってなく、ジャージの上にブレザーを着てズボンの上に半ズボンを履いているのだ。何故か下駄も履いている男だった。

「追いガイリン、木^きいてイルのカ？」

「……そこを退^ひくんだ」

何故かガウエインは不機嫌そうになりながら男に言う。だが男は怒りを表した感じで独自の喋り方で言う。

「そう尾^お枯^こるな、まあ魔^まて、そう乙^お小^こるな」

「……退^ひけ、『ケイ』よ」

ケイと呼ばれた男は怒った感じから悲しんだ感じになった。

「他^た紙^しかに折^おは『ケイ』だが、『ケイ』じゃ名^な井^い」

「また訳の分からない事を……」

「また和^わ氣^けの若^わ羅^らない湖^こ都^とを蛇^だ斗^と？ 飯^い矢^い、血^ち牙^がうな、汚^お俟^ま絵^えが侘^わ毛^けが和^わ火^からんのだ」

「……」

と、『ケイ』という人物と相手をしていると、いつの間にかやら灰原の姿が居なくなっており、その変わり大路が倒れていた。

（い、いつの間にか、大変な事に）

ガウエインは倒れている大路に駆け寄ろうとするが、

「折^{おれ}の葉梨^{はなし}を器^きけ」

またケイに邪魔される。

「くっ………はあ、何だケイ、俺に言いたい事があるなら言
って良いぞ？」

キレてしまってもおかしくないのにガウエインはきちんとケイと向
き合い、話し合いに望む。ケイもガウエインの対応に驚いたのか反
応が無い。しばらくするとケイが動き出した。

「………緒麻衣^{おまえ}は、五^{いつ}もそうだな」

それだけを告げて、いつの間にか姿を消していた。

ガウエインはいつもの事らしく、反応せずに大路の下へと向かった
のであった。

※

「ようゝ、『ケイ』じゃねーか」

ブツブツと何か独り言を呟きながら歩いているケイに金髪頭の青年が話し掛けて来た。

〔おまえ央前は・・・・・・・・・・タンメン〕

「違ええよ!? トリスタンだ、トリスタン!」

トリスタンと名乗った青年は親指を自分に指して必死そうにそう言った。

「本名は弾タンですけどね」

そして隣からオレンジ色の髪をストレートロングにしている少女もやってきた。

「貴方も『円卓の騎士』の一人なら、ちゃんと身なりくらいしたらどうです」

〔ほう歩雨、きょつ凶はルルカンも射いるのか?〕

「・・・・・・・・萌仁香・ルーカンなのだけれど、気にしている私って・・・・・・・・KYなのかしら!？」

〔けいわい刑猥? 南なんだその已い診みが稚わからん事こと刃はは?〕

「だああ! 二人供黙れって、何か聞ってる俺が苛ついてくるぞ!」

その後トリスタンはルーカンとケイを相手に一時間費やす。そして互いに落ち着いた時にはトリスタンはかなり疲労している顔だった。

「それで、ガウエインはどうでしたか？」

ルーカンはケイに聞いた。

「銅^{どう}も攻^{こう}も奈^ないさ、アイツは不痛^{ふつう}じや娜^ない」

お前が言えた義理か、とルーカンは横目にケイの話聞く。

「折^{おれ}のコの車^{しゃ}辺^べり堅^{かた}に南^{なん}の伊良^{いら}つきヲ店^{みせ}んかった。折^おはこノ能^{チカラ}で怨^{えん}嗥^{たく}の愧^き死^しに癱^{はい}れたんだ。ソレ奈^{なの}幅^{はく}にアイツは……」

ケイはそれだけ言うと、また独り言を呟きながら二人から離れて行った。

「……あれも『円卓の騎士』の一人なのね」

「荒^{すさ}んだ目で見るんじゃないよ。ケイだってなりたくなっただんじやねえんだ……ああでもしてないと精神が崩壊する」

「確かケイの家族は、外国で……」

そこでルーカンはそこから言わなかった、いや、“言えなかった”。

「……お前^めえさあ、ワザとやってんのか」

一瞬にして出来た仕込み槍をトリスタンはルーカンの喉元に矛を突きつけた。

「……別に私はこういう展開も嫌いじゃないわ。だって『円卓の騎士』たちってさ、劣等品なんでしょ？ その劣等品同士が“殺り合った”らどうなるか……気になる？」

そしてルーカンも、何の恐れも無く喋り続ける。トリスタンはすぐに仕込み槍を下ろした。

「オッケー、オッケー。一回お互いにクールダウンしないか、じゃねえとさ………本気になっちまう」

ズガッン！ と仕込み槍が近くにあった壁を貫いた。

「ふふふふ、そうね。それもまた、魅力的♪」

そしてルーカンは妖艶に笑う。

「でも死合^{デート}はまた誘って、だって私の玩具が無いんだもん」

ルーカンもそれだけ言うと、トリスタンの前から消えた。

「………また抑えられなかった、また『興奮』してやがる」

トリスタンは今の失態にショックする。何てことをしたのだろうか。

「……萌仁香も興奮してたな、口調が異様に変だった」

トリスタンは仕込み槍を仕舞い、校舎の方へと向かって行ったのであった。

騎士たちは狂っている

故に強かった

それが御伽に溺れた

騎士たちの『末路』

魔神はそれを、悲しんだ

第7話「騎士とメイド」（後書き）

騎士たちはですね、果てしない程の『強さ』を持っています。

その強さと言っても、戦闘バトル漫画などでやっている強さじゃありません。

ドロッドロした強さです。

例えばですね、後に登場する騎士には『壊滅的な絶望感を感じさせる強さ』や『生きると云う事を感じさせない強さ』を持った騎士たちを登場させます！

ふわわ〜んとしたオオカミさんシリーズにちよつと十握剣風にアレンジした小説がコレなのです！

トリスタンにもルーカンにもケイにも、そしてランスロットやガウエインにも『何かの強さ』を持っています。

なるべく暗くしたような小説にしないようにしていきたいので、感想をお待ちしております！

マジすんませんしたッ！

第8話「おおじ様とシンデレラ」(前書き)

更新遅れました、すみません m
〔 m!

第8話「おおじ様とシンデレラ」

騎士こと黒^{くろ}靴^{きし}ガウエインは今魔女さんことマジョーリカ・ル・フェイの魔女工房に互いを対するように机に座っていた。

前回の問題は魔女さんにあり！

と皆が思っていたのだが、毎度のことなので皆は何も言わないでいた。

だが御伽銀行の頭取である桐木リストが「ちょっとだけ黒靴君は魔女君をお説教してもらえないかな？ 流石に57回くらいこんな風に騒ぎ立てると僕も笑止千万に笑えないよ？ アハハー？」と言っていた。

ガウエインはムスツとしているマジョーリカを見る。

「何だヨー何だヨー！ 別に悪い事なんてしてないヨー！」

パタパタと腕から伸びている長いブレザーを揺さぶる。

「そうも言ってもな、今回で57回目だ、マカの発明品で失敗した仕事は」

「ふんっ、そんなの私のせいじゃ無いヨー」

「……自分で発明した物は責任を持つべきだと思うのだが？」

ガウエインとマジョーリカがこうして話している中で、他の人たち

が何処に居るかと言うと地下本店である中央の大きな部屋に頭取や大神、亮士たちが居るのだ。

「あの時に明弘が灰原の顔を見ていなかったのが救いだっただが、かなり危なかったぞ」

「ううー・・・」

マジョーリカは机の上に頭を乗せてぐるぐると顔を右往左往に移動させた。

「頭取から聞いた話だともうすぐお昼の放送が流れる時間だ。何故か明弘が出るらしい。犯人探しでもするのかもしれない」

ガウェインはそう言って少し待っているとスピーカーから放送部の放送が始まった。

（ん？ 放送部と言えば“アイツ”も出るのか）

ガウェインがそんな事を思っていると、スピーカーから異常にハイテンションなアニメ声が流れてきた。

『どうもーこんにちは☆ 皆さんのお耳に舞い降りた天使のさえずり、下桐^{したぎり}すずめでーす☆』

そしてもう一つの声が流れてきた。

『そして俺がこの御伽学園放送部の長を務めている黒羽^{くろう・からすま}烏丸がお送りします』

放送部部長の黒翅烏丸だった。ガウエインと同級生である下桐すずめとこの部長の烏丸はもうすでにこの御伽学園のお昼の風物詩になっている。

『はい、今日の放送もお弁当と一緒にお耳からよくかゝっておいしくいただきますね☆ でも夜のおかずにするのは勘弁してください★ でもすずめのプリチーな声を脳内でエロ漫画や今時ボイスの入ってないエロゲーでやられてる女の子に当てはまることはゆるしま・・・』

『・・・お前は相変わらず要らん事まで喋るのだな、この口と舌か？ 舌が悪いのか？』

『いひゃひゃひゃ、ぶちよー舌ひっぴやらにゃいで・・・』

『斑鳩、いかるが一旦止めろ』

ブツツ

放送が途切れる。どうやら烏丸が他の部員に言って止めさせたらしい。

そして一分後何事もなかったように再開した。

『というわけで今日も始まりました御伽ステーション☆☆ 毎回思いますが色々なところからインスパイアしまくった挙句にパクリ丸出しになってしまったというのに、それを隠す意思さえ感じられないこの番組名はどうにかならないものなのでしょう・・・』

『・・・ならん！ お前という奴はあれやこれやと次々と！』

『いひやひやひやひやひや、ぶちよーおこんひやいでくらひやい』

『・・・・・・・・斑鳩』

ブツツ

放送が強制的に遮断され、再び何事もなかったかのよう復活。

『えーん乙女の頬を問答無用につねるってどーゆー神経してるんでしょかねーウチのぶちよーは☆ えーというわけで、今日はなんとお客様がいらっしやってます☆ おかげで皆さんがリクエストした曲を流してお茶を濁す真似しなくてもよくなってます★ というわけで、ここですめとだべりたい方は自薦他薦は問いませんので最寄りの放送部員にご連絡ください☆ でもゲストと会話が弾まなかったり、何かヤバげな空気が流れ出したらリクエスト曲流します』★ あとリクエストしてくださいさる方、ありがたいですが毎回金●の大冒険送ってくる方がいるのはどうかと思えます☆ 極付けお●の方でないだけマシかもしれませんけどお★ まー気持ちはわかりますけどね★ それに、どうにかしてエロゲー主題歌を流させようとする人よりはダメレベルはマシかもしれません★ まあ、本気で流したいなら放送室を占拠するとかしてください☆ そうすればすずめとストックホルム症候群風味な恋が芽生えるかも☆☆☆ あっでもでもカラスぶちよーがずえったい許しませんけどねー★ あの人今からあんなに怒っていると将来ハゲげますねえーぷくくく☆ というわけで内々に連絡いただけるならすずめが内部から招き入・・・・・・・・』

『上等だああゴラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

！
』

『うひゃああああ！？ マジでキレイないでくださいカラスぶちよー！
斑鳩先輩たすけてえー！』

『分かる！ 分かるぞ黒羽、俺も確かにイラッときたが今は止めろ！
本番中だぶううううう！！？』

『きゃああああ！？ 斑鳩先輩が間髪入れず殴られたあ！』

もう、滅茶苦茶だった。

いつもはストッパーの為に居る部長の烏丸なのだが、たまに爆発する。これも御伽学園のお昼の風物詩だ。

『ぜえーぜえー。は、はい今日はゲストがいらっしゃってます☆
テニスのおーじさまとして有名な大路明弘さんです☆☆☆ なんでも皆さんに重大な発表があるとか☆ 楽しみです☆ では大路明弘さんです☆ どうぞ☆』

離せ！ アイツを一度たつぷりと説教せんと意味が成さない！ と放送から少し聞こえて来たが斑鳩という少年が抑えていた。

『どうも』

『おーかっこいいお声ですねー☆ お顔も近くで見ると無茶苦茶かっこいいですー☆ 流石ミスター御伽学園のランキング七位ですねー☆ 怪我をしたと聞いてすずめも心配しましたよー☆ でも、これを聞いている方は分らないと思います、なぜか大路さんの顔にでっかい絆創膏がついているので、聴取者の皆さんすべてに代わ

ってすずめが聞いてみます☆ 決してすずめが知りたいだけじゃないですよー★ というわけで、そのほったの大きな絆創膏はなんですか☆

『それはこれから話す』

『そうですかー★ それで、今日はどのようなご用件ですかー☆ 何か重大な発表があるとか☆』

『けれど』

ドンッ

『これですか☆ うーん、なんの変哲もなさそーなインラインスケートですねー☆』

『俺はこれを履ける女性を捜している』

『え？ これを履ける人なんてたくさんいるとすずめは思いますけど☆ 大きさもそれほど小さくないですし☆ なぜこれを履ける方を捜してるんですか☆』

『先週の木曜の夕方のことだ。俺が廊下を歩いていると悲鳴が聞こえた』

『おおーバイオレンスな香りが漂ってきましたねー★ で、どなたの悲鳴だったかとか分かるんですかー☆』

『分からない。振り向いた俺が見たのは、宙に舞う女子生徒だった』

『飛んでたんですか☆★☆☆』

『たぶんこれで滑っていて、前のめりに転び、手についてそのまま前に一回転したんだろう』

『おおーそれは、すごい運動神経ですね☆』

『そして俺は……顔面に蹴りを食らい、気を失った』

『……それはまた災難でしたねー☆ 事件なのか事故なのか衝動的な犯行なのか怨恨なのか……すずめの好奇心がうずきますよー★ で、ここに来た理由は犯人捜しですかあ☆』

『そうだ……俺はあの蹴りに運命を感じた”』

その衝撃の告白に、学校が静まりかえった。

『彼女こそ俺の夢のかけら。運命の女に違いない。というわけでの靴だ』

ドンつと靴を叩く。

『顔も知らない彼女が残した靴、この靴にぴったり合い、尚且つあの蹴りを繰り出せる人を捜している。そう、あの蹴りは素晴らしかった』

何処か陶酔したように夢見心地な声でつぶやく大路。かなりヤバイ。

『あつ、新たな世界に目覚めてしまったのですかあ☆★☆☆』

声から、ときどきと頬を染めているすずめさんの姿が見えるようだ。どうやら美形が織りなすアブノーマルな世界を想像してツボにはまっていたらしい。

『ああ、あの蹴り、まさに世界が・・・・・・・・未来が開けたようだった』

『それはまた素敵ですね★★★それで、その靴すずめにもっとよく見せていただけますかあ☆』

『ああ』

『あれ、思いのほか重たいですね。サイズは・・・・・・・・あれ、すずめと同じ★★★』

すずめがそうつぶやき黙り込んだあと・・・・・・・・可愛く言った。

『てへっ、その蹴りの彼女、実はわたしだったんですよう☆』

そしてそのまま靴を履き・・・・・・・・

『ほら、サイズだって・・・・・・・・ぴっきやあああああああああああああああゝゝゝ』

痺れた。

『このように、本来の持ち主以外が履くと、電気が流れるようになっていゝらしい。というわけで、この靴を履ける人お願いだ、今日の放課後テニスコートの脇まで来てくれ。大事な話がある』

『……下桐、お前は休んでいろ……。というわけで以上、大路明弘さんからでした。下桐すずめが痺れて動けなくなっているので今流行りの音楽をお楽しみください、それでは午後も頑張ってください』

痺れているすずめを休ませ、代わりに部長の烏丸が放送を締めくくった、ラジオなどで良く聞く、好青年の声を思わせた感じだった。リクエストされていた曲が流れ始めた。

今流行りの曲のくせに、むなしい曲が鳴り響いた。

「…………取りあえず、頭取たちのところに行くか」

ガウエインはマジョーリカの方を見ると、とても眠そうに目を擦っていた。

「行くぞ」とガウエインがマジョーリカを促すと、スウッと両手を前に出す。

「…………おんぶ」

マジョーリカはそれだけ言うと、眠たそうに瞼をぱちくりする。

「…………ふう」

ガウエインは静かにマジョーリカの前に背中を差し出すと、マジョーリカは満足そうにふささとガウエインの背中に身を預けた。

「むふふふふ♪」

さっきまで眠たそうだったマジョーリカが嬉しそうにガウエインの背中に顔をすりすりとしていた。
ガウエインは苦の顔もせずにひよいとマジョーリカを背負い、工房から出る。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうしたの」

ビクツといきなり艶のある声を聞いたガウエインは歩みを止めた。

「・・・・・・・・急にどうした」

「・・・・・・・・ふふふ、何故でしょう？」

マジョーリカは綺麗な金髪でガウエインの顔にチラつかせる。

「・・・・・・・・ぐう！」

いきなりガクツとまた力を無くしたっぽく足の膝を折る。

「ほらほらー行くヨー♪」

「・・・・・・・・・・はぁはぁ・・・・・・・・困ったお嬢様だ」

物凄い見開いた目をして理性を保っていた。

願わくばこの黒靴ガウエインだけは、変人になってもらいたくないなかった。

※

皆が集まっている中、ガウエインは堂々とマジョーリカをおぶりながら部屋に入ってきたので、数名が驚きの表情で固まっていた。

「さっきカラス先輩出てましたね」

「黒羽君も大変だよねー？ 僕と同じく？」

「は？」

「・・・アリス君、そんなすぐに反応しないでよ？」

何故かすぐにガウエインの背中で爆睡仕始めたマジョーリカをソファに寝かせ、その隣にガウエインも座る。兄妹みたいであった。

「これで一件落着じゃないっスか？」

「灰原さま・・・恩を返せたのですね、よかったです」

「何の因果か、あのシックスセンスとかコスモとかそんな感じの不思議な感覚に目覚めてしまった七番目の王子様はシンデレラがご所望だそうだね？ というわけで、灰原君がああ靴履いてもう一回蹴りを入れればそれで万事OKだね？」

「新しく夢中になれるものができたんっスから、テニスができなくなった苦しみ、少しは薄れるっスよね？」

「いやー良かったね？ 一件落着かな？」

総楽観な空気の中アリスさんが聞いた。

「それで、魔女さん。あの電気の細工はどうなっているのですか？」

「よく聞いてくれたヨー！！ あれは資格を持った、選ばれし人間しか履くことができないんだヨー！！！」

ガバツと寝ていたマジョーリカが起き上がった。

寝ながら聞いていたのか。

自信満々で胸を張る。古い言葉で言うと、トランジスタグラマーな魔女さんことマジョーリカ。その張りようが半端じゃない。

「それはすごいね？ それでその資格とは何かな？」

「それはヨー」

話によれば、マジョーリカは小さなペンダントらしき物体を灰原のポケットにこっそり忍ばせた事により電撃は流れないように作られているらしい。

一件落着いたので皆は一気に雑談モードに切り替わった。

だがそこでまたもや事件が発生した。

靴の電撃のバッテリーの残りがあと十分らしい。

それを聞いた頭取たちは一気に焦り出す。

「一年生だけに行かすのですか」

大路の靴主捜しをしている現場には一年の大神と林檎、そして亮士の三人を行かせた。

「確かに一年生だけでは心元ないと思うけどね？　これくらいはやらせないといけないよ？」

「ただ単に面倒なのでは？」

ガウエインが頭取にそう聞くと黙ってしまった。
代わりに隣に立っていたアリスが答える。

「頭取の言った通り、この仕事は一年生に任せてみましょう。これも御伽銀行の教えの一つです」

キリツと眼鏡を直しながら言うアリスに何も言わないでただ黙るガウエイン。

「黒軋君も優しいんだね？」

頭取がそう言うときガウエインは不思議そうな表情で頭取を見る。

「これが“優しい”という事ですか？」

「うん・・・君は優しいんだよ、黒軋君」

頭取はいつものふざけた感じの口調では無く、真剣な顔をしてガウエインに言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ガウエインさま、緑茶が入りましたよ。どうぞ」

鶴ヶ谷が緑茶の入った湯飲みを渡され、何かを思案しているガウエインをソファに座らせる。

（君は、優しいさ。黒軋ガウエイン君）

頭取は思っていた。

この感情を無くしてしまったような少年がどんな風が変わっていくのかを。

ガウエインが考え込んでいる時、マジョーリカが静かにガウエインの袖を掴んでいたのは、誰も知らなかった。

後で聞いた話だと、見事に二人は互いの気持ちを通じあい、今では熱血王子様と熱血シンデレラの二人はテニス界に大きく踏み込んで行った。

第8話「おおじ様とシンデレラ」(後書き)

うまく仕上がっていたでしょうか？

心配です(涙)

最後なんてちょっと変になってるので心配です(泣)

感想やコメントをお待ちしてます、気軽に書いていってもらえたら
本望です。

第9話「謙（へりくだ）る戦魚（せんし）達」（前書き）

くう！

なかなか一冊終わらねえな！

因みにPSP専用ソフトでフェイト／エクストラでサーヴァントセイバー奴隷の剣士でガウエインが登場しています。

ガウエインの宝具がカッコ良かったですよ！

『転輪する勝利の剣』エクスカリバー・ガラティーンという名前で登場しました。

最高でしたね。

エクスカリバーとガラティーンは兄弟剣とも言われてるんですよね

（ー、ー）

第9話「謙（へりくだ）る戦魚（せんし）達」

ガウエインはいつもの通りの朝早い時間に御伽学園に登校しようと、朝食を村野邸にて取っていた。

基本朝食は皆で食べるのがこの“おかし荘”の規則の一つでもあるのだがどうしても朝早く用事があるのなら先に食べてても宜しいのだ。

ガウエインは基本に食している朝食は和食で、ご飯は必ず食べないといけないと自分の中で決めているガウエイン。

この村野邸の家主である村野若人むらの・わかとがもう電気炊飯器でご飯を沸かし、ている為に毎日おいしいお米を食しているガウエインは若人に至極感謝していた。

「ん〜？ ……こんな早朝に起きているのは…………ガウエインか」

ガウエインが丁度朝食を終え、自分が使った食器を洗っている時に若人の妻である村野雪女むらの・ゆきめさんが起きてきたらしく、瞼を重くさせながら台所に入ってきた。

「おはようございます、雪女さん」

「ん〜おはよう……………寝みい」

「朝まで小説を書いていたんですか、それとも何か本でも読んでいたんですか」

「んーいやなあ、私の大好きな作家の新巻が出てな、朝まで読み更けてしまった」

雪女は眠たそうに冷蔵庫の中を見渡す。

「それでは俺は学校に行つて来ます」

「毎日こんな朝早くに出て行くなんて、何かあるのか？」

雪女は冷蔵庫の中にあつたスポーツドリンクを飲みながらガウエインに聞く。

「……朝練ですよ」

ガウエインはそれだけ告げて家から出て行つた。

ブルルッ！ と少し離れた場所からエンジン音が聞こえた。

雪女は椅子に座り、飲み干したスポーツドリンクのペットボトルを机に置きながら、まだ日が登っていない外を眺めて思った。

ガウエイン（あいつ）、嘘下手だな。

と。



黒い宝石のように輝いている愛用のバイクを走らせるガウエイン。

だが走行している線上に、黒服を着ている男二人組が通せんぼするように両手を広げて立っていた。

もしこんな光景が日中やられたら大変な騒ぎになるのだが、幸い今は日がまだ登っていない黒い空の下、誰も見ていない。

ヘルメット
ガウエインは兜越しからズバ抜けた視力で通せんぼしている男二人の顔を確認するや、

グ
イ
ツ

ゴオオオオオオオン！！

躊躇無くアクセルペダルを踏み込んだ。

ガウエインの愛用バイク“GALL-10（ガラティーン）”の速度はかなり速くなり、

「危ねええええええええええええ！？」

と黒服の男二人組は身体を思いきり飛躍させて避けた。

「ちょ、コイツ鬼だ！ 問答無用に引き殺そうとしやがったよ兄貴！」

「当たり前だ！ コイツは閻魔大王さえも喉元を引き千切る程の冷酷さだぞ！？ でも味方になりゃあこれほどの大戦力は無え！」

黒服の男二人組は互いにガウエインの悪口を言いながら、止まっているガウエインの前まで行くと、

「「どうかお力添えをお願いします！ 黒軋ガウエイン様あ！」」

土下座してしまった。

ガウエインの名前を知っているらしく、どうやらガウエインと面識があるらしい。ガウエインは相変わらず鎧のようなライダースーツに身に包みながら、土下座している二人の前まで近寄る。

「愧^き鯨^{じやうめ}に、海蛇^{かいだ}か」

そう呼ばれた二人はガバッと顔を上げる。

「な、名前を覚えていたのか！？」

黒服を着ていた黒髪を立てていて、顔には無数の傷痕が残っている青年は恐ろしいものを見たように目が物怖じしている。

「あ、兄貴。俺の名前も覚えていやがった」

そして顔面傷だらけの青年を兄貴と呼び親しんでいる、もう一人の

黒服の紫色の髪をした男も隣程では無いが無数の傷が残っていた。
この二人はどこかのマフィアに所属してそうな身なりなのだが、かなり腰が低そうだった。

「さっきは済みません、だがちゃんと避ける事を信じていましたよ」

「くっ！ 人の皮を被った奴が何を言ってるやが……」

「それで、用件があるのですか？」

ガシッとガウエインは黒髪の青年の首を掴みながらそう言う。年上なのでガウエインは敬語を使って“礼儀正しい対応”した。

「ぐぶううう！ ぐるじぐがきがあ！？」

「絞めてる！ 愧鯨の兄貴の首絞めてますってガウエインさん！！」

ゲホッゲホッと咳する愧鯨が恐らく海蛇と思われる青年に背中を摩られる。

「それはさて置きだ、ガウエイン！ お願い協力して欲しい！」

愧鯨はとても真剣な眼差しでガウエインを見る。

「浦島太郎を捕まえるのに協力してくれ！」

「お願いしますっ！」

黒い騎士の前に、鮫と海蛇が助けを求めていた。

※

「という話があったんだ」

「・・・・・・・・」

御伽学園校門前、そこに黒いコート姿に身に包んだ長身の男と、白い学生服の肩や腰に鎧らしきプロテクターを装備し、綺麗な美脚を魅せる為の短いスカートにその美脚を掻き消すように腰には西洋剣^{サーベル}を帯刀している白い長髪の美少女が立っていた。

「・・・・・・・・だから何だと言うのですか、ガウエイン殿？」

「いや・・・・・・・・浦島太郎なんて本名の奴が居たんだな、と」

「そうですか、私としては貴方の名前も本当にあったとは思いませんでしたよ」

ガウエインは今朝起きた出来事をフェイルに話していた。

「そんな話はどうだって良いのですよ、今は通学する学生たちに元
気良く挨拶し、正しい服装かどうかを確認する仕事をやるだけです」

「いや、まさか本当に実在してたなんて……ブツブツ……」

「えっ、ちょ、話聞いていますか！」

というやり取りをやっている内に何人かが通学し始め、見知った者
たちも来ていた。

「お、おはようございますランスロット先輩！」

「はい、おはようございます。元気の良い挨拶ですね。今日も頑張
って下さいね」

「は、はいッ！ 例え血へド吐こうが、胃肝臓が内部破裂しても頑
張って乗り気って行きますッッ！！」

「いや、それは程頑張らないで結構です」

御伽学園には何人者美人さんが通っているのだが、このフェイルも
上位に入る程の美少女だ。だが何分融通の利かない所や頑固で短気
な場所がある為に下がったり上がったりといった位置にフェイルが
居るのだ。

「おおおはようございます！ 黒軋先輩！」

「おはようございます。（騎士道の一つ『礼儀正しさ・親切心』だ）

」
ガウエインは挨拶して来た後輩らしき女子生徒に挨拶を返す。すると女子生徒は「きゃあ／＼／／／／」と頬を紅潮させて校内にダッシュで入って行った。

ガウエインは祖父から教わった『騎士道』『武士道』を誠実に守っているのだが、基本女性には絶対的優しさで接しなさい。と祖父から固く約束され、ガウエインもそれを守りながら生活していた。そしてその教えから女子から結構な人気を誇っている。

「…………ジロツ」

「ん…………？」

そして何故かガウエインを睨むフェイル。

「そろそろ時間だ、我々も戻りましょう」

「そうだな、しかし何故ランスロットは俺を睨んでいるんだ？」

「……………」

「……………」

フェイルは凄いドスの効いた睨みをガウエインに向けて放つ。だがガウエインも無言で見つめ返すや否、

「…………／／／／／」

まさか見つめ返されるとは思わなかったらしく、フェイルはガウエ

インの顔を反らし、顔を紅潮させた。

そんな二人が学園に戻ろうとした時、背後から殺意の籠った視線が二人を襲った。二人は瞬時に振り返る、するとそこには今朝ガウエインの前に現れた黒服を着た黒髪の青年、愧鯨。そして同じ恰好をしている紫色の髪をした青年、海蛇かいだの二人を従えてるように前に立つスキンヘッドの巨漢が二人を見ていた。

「……何だ貴方達は、御伽ごか学園は学生以外は立ち入り禁止なのですが」

フェイルはこの黒服三人を不審者か何かと思い、腰に帯刀していた西洋剣サーベルに手を伸ばす。

だが、

「今時の学園はこんな刃物ぶつ使ってるのを許可してんのかよ？」

黒服の一人、愧鯨が瞬時にフェイルの懐に入り、手にしようとしたフェイルの西洋剣に手を指し伸ばし、盗ろうとした。

フェイルも「しまった！」といった感じにすぐに後方に下がろうとしたが、どうやら愧鯨の方が手練れらしくフェイルの足に愧鯨の足を交差させるように転ばせようとした、が、

ツガアッ！

黒い拳撃が愧鯨の横を貫いた。

「うおおおっ!？」

愧鯨もあの速さのパンチを片手で受け止めた。
その拳撃を放った人物は何者でも無い、ガウエインだった。

「大丈夫か、ランスロット」

「えっ、え、あ、ああ。大丈夫だ」

転びそうになったフェイルの肩に腕を回して支えていた。その状態にフェイルはすぐに気付き、赤面しながらガウエインから離れた。

「痛っっ、やっぱお前のパンチは痛えなあオイ」

「き、愧鯨兄貴を退けさせた!? やっぱこの人強い!」

「……………」

愧鯨はすぐに立ち上がり、手をぷらぷらさせながらそう言うと、黒服を着た巨漢の隣まで戻る。

ガウエインも長身なだけあって、巨漢と丁度同じ目線だった。

「……………貴方が鯨良くじらさんですか?」

ガウエインがスキンヘッドの巨漢にそう言うと、今まで無表情だった巨漢がスツと薄い笑みを浮かべた。

「そうじゃ、儂あはれさかなが竜宮の“暴魚あはれさかなの鯨良”じゃあよ」

「そうですか、それで何用に？」

ガウエインは素っ気ない反応で鯨良に返す、すると鯨良はガッハッハッと大きな笑い声を詠嘆し、服越しで分かる筋肉質な腹を叩いた。

「いやぁ済まんかったわい、コイツらが恐怖するっちゅう奴を一目見たくてのう、儂もわざわざ来きまった訳じゃき」

鯨良は強面を笑顔にしながらフェイルに頭を下げた。

「いやぁ本当に済まんかったのうお嬢さん、愧鯨が任せろっちゅう言うから任せたんじゃがのう」

「済まねえな、女に手を出しやガウエインが動くと確信してたからな」

愧鯨も申し訳無さそうにフェイルに頭を下げた。

フェイルはいきなり過ぎる展開に軽い混乱常態に陥っていたが、ガウエインが間に入った。

「それで、用件は」

ガウエインは無表情なまま黒服の三人と対峙する。

鯨良は肩を竦めながら口を開く。

「コイツらも言ったようじゃがのう、あんたに協力してもらいたいんじゃ」

「浦島太郎、とか言う奴の捕獲にか？」

ガウエインがそう言うのと鯨良は肯定するように頷く。

「その浦島太郎様がどうやらこの御伽花市に入ったっちゅう情報を手に入れたんじゃない」

「木を隠すなら森へ、人が隠れるなら街へって意味ですよ。浦島太郎様は年代に近いこの学園にもしかしたら寄るのではと思ひまして・
・・・」

海蛇が深刻そうな顔でそう言うのと鯨良がガウエインの近くまで行き、
おもんばか慮るように頭を下げた。

「頼む」

ガウエインはそんな鯨良を恬淡てんたんに見詰める。

「呻吟しんぎんだな、まるで暗澹あんたんしているかのような顔じゃないか」

ガウエインは怪訝けつげんそうにそう呟く。

「・・・・儂かいこんらも悔恨かいこんしとるんじゃない、学生にまで手伝わせると思う
とな」

鯨良も思う所があるらしく、サングラス越しから伝わる眼光がガウエインを思わせた。

この人も内心、忸怩じくじたるものがあるのかと。

「・・・・分かりました、その件はまた今日連絡します。愧鯨けいぎんの携

帯に」

「はぁ!？」

愧鯨が驚いた表情をしてガウエインを見る。

「何でテメエが俺の携帯のアドレス知ってんだ!？」

するとガウエインはまた恬淡に言う。

「雷魚から聞いた」

ピシッ

「・・・えっ？」

その場に居たフェイルだけは聞いた。まるでガラスに罅ひびが入ったような音が鳴り響いたことに。

その後、時間が時間な為にガウエインとフェイルは黒服の三人組が

学園から遠ざかって行つたのを確認した後、急に教室へと向かった。恐らく結構時間に遅れたので朝のホームルームが終り、一時限目の授業が始まった頃だとガウエインは予想する。

「……色々と貴方には聞きたい事が山のようにあるのですが、一つだけ聞いても宜しいですか？」

ガウエインがそんな風に考え込んでいたら、一緒に校内に戻っているフェイルが聞いてきた。

「答えられる範囲であれば答えるよ、ランスロット」

そう言ったガウエインの前にフェイルは立ちはだかる。

「それでは、さっき校門に居た黒服の方達が一気に、その、『雷魚』という言葉で物凄い怯えたような顔になったのは……何故です？」

「雷魚と言うのは人名だ」

「いや、それは私でも分かります。何故その『雷魚』というワードであの屈強な方達が恐怖の色に染まった表情になったのか聞いたのです！」

一瞬。

そう。たった一瞬だけなのにフェイルの懐に入つた強者である愧鯨つわもの、そしてその愧鯨より強いであろう鯨良という強面でスキンヘッドにサングラスを掛けた巨漢が一瞬で恐怖にさせた人物“雷魚”。

フェイルの頭の中には一瞬で間合いに入られた自分の弱さ、そして油断に苛立ちを露にしていた。

フェイルの苛立ちをぶつけるかのようにガウエインに喰って掛かる。だがガウエインはそれを冷静に答える。

「雷魚らいぎょとは昔知り合った人なんだ、あの黒服の人達の上司に当たる人で……喧嘩になるとかなり強い人で、一人で極道潰しとか出来る人なんだ」

「ご、極道潰し!?!」

「それが原因で二、三回くらい国外逃亡した人で、何でも外国でもマフィアを潰してきたとか、きてないとか」

「ここ国外逃亡!?!」

危険極まりない単語が飛び出し、フェイルも段々と格の違いが分かっ
つて来たらしく。

「はあ、分かりました」

「……理解したか」

「していません! してませんが……この学園に関わる事らしいので私も手伝います」

「何?」

ガウエインは共に歩きだしたが、フェイルの一言によって驚いた表情をする。

「私も手伝うと申したのです」

「それは、駄目だ」

「何故ですか？」

「わざわざランスロットまで手伝う必要性が無いからだ。それにまだ手伝うとも言っていない」

ガウエインがそう言うのと、ランスロットは腰に差ししていた西洋剣を抜き、鋒をガウエインに向ける。

「ほう、貴方の騎士道に困った者には救いの手を差し伸べるといった教えは無いのですか？」

「……騎士道と来るか」

「来ます」

ガウエインは目前に剣先があると言うのに物怖じせずにフェイルの瞳を見る。

フェイルは『円卓の騎士』内で誰よりもこの学園を愛している。

ガウエインはそれも知っている、だからこそランスロットには《普通》の学園生活を送ってもらいたい。

そう思ってしまったガウエインは意識しないでフェイルの西洋剣の刀身を握ろうとしてきた。

「っんな!？」

フェイルも驚き、ガウエインに怪我させないよう器用に鞘に収める。

「危ないじゃないですか!？」

ガウエインのいきなりの行動にフェイルは叱る。

「……危ないな、確かに」

だがガウエインも自分でやったことに驚いていた。フェイルも『コイツどうしら良いんだ……』といった感じに困っていた。

※

あの後ガウエインはフェイルと別クラスなので別れ、各教室に戻った。

何分黒コートに長身なだけに、教室に入った途端に教師が驚いてしまった。

正直に話す、訳にはいかなかったので風紀委員の仕事の手伝いをして遅れたということでもとまり。授業に入った。

そして現在放課後。

バイトがある為にガウエインは一度御伽銀行地下本店に顔を出し、すぐに愛用のバイクでバイト先にへと向かっていた。

御伽学園から出て、御伽花市近辺に入った瞬間だった。

ヒュガンッ！！！！

まるで弾丸のような物体がガウエインの兜ヘルメットに直撃した。

ガウエインは一瞬揺らいだが、すぐに体勢を整えてバイクを止める。放たれた方向に向くとそこには、

「あわわわ、本当に投げちゃいましたあ……！！」

「これくらいしないと気付かないんだよ、彼は」

綺麗な薄水色の髪に、長髪をストレートに伸ばし黒服を着た女の子と、黒服をまるでホストのように着崩した恰好に輝くようなしなやかな黄色い髪、そして鋭い眼光を隠すようなサングラスをした青年の二人が居た。

「……………！！……………」

ガウエインはその青年を見た瞬間に、冷や汗がにじみ出てきた。

「久しぶりだね、黒靴ガウエインくん。この可愛い女の子は海月くらげと言うんだ」

青年はガウエインの同い年のような女の子の紹介をしていたがガウエインの頭の中ではそれどころでは無かった。

「く、海月と申します！ ああ、すみませんでした！ すみませんでした！」

海月と名乗った薄水色の長髪の女の子はその長い髪を揺らしながら必死に何回もガウエインに謝る。だがガウエインは海月になど頭に入っていなかった。そう、今日の前に居る人物にだけ前神経を研ぎ積ませる。

「そう殺気立つなよ、黒靴」

そう言いながらも、黄髪の青年はまっすぐにガウエインに向かって歩き出す。

「いやあ、本当に久しぶりだな。俺が数年前の帰国した後だから・・・・・・四年振りかな」

楽しく、弾むような会話に、一切の情が無かった。そして青年は軽い感じで答えた。

「俺の名前覚えてるか？ 俺は『海淵かいえん・らいぎよ雷魚』だ。今の仕事は竜宮グループ荒事専門部署という仕事で位は“署長”だ」

ガウエインは物凄い嫌悪感に襲われる。思い出したくなかった。その名前を、

「ちよーとばかり今イライラしていたんだよねえ……………」

そして思い出したくなかった、雷魚の性格を、

「なあ、ガウエイン……………」

思い出したくなかった、雷魚の質感を、

「闘^やらないか？」

魚達は追う。

乙姫様の為に。

浦島太郎を追えや、捕まえ。

そこで会うは。

黒い騎士と雷の戦魚。

波乱はまた、波乱を呼ぶ。

第9話「謙（へりくだ）る戦魚（せんし）達」（後書き）

竜宮城Ⅱ海中Ⅱ魚達、こうなって竜宮を護る戦魚達を登場させました。

アニメには無かった浦島太郎と竜宮乙姫編です！

アニメ手抜き過ぎる。

何故あの白鳥さんの話や木崎さんのお話とか出さないのですかねえ！

俺は認めねええ（ㇿㇿ）

なので十握剣ワールドでオオカミさんシリーズを二次っていきます！

ガウエイン、頑張れ！

お前がオオカミさんの女の子達とエロゲ的展開を広げさせるのだ！

ギャハハハハハハハ！！

ハヘゲラボヘラ！

ラブバブバト！

トイワホ！

ホワイト！

しりとりです！

すみません！

第10話「騎士さん竜宮城の戦魚達に無理矢理手伝わされる」(前書き)

変な文になってるかもしれませんが大丈夫だと思います！

YouTubeでオオカミさんと七人の仲間たちを再度見たのが本当にマジョーリカが可愛いです♪

オオカミさんの中で俺は一番だと思っています！

第10話「騎士さん竜宮城の戦魚達に無理矢理手伝わされる」

かいえん・らいぎよ
海淵雷魚

竜宮グループ荒事専門部署で“署長”を務めている男の名だ。

年齢は二十歳と思わせる顔立ちと体格、そして言葉遣い。だが実際の雷魚という男は日本や世界の死線を幾度も乗り越えて来た男だった。

その眼光は全ての餌を見逃さず。

その口は獲物を喰い。

その鱗は鎧の高強度の防御を誇り。

その鰭は全てを尻ぎ払う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだよ黒軋、相変わらず無表情な奴だね。だが『怒り』の感情は芽生えたみたいだねえ。それもこれもお前の祖父^{じい}さんのお陰かな？」

冷氣。

例えるならそれが一番合うだろうか、今ガウェインと雷魚との間には冷氣が合い乱れているのが一番に表現が合う。

凍てつく風が二人を包み込むように吹きあれると雷魚の方が一気に陽気そうな顔になる。

「こんな市街の入口で喧嘩するのは良くないよね。“奥方様”に迷惑が掛かる」

さっきまで身体の温度が一気に下がりそうになるような殺気を放っていた男とは思えない揚々しく話す雷魚。ガウェインは相変わらず無表情のまま雷魚と向き合う。

「だがイライラしてるのは間違いの無い事実だ。マジでイライラだよ♪ 殺したくなりそうな程に、なア？」

「アンタの相手をするのはご免こうむるぞ。俺はバイトに行くんだ」

「ああ別に良いさ、只お願いする為に待ってたんだからね」

カツカツと黒服をホストのような恰好をしている雷魚は懷に手を伸

ばした、その瞬間にガウエインは愛用バイク“GALL-10”の後部から刀らしき武器を抜き、雷魚の首筋に添えた。

「反応は早いねえ、でも洞察力には掛けてるな」

「・・・・・・・・・・・・何？」

「もし俺が懷に銃を忍ばせていたなら俺ならまず肢体全箇所膨らみなどが無いかを目を配り、その後の行動等を思案する」

首筋に刃物を添えられていると言うのに雷魚はまるで怯えた様子など一片も見せずに語り出す。
ガウエインも長くなりそうだったので結局何が言いたいのかを聞くと、

「つまりはだ、俺は銃を取りだそうとしてる訳じゃない。これを見てもらいたい訳だ」

ぱらっと懷から出した物は写真だった。
そして少し離れていた場所から海月くらげという少女がやっと声を掛ける。

「そそそそ、その写真に写っている人物に見覚えはあり、ありませんか？ わ、私達は探してい、いるのですが見つからない、のです」

途切れ途切れだったが、

「名前は『浦島太郎』という男性で、優しく亀を助けてくれそうな人だ」

「・・・・・・・・竜宮城に行きそうな顔はしてるな」

雷魚が聞くとガウエインは刀を雷魚から離し、バイクにある鞆に収めた。

写真の中には成人のような顔なのだが幾分か幼さの混じった感じになっている顔だった。そして褐色。

「知らん顔だ」

ガウエインは何とも素っ気ない返答をしてバイクにまたがる。

「そうかい、じゃあ見かけたら俺に電話かメールをしてくれたら助か……」

ブォオン！ とバイクをガウエインは雷魚の話を最後まで聞かないで走って行った。

雷魚は走っているガウエインの後ろ姿を見ていると海月が冷や汗を垂らしながら近付く。

「あ、あれが唯一海淵署長と“まともに戦える”黒軋ガウエインくん……なんですか？」

「ああ……そうさ」

雷魚はどこか嬉しそうな顔になりながらも行き場の無いイライラを発散する為、タバコに火を付けながら言う。

「スハァ……戻るぞ」

「は、はい！」

雷魚は歩きながらタバコを吐き、御伽花市の市街内にへと足を進めた。海月はそんな雷魚の後をふわふわと付いて行った。

※

あれはガウエインはまだ中学生の時だった。

親からの身体的虐待と精神的苦痛を与えられことによる感情紛失。

子供の身体に受けるとは到底思えない程の刃物による傷痕、折ることなんて絶対にある筈も無いのに七カ所以上の骨折。

そして皮肉にも折れた骨はかなり丈夫な筋骨となり、ガウエインの武器ともなった。だが如何に骨が丈夫になろうが筋肉も強くならなければ内側から肉を裂かれるような激痛にガウエインは苦しんでいた。

いや、ガウエインに取って『苦』という感情は日常茶飯事であり、それを一々感じ取っていれば4日で精神が破壊するだろう。だがそれは一番大切な感情であり、人間には必要不可欠な感情なのはガウエインは知らないのだ。

そんなガウエインがこのまま成長すればどのような大人になるのか

を誰よりも早く気付いたのがガウエインの祖父に当たる老人だった。一時フェイ家から離れ、祖父の下で住んでいたガウエインはそこで数多くの大切な教えをそこで学んだ。

そして祖父は御伽学園学長である荒神洋灯あらがみ・らんぶと同期らしく、権力もかなりあるらしい。祖父の下には“壊れた強さ”を持っている人たちが数人住み込みで居て、その中に海淵雷魚という男もそこに居た。

祖父にみっちり鍛えられたその門下生たちは各々で戦い始め、ガウエインの始めて戦いを行なった対戦者が海淵雷魚だった。

当時中学生であったガウエインに問答無用に“殺し”に掛かる雷魚は正に鯨のように荒々しく、鯨の如く巨大な一撃を放つ雷魚は悪魔のようにガウエインには映っていただろう。

だがガウエインは生き残った。

だがそれは雷魚に一撃も放つことが出来なかったことも、心残った。

もう二度と戦いたくない。

もう二度と会いたくない。

あんな疲れる相手とは、もう二度と金輪際会いたくも話すことも嫌になった。

※

雷魚と会った次の日。

ガウエインはマジョーリカの部屋【魔女工房】に居た。

「今日は月曜………ということは」

「涼子たちが当番だヨー！」

グツグツとドデカイ鍋を掻き混ぜているトンガリ帽子を被ってマジョーリカは陽気にガウエインに返答するが、

「……日曜に会ったのか、雷魚と………最悪だ」
アイツ

部屋にあった机に項垂れるガウエイン。

「ありゃ、違ったのかヨー」

マジョーリカは気にしないで掻き混ぜる。

何かを。

(・・・・・・絶対に面倒なことになりそうだ)

ガウエインが何かそんな風な予感をした途端に携帯電話のバイブレーションシステムが発動する。

ガウエインは片手で操作し、画面を見るとそこには『馬鹿魚』と出て居た。かなり怪訝そうな顔をするガウエインだったが一向に切れる様子がなかったので本当に面倒臭がりながら電話に出る。

『雷魚だ♪』

電話越しから聞こえた機嫌良さそうな声に若干の苛立ちを覚えるガウエイン。

『浦島太郎を見つけた手伝え』

何故俺が手伝う？

そうガウエインが言うと雷魚はとんでもない言葉の剣をガウエインの胸を貫いた。

『御伽学園潰すぞ♪』

ガウエインは返答をしないで通話を切る。
だが何もしない訳じゃ無い。すぐに雷魚の下へとダッシュしなければいけない。

あの男は決して冗談を言えるような面白い人間じゃ無い。

ヤクザや外国のマフィアを幾つも潰して来た雷魚が潰すと言って潰してこなかったものなど一度も無かった。

「急に青い顔してどうしたヨー？」

マジョーリカも心配そうにガウエインを上目遣いで見て来る。

「マカ・・・」

そんな愛くるしいマジョーリカを見たガウエインはこれから海魔の手伝いしに行くのがかなり嫌になった。

「ちょっと、人助けに」

嘘では無い。

「顔色優れないヨー？ 断っちゃえヨー」

ガウエインは本当に断りたかったのだが、雷魚が学園を潰しに来るのを何としても止めさせないといけない。マジョーリカの頭を撫で、そして綺麗な金髪を優しく掴み、キスをする。

「え、あ、ちょ／＼／＼／」

素に戻って赤面になりながらも髪をわしゃくしゃにしてガウエインから離れるマジョーリカ。

ガウエインはそれを見て微笑み、雷魚の下へと向かった。

「「おわあああああああああ！！？」」

不機嫌MAXのガウエインは雷魚の下に集まった戦魚たち（の内二名）を引き殺せる程の速度で横切った。

「また殺され掛けたぞ！？」

「何でまた愧鯨兄貴と俺が同時に引かれるんスカ！！」

そしてガウエインが引き殺そうとしたのは竜宮グループ荒事専門部署に所属している愧鯨と海蛇かいだだった。

不機嫌なガウエインはすぐにタバコを吸っている雷魚に尋ねる。

「高校生を脅すとは、腐ったな雷魚」

「いやだね黒軋、アレは脅しじゃはなくて脅迫と言うんだよ」

「漢字読めるか？ 意味は同じだ」

会って早々に雷魚に突っ掛かるガウエインを見ていたその場の黒服

の人たち。

「すごい……あの雷魚さんにあんな態度を取る人は初めて見た」

「ステージー♪」

そしてその黒服の中には青い髪をポニーテールに纏め上げ、モデルのような綺麗な体つきをしている女性と。まるで雷魚が怒られているのを喜んでいるように笑っている小さな桃色の短髪少女が居た。

「……………誰だ、荒事専門部署には確か厳つい男共しか居なかったハズなんだが」

ガウエインは女が居た事に驚いていた、しかも二人だから尚驚いていただろう。

「別にこの部署は男だけが所属されているんじゃないんだよなあ」

「……………なに？」

「竜宮グループ荒事専門部署、女性を守るため組織された部署なのは分かるな？　そう、この部署に入ることは以外と簡単な事なんだ。軽い面接とその面接時にどれ程の知識を持っているかを確認。そして本題が『実技』だ」

ガウエインは話しだした雷魚を無視することも出来たが気になる話だったので無言でいる。雷魚も微笑みながらタバコの煙を吐きながら話す。

「その実技の担当するのがこの俺、海淵雷魚が直接相手することだ」

「……最悪だな」

クハハハ、と笑いながら雷魚は周りに居る黒服たちを見る。

「ここに居る奴らはほとんどは俺が相手して臆おくさなかった奴らだ」

「なんだと」

「まあかなりビビっている奴も居たけどな、臆しても挑む精神の強さ、そして精神面だけでは無く純粹な強さを持つ奴ら……そんな色々な奴らが竜宮グループ荒事専門部署に集められている」

ガウエインは純粹に驚いていた。この雷魚相手に恐怖しなかった奴らが居たことに。バケモノ

そして同時に、そんな恐怖さえ超える“何か”を構える者や、恐怖という大切な感情を無くした者でなければ勤まらない仕事に就いている黒服たちを見て何処か自分に似ている事に気付いたガウエインだった。

「説明してなかったな、昨日の海月クラゲと同期入所した鰯イルカと美鮫ミサメだ」

雷魚はタバコを口に加えながらクイクイツと二人を手招きすると礼儀正しく頭を下げて挨拶した黒服の青い髪の娘が鰯で、まだ大きめの黒服をぶかぶかにさせた桃色の短髪の少女が美鮫のようだ。

「い、鰯と申します!」

「はい、美鮫って言います」

鮪は真面目そうな性格で美鮫は楽天的な性格そうだった。

「因みに美鮫は愧鮫の妹だ」

「サメ繋がりか」

「違わいッッ！　と言いたいがそうだよッ！」

そしてさっきまでガウエインにビビりながら遠くで海蛇と見ていた愧鮫だったが携帯のマイク口を手で押さえながら雷魚に手渡した。

「・・・・・・・・俺だ」

雷魚はタバコを加えたまま電話に出る。
因みにもう日が完全に落ちている。

『はあはあ・・・・・・・・すみません。浦島さんを追い掛けていたのですが、ハアハア、まかれまたした』

「分かった、引き続き浦島太郎の追跡を――」

『うわああああああああああああああああああああああ』

雷魚がそう言おうとした瞬間、電話の向こうから叫び声が通り過ぎたのを聞こえた。

『うおあッ！？　浦島さん！？　すみませんいきなり浦島さんを見つけました、至急に応援頼みます、現在地の場所をメールで送りますので！』

ツーツーと電話は切れて雷魚は好機！　といった感じにニコ顔をする。

「出番だ、黒軋」

その時ガウエインは面倒な事に手伝ってしまったのを後悔していた。

※

浦島太郎は駆けていた。

黒服の男に捕まらないように、

「ちょ、まで、まって下さい。浦島さん！　てか足速っ!？」

浦島は全力で走る。

黒服の男に捕まらないように、

「グオラァ！　待ては肌黒野郎オオオオオオオ！　この愧鯨サマが捕まえてやんよオオオオオオオ！」

「ギャハハハは!!　愧鯨の兄貴がこう宣言しちゃったらもうお前捕まっちゃうよオ？　マジで捕まっちゃうよオオオオオオオ!!」

そう、例え鯨と海蛇が浦島を襲い掛かろうが駆ける。

「マジで美少年ムカつくんだよゴラァァァ！！」

モテてんじゃねえぞゴラァァァ！！

ぶっ殺す！」

「ホラ見ろ、鯨鮫の兄貴がひがんでクラスのモテてる男の子に醜く嫉妬する男子中学生のような思考で、お前を捕まえようとしてつぞオオオオオオ！！」
 と言う訳で捕まれやアアアアアアアア！！」

「怖いイイイイイイ！！！」

だが浦島は怖すぎる追跡者に超必死で逃げていた。

しかも日が落ちていたので暗い、そんな暗い中であんな叫び声を上げながら追いかけられたら堪ったもんじゃない。

「チキシヨー!! 何で姫様はこんな、こんな顔が良かっただけの糞野郎にツツ!! うわあああああああああぶつつつつつつ殺おおおおおす!!」

「はかね
儂え え え え え え え え え え え え え え え ! ! !」

「怖えええええええええええええええええええええええッッ！」

本当に殺人鬼のような形相で追い掛けてくる鯨鮫は死ぬほど怖かった。

浦島は人、など居ないが人混みをかき分け、路地を抜け、私有地を横切りそして……。

「種馬アアアアアアアアアア！」

「もう変態みたいだよ愧鯨の兄貴イイイイイ!?」

前方に浦島が消えたのを気付かないで爆走する愧鯨と海蛇。
浦島は大神によって上手く隠れたのだ。

「…………お前恨まれてるじゃねえか」

大神は少し引いたような眼差しで浦島を見る。だが浦島は怖い鯨に
追い掛けられた為にガクガクと身体を震わせていたので大神は引いた
眼差しから同情の眼差しへと移った、が。

パンツ!

「浦島さん、見つけました」

いきなり大神と浦島の前に飛んで現れたのは青い髪をポニーテール
にした黒服の女性、鰯だった。

浦島は打って変わって至福を得た子供のような笑顔を出しながら両
手を広げて立ち上がる。

「イルカちゃんじゃないか♪ どうせ捕まるなら君に……………」

「はぁ!? てめえ逃げる為に俺たち手伝ってんだろぅが!」

「すみません、確かに涼子さんのその魅力的で綺麗な美脚を見れな
くなるのは確かに嫌なのでやめにします、ですが…………やはり、
イルカちゃんも捨てがたい!」

「死んどけ!」

大神が浦島を殴っているとクスクスと微笑みを掛けてくる女性に気づく。

「大丈夫ですよ、浦島さんを渡してくれたら貴女の望み通りにして上げますから……」

そこで大神は気付いた、この鰯という女性から異様な威圧が掛かっているのに、手の汗が尋常じゃないほど溢れる。

「殺してあげますからその種馬渡してください♪」

ブワツと二人はすぐに逃走した。

「ああああ相変わらず変わった愛だなあ、イルカちゃんはああ♪」

「馬鹿野郎!! 死ぬほど怖かったぞあの人!?!」

大神も何故か一緒に浦島と逃げてしまっているのに気付いていないまま爆走する。無言で追い掛けてくる鰯がかなり怖いのだ。

「お、お前あヒトの女に絶対何かしただろ!?!」

「いいーえ! 断じてそんな下郎がやるような真似は死んでもやりたりはしません!」

「じゃあ何だっただよー!」

二人が街中を走っていると先回りしていたのか他の黒服の男たちを

率いて走ってくる桃色の短髪少女、美鮫が居た。

「キャッチー・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おっ！」

美鮫は勢い良く飛んだと思いきや俊敏な動きで浦島の懐に入り、小さい体なりで結構長身的な浦島を抱き止める。浦島はかなり嬉しそうな顔だったが、

「ちッ！」

「よし！」

そして浦島が捕まったのを大神が確認してすぐに二人を引き剥がそうとするが後ろから無表情なのに快気に満ちた声で喜んだ鮪を見て腰が引いてしまった。

鮪もこれを気に仕掛けようとするが、

「・・・・・・・・・・・・・・・・アンド、リリース☆」

「おっ・・・・・・・・」

美鮫は魚を河に返すような感じで浦島をリリースした。浦島はかなり残念そうな顔をしたが他の黒服たちの厳ついお兄さん達を見て正気に戻り逃走する。

「リリースするなアアアアアアア！！？」

鮪はまさかの事態に混乱して美鮫のぶかぶかな黒服の胸ぐらを掴み

グラグラと揺らす。

「あいあうあえゝアハハハハハー♪♪」

頭をがくんがくんさせながら楽しそうにしている美鮫を見て鮪はかなり頭を悩ませた。大神もその事態にすぐには理解出来なかったが浦島の後を追った。

「ハアハア、い、いくら何でも、しつこ過ぎるだろこれは」

あの後海生き物の名前を持つ黒服たちに追いかけられかなり御伽花市の街中を駆け釣り回っている大神と浦島。流石に大神も市を何周も走り回っていれば疲れる。だが黒服たちも飽きられめておらず只今も追い掛け回れている。

『これは全く予想外の出来事ですの、黒服の人たちをこんな大人数で探索に出させる竜宮グループも凄いですが、竜宮グループに追いかけて回っているその浦島太郎とか言う人も“ある意味”凄いですの』

「もう嫌だ、こんな暗い街中走り回されるオレの身にもなってくれ」

『うゝん、確かに涼子ちゃんをこれ以上夜遅くまで外出させているのは私が許しませんの、ですが一度受けた仕事を放棄するのは御伽銀行の名が落ちてしまいますの……うゝん』

因みに電話相手は林檎であり、浦島と大神は誰も居ない夜の公園に居た。

『鬼ヶ島高校の人たちも黒服のお兄さんたちのお陰で劇的に減少しましたが、逆に追い詰まれて来てますの。今さっき森野くんを応援に行かせました。森野くんの猟師的感觉で人の気配が無いルートで御伽学園に向かってですの』

「分かった」

『気を付けてくださいですの、この黒服の人たちを纏め上げている人は絶対に只者じゃ無いですの』

林檎からとても意味深な言葉を受けた大神は携帯電話を切り、休んでいる浦島に言う。

「ここに応援が来っからそれまで隠れてっぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

浦島に声を掛けるが何故が返事をしない浦島、大神が疑問に思って上がっていたジャングルジムから降りようとすると、

「ああッッ！ もうすぐで涼子さんのパンチラが！」

「っんなー！！／／／／／／／／」

浦島はジャングルジムで電話していた大神の隙を突いてパンツを見ようとしていたらしく物静かにジャングルジムの中に入っていた。

「くおのクス野郎がア！」

「ごはっ！ なかなかのお手前で！」

馬鹿な浦島は見事に身動きが出来なくなっており大神の右ストレートをクリーンヒット、気持良く失神しようとした。

だが、

「見イッつい、浦島太郎」

ジャリ、と現れたのはボサボサにした黄色い髪に、黒服を着崩し首にはチェーンを巻き、黒いサングラスを掛け、白いタバコから吸い上げ、そして気持ち良く吐き出す白煙混じりの声。

こんな夜にそんな恰好してればホストか何かをしている職業者だと大神は最初に思ったが浦島の名前を知っていたのですのですぐに黒服の人たちに関係する人物だと大神は判断した。

「チッ、しつこいな」

大神も逃げるのに疲れたのか、魔女さんが開発したメリケンサック型ねこねこナックルを両手に装備する。

「え、何すんの？」

そして戦闘体勢に入っている大神を見て黄色い髪をした青年は不思議

議そうな声で尋ねる。

「悪いが引いて貰うぜ」^{ワッ}

タンタンツとステップを足捌く大神。

「え、暴力なの？」

打って変わって青年は気ダルそうな声色でタバコを片指で挟みながら言う。

「ああ、だが大人しくどっか行くなら許してやら——」

ゾワツツツ！！！！

大神は首を絞め上げられそうな“何か”の感覚に襲われる。一瞬にしてだ。

「止めようよ、痛いだけだから」

そしてその“何か”の感覚を放出させていたのが目の前でタバコを吸っている青年、海淵雷魚から出ているのに気付く大神は思わず腰が引けてしまった。

何故か急に戦意というモノがどこかに消えた。

初めての感覚だった。

こんな次元の違う威圧感は初めてで、大神は嫌な喪失感と共にどんだんと腰を地にへと近付き、そしてとうとうペタリと座り混んでしまった。

「……………ちょっと俺がイラつとしたらこれだよ。オレの威圧に圧されちまったんだな」

雷魚は面倒臭いようにそう言いながら歩いて近付いて来る。

「……………あ……………」

頑張って身構えようとするがやはり力が入らない。

「用があるのはソコで寝てる男だけだ、お前には手は出さない」

そう言って雷魚はジャングルジムの中で気絶してる浦島を訝しげに見ながら掴み掛かろうとした時、

「……………」

ヒュンツと雷魚の差し出した右手が何か金属の玉のような球体が物凄い速度で飛んで掠めた。

「はあ？」

雷魚は飛んで来た方向に目を向けるとそこにはパチンコを構えている男子高校生と、まるで西洋甲冑のようなライダースーツを着ている青年、ガウエインが居た。

「涼子さん！」

パチンコを構えていた男子高校生、森野亮士が大神の名を叫びながら近寄る。

そしてガウエインも雷魚に近寄る。

「雷魚、お前・・・・・・・・・・」

「何もしてないさ、ただ俺の威圧に耐えられなかっただけだ」

ガウエインは今にも雷魚に殴りかかる勢いで睨む。

「・・・・・・・・何だよ」

雷魚もいつまでも睨んでいるガウエインを不愉快そうに顔を歪ませながらサングラスを取る。

「殺すぞ!？」

雷魚はさっきとは打って変わって限りないおびただ夥しい威圧感をガウエインに襲わせるが無表情に雷魚を睨み続ける。

「く、騎士先輩」

大神はなんとか亮士の肩を借りて立ち上がりガウエインに声を掛ける。

「その浦島も持って行け」

「ああ!？」

ガウエインはジャングルジムで気絶している浦島を連れて行くと大神たち指示する、だが大神も亮士も驚いていたが一番に驚いていたのがガウエインに協力を求めていた雷魚だった。

「黒靴、お前何言っただ、そんなつまらない冗談はいらねえんだよ?」

完全に口調が変わっている海淵雷魚、これが本当の雷魚なのかもしれない。

「ここは俺の言う通りにして貰うぞ、雷魚」

ガウエインは無表情ながらも幽かな怒気を含んだ言い方で雷魚を見る。

だがその時、

「見つけたぞオオオオオオオ!」

草むらいきなり現れたのは相当なにかで浦島を恨んでいる愧鯨だった。

愧鯨は浦島を捕まえるべく近くに居て邪魔だった大神、亮士をぶっ飛ばす為に攻撃しようと、したその瞬間^{とき}。

「サメが……」

ガウエインの回し蹴りを後頭部をグシャッ！ と強打し、一瞬にして地にへと俯せになる。そしてぴくりとも動かなくなる。

そんなガウエインを大神と亮士は単純に『強い』と思った。

なんと言えば良いのか、その『強さ』に何かを感じた二人だったのだがそれを大人しく見ていた雷魚は修羅の如き苛つきをを急に露にしてガウエインに殺しに掛かろうと、しようとした瞬間、プルルプルルと雷魚の携帯が鳴る。

雷魚は携帯を忌々しく思いながら携帯画面を見してみる、するとすぐに表情が変わり少々怯えた感じになった。

「はっ！ こちら海淵雷魚ですが何かあったのですか？
・ハイ、ハイ……いえそれは俺のせいでは……
いえ何でもございません、すぐに部下を向かわせますのでどうかご無理をなさらないで下さい……ハイ……ハイ……
……分かりました、俺も戻ります」

ガウエインは初めて携帯を持ちながらサラリーマンのように頭を下げながら喋っている姿の雷魚を見た。

パタンツと携帯を折りたたみ懷にへと戻す。

「……その馬鹿野太郎に行っというて下さい、
今回は見逃す、次……殺す……！」

それだけをはっきり言って気絶している愧鯨を引き釣れて歩いて行く。そして数歩歩ったと思えば振り返り、

「次、殺す!!!」

それだけ告げて闇夜の中にへと消えて行った。

第10話「騎士さん竜宮城の戦魚達に無理矢理手伝わされる」（後書き）

雷魚のキャラが定まらない（涙）

何かイルカ鰯イルカって漢字だけだと本物の鰯っぽいですね（泣）

どうかコメントや感想をください！

第11話「雷の魚は哀愁の荒波を泳ぐ」(前書き)

イラストレーターのうなじさんの画集欲しい!!

魔女さん絶対に可愛いですよ!

嗚呼欲しいですねー

見たいですねー

第11話「雷の魚は哀愁の荒波を泳ぐ」

浦島太郎を無事に連れ帰った大神さんご一行。

勿論ガウエインも一緒にだ。

雷魚との遭遇で一気に戦意を削り取られた大神は黙々とガウエインの後を付いて行くだけだった。

何を話せば良いのか良く分からない。

それが大神の頭に渦巻いているのだろう。
だからガウエインは簡単に率直に言う。

——考えるな、思考を巡らせた所であるの雷魚バケモノの強さは理解出来ない。

（涼子は多分、まだ考えているのだろうか。涼子は何処か“強さ”
という所に何かしら、しがみついているように見える）

ガウエインはそんな風に考えながら御伽銀行地下本店にへと歩いて
いた。

浦島を連れ戻したのが二日前のこと。外部の人間であること、且つ

此処のことは漏らさないという誓約書を書かせることで、浦島は御伽銀行地下本店に匿かくまわれているのだ。

「確かに盲点だろうな、逃避した筈がまた元の場所に戻っているなんて」

誰か居るハズも無く、ガウエインは独り言を呟くろぶちきながら人差し指で黒縁メガネをカチャと直す。

黒長いコートを揺らしながら歩いて行くガウエインはピタリと歩を止める。

何故止まったかと言うと、目線の前に立っていた人物に驚いたからだ。

「……やあ、黒軋くろぎし」

「——ッ!!!？」

そう、御伽銀行地上店の扉の前には黒服を着て、雷のように黄色い髪、そしてガラガラとした瞳を隠すように掛けているサン格拉斯、学園内だから煙草を吸って折らず代わりにガムを噛んでいる青年のような顔立ちの男性、海淵雷魚かいえん・らいぎよが立っていたのだ。

「構えないでくれよ、思わず……いや、何でもない。気にするな」

『ぶっ殺す!』。

絶対に思わず……の後に言おうとした言葉だ。

これはまた学園内なのか物騒な言葉を吐かない雷魚にガウエインは不気味極まり無く警戒する。

するとガウエインと同じくらいの背丈の雷魚の背後からひょこっと現れた人物にガウエインは目を丸くさせた。

「これはこれは、貴方様が“雷魚”の言っていたお方なのですか？」

出て来たのは純和風の美少女だった。

顔は小さく、鼻梁は整い、肌は白く、その黒髪は腰へとまっすぐに流れ、まるで人形のような美少女だった。左目の下にある泣きぼくろが色っぽい。

だがガウエインはそこでは無く彼女の放った言葉の中にとてつもなく気になる言葉があった。

——今、『雷魚』って呼び捨てにしなかったか？ と。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガウエインは呆然とする、雷魚の前では絶対にこんな無防備な体勢にはならないのだが、今は呆然とするしかない。それほど驚いていたガウエインだった。

「・・・お嬢様、お早く用を済ませましょう。狩り立てる衝動が弾いてしまいます」

「そうですね、では中でお話しましょう。名前もそこで紹介します」
そう言って純和風な美少女は御伽銀行地上店の扉を上品良くノックして中にへと入る。雷魚も後に続き、後ろに居たガウェインを怪訝そうに『早く入れ殺すぞ!!』的な念が入った睨みを当てながらガウェインを中に入れた。

※

コンコン

御伽銀行地上店で当番をしていた一年生の大神にりんご、そして亮士が中で浦島の事について話していた時だった。
扉から控えめなノックが響いた。

「はい、どうぞですの」

りんごのその声に答えたのは綺麗な声。

「失礼いたします」

入ってきた純和風な美少女に少しだけ驚いた三人だったが、後から入って来た人物にガタッと大神と亮士が反応した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二日前、黒服達から逃れたと思った時に現れた黄髪の黒服を着た青年。

そして大神の腰を抜かせる程の威圧を糸も簡単に放つ男、ソイツだった。

「え、えーと、お名前を聞いてもよろしいのですの？」

いきなり反応した二人を一旦座らせ、客である二人を向かいのソファに座らせる、黒服の青年だけは少女の後ろにキシッと立つだけ。そして名前を聞くりんご。

「お初にお目にかかります。私の名は竜宮乙姫と申します」

そして、と乙姫と名乗った純和風の美少女は後ろにいる黒服の青年に手を向ける。

「このサングラスを掛けているのは海淵雷魚と申す者です」

雷魚は浅い礼をしてまたぴしやりと突っ立つ。

動作や仕草、立ち振舞いの隅々から気品が少女から漂い、不機嫌MAXオーラをビンビンと漂わせる黒服青年。

「おい・・・・・・・・」

大神はりんごの耳元で囁く。

「はい、名字から見て間違いなく竜宮グループの関係者だと思いますの。そしてあの黒服の人……ちょっと待って下さいの」

ノートパソコンでいろいろ調べ出すりんご、その間大神が会話をつなぐ。

「それでなんの用だ？」

「はい、人を探してます。名前は浦島太郎。ここに来たと伺っているんですけど……」

どうやら完璧に知られているようなので大神は肯定する。

「ああ、確かにここに来たな。だが、帰ってもらった。オレらは基本的に部外者の依頼は受けないんだよ。だからどこに行ったかは知らないな」

チラッと雷魚を見る大神、連れ去る所を見ていない筈なのでそう告げた大神。

この娘は浦島を見失いどうにもならなくなったので手がかりを求めてやって来たということだろうな。そう推測した大神、だったが、雷魚の口元がニッと微笑してるのを目撃する。

一瞬焦った大神だったが、

「そうなんですか」

とても残念そうな顔をする乙姫、そのしょぼーんとした雰囲気はさまざまに庇護欲をそそる。

「ううっ」

大神は可愛いものの好きの本能が身体を乗っ取ろうとする。もし理性が本能に敗北したら大神は、乙姫を抱きしめ、どんな依頼でも受けてやると叫び出すけと請け合いだ。

それほどまでに乙姫は可愛い美少女なのだ。

そんな脳内で色々と死闘が行われている大神を横にりんごが調べ物を終えたのか、会話に復帰してきた。

「ごほん。それでは竜宮さん、すみませんがいくつか質問をしても宜しいのですの？」

「はい、よろしいですけど……なんでしょう？」

「あなたは何故その方を追っているんですの？ 竜宮グループ代表の一人娘であるあなたが、そしてその竜宮グループ荒事専門部署の署長を務めている海淵さん。それを聞かせていただければお力になれるかもしれませんの」

「やっぱり太郎様の居場所を知っているんですか!？」

「いえ、涼子ちゃんの言ったように基本的に部外者には手を貸しませんの。ですから今は知りませんの。ただ、理由によっては協力する場合があります。ですから理由を聞かせていただれば……」

「分かりました」

りんごの言葉に神妙に乙姫は頷く。そして大神と亮士はあの黒服達を纏め上げていた人物が雷魚だと知り、冷や汗を垂らす。

「ではその前ないくつか質問を。それで、あなたと浦島さんの関係はなんですか？」

「恋人です」

迷いなく即答して言い切る乙姫。

そんな乙姫の回答にりんごの後ろで亮士と大神がぼそぼそと話している中、雷魚は静かに入ってずっと会話に参加せずに壁に寄りかかっていたガウエインを見る。

何やら嫌な顔をしている雷魚。

すると乙姫と浦島の関係をもっと良く知る為に二人のなれそめを聞くことになった。

雷魚はチッ！ と聞こえない舌打ちをしてサングラス越しに見えた瞳が一気に温度が下がった感じだった。

ガウエインは祖父から聞いた事があった。

青年のような歳に見えるこの男、海淵雷魚には『娘』が居た。

まだ若そうに見える雷魚、まだ結婚はしていない、娘とは血の繋がりは無い、とは言い切れなく少しある。

極道に生きていた雷魚の家族は他の組に殺されてしまい天涯孤独となる筈だった。

だがそんな雷魚に数年後娘と名乗る女の子が現れたのだ。
母親の姉の娘、つまり従妹だ。

その女の子も組の奴らによって両親を殺されてしまい、身内は雷魚だけらしく歳が離れている事を良いことに娘と名乗ったのだ。

だが雷魚は何も言わずに『娘』としてその女の子を雷魚なりに育ててきた。

一緒に住んで行く内にその娘と仲良くなっていき、誰もが仲の良い『家族』だと思われた。

だが神は雷魚を海の淵へと叩き付けた。

誘拐。

テレビのニュースなどで良く示される言葉。

そんな出来事が雷魚との家族で起きた。

『極潰し』を何回もしてきた雷魚に恨みを持つ者の仕業だった。

娘を拐った、返して欲しくば一人で来い。

簡単な脅迫状だったが雷魚はすぐに向かった。

向かった場所で待っていたのは・・・・・・、

強姦された娘の姿だった。

その後の雷魚は最早人間の領域を超えた狂乱した荒れぶりだった。
ありとあらゆる人の形をした醜い生物をグチャグチャにする。

たったそれだけを雷魚は一瞬にしてやって退けた。

意識が薄れて倒れている娘を泣き上げながら抱き上げる雷魚。

だが雷魚にグチャグチャにされた組の生き残りが銃を取り出して雷魚の背後を撃った。

だが雷魚に弾は届かなかった。

意識が霞んでいた中、最愛の父親を護る為に、娘が盾となったのだ。

娘が生き残るのなら雷魚はいつ死んでも良かった。

だが、その娘はどうしようも無い駄目な父親を、大好きで愛していた父親を護る為に盾になり、死んでしまった。

もう駄目だ。

なんだこれは。

世界はこんな灰色だったのか。

その言葉を吐き捨てた雷魚は銃を撃った男を跡形も無く抹殺した。

それが壊れた雷魚の人生の始まりだった。

そして今、雷魚の前には“瓜二つ”に娘に似ている乙姫が楽しげに、幸せそうに浦島とのなれそめを話している。

「（生きていれば、もうこんな歳だな）」

本当に聞こえない。微かな声でそう言った言葉に誰も反応しない。

だが聞こえた者が一人居た。

ガウエインだ。

ガウエインは目だけ雷魚に向けて、後は乙姫の話を聞いた。

乙姫の浦島との過去の話聞いた御伽銀行の一年生組とガウエイン。

「…………そんなことがあって、私は頑張ったんです。痩せて身だしなみに気をつけました。いつも首を縮めて背中を丸めた亀みたいだった姿勢を背筋を伸ばして、そしておしゃれに気をつけて、いつも綺麗に笑っていることを目指しました。内面的にも綺麗であろうと努力し、困っている人を助けるように、人の悪口は言わないように、自分が自分を好きでいられるように、自信を持てるように」

そんな素敵なことを言う乙姫。

「おいおい、むちゃくちゃいい子じゃねえか」

「そうっスね」

大神と亮士もちょっと感動。

(…………輝かしいじゃないか)

ガウエインも乙姫の頑張りに称賛を讃える。

雷魚は無表情のまま動かない。

そしてそんな風にどれだけ熱心に浦島を愛し、探しているのかを大神、亮士、りんごに熱弁している中。

ブーブーブーブーブー

雷魚の懷から携帯の震動音が鳴る。

「あア、俺だ。．．．．．愧鯨と海蛇が車に跳ねられた？．．．．．
知るかほつとけ．．．．．ああ、それじゃあイルカと美鯨、あと鯨
良が．．．．．今お嬢様に代わる」

雷魚は逃げていた獲物が引っ掛かり、喰い殺しに向かいそんな表情
で乙姫に携帯を渡す。

「はい乙姫です。．．．．．本当ですか！ 太郎様
が！！」

電話越しから聞こえてくるのは女性の声で、ガウエインはその声の
主が先日会った鰯イルカと名乗る青髪の女性の声だと認識する。

（ん？．．．．．太郎だと．．．．．何故外に？）

「はい．．．．．はい、そのまま私の下に連れてきてもらえますか。
居場所は．．．．．そうですね、感動の再会ですし．．．．．この
付近には確か竜宮城の十五号店がありましたわね。そこに連れてき
てくださいまし。もちろん最上階ですよ？」

新たな展開に大神が耳を澄ますと電話口から幽かに声が聞こえてき
た。

『うおー！ 何をする！ 放ひえ！ 俺は男おひえ おぼろ ひやふあに触られる趣味はない
！ ふえか口ふちにネギを入れるひやない！ 苦ッ！！ 苦しハゲ
のオヤジの顎あほじやりで削られるのは嫌ひやらあー！ 苦ッッ！？』

『煩い奴じゃ、何でこんな若造が姫さんと、姫さんとオオオオオオ

『もつとネギを口に入れましょう鯨良さん！　もう口が張り裂ける程入れましょう、てかネギで窒息死させてしましましょう！』

『アハハハッ!! 太郎さん気絶しちゃいますって、てかどんだけ
 鰯イルカはネギでこの人殺そうとしてんですかー? ある意味拷問並につ
 らそうく美鮫ミサメも齧かじっちゃうぞ♪』

「少々手荒な真似をしてもかまいません。逃がさないことを優先的に」

[illegible]

乙姫は電話を切り、その電話を雷魚に手渡した。

「太郎様が見つかつたそうです。ですのでお暇いそぎさせていただきます。それではお手数をおかけしました」

そう言つて優雅に一礼し雷魚と共に立ち去る。それを見届けたあと、慌てて大神は言つた。

「おい、なんで浦島が外で捕まってんだ？」

「知りませんの！　でもとりあえずは下に」

ばたばたと地下へと走る大神たちとガウエイン、すると……

「なんかこんな紙がテーブルに置いてあったヨ」

「見せてくれ」

地下でまったりとして居た魔女さんことマジョーリカが持っていた紙をガウエインに渡す。

『女の子と新たな出会いがありそうな予感がしたので少し出てきます。晩ご飯までには戻ります。晩ご飯はもちろん君で。

あなたの浦島太郎より』

そう紙に書いてあった。

因みにそれを読み上げたのはガウエインで、それを聞いたりんごは叫ぶ。

「アホなんですよあの方は！　しかも今日に限って誰も下に……
・あら、魔女先輩が居らしたのに何故浦島さんは外に！？」

「恐らくマカはずっと魔女工房に込もっていたからじゃないか？」

ガウエインの言葉にりんごは頭を押さえる。

「でも、どうやって抜け出したんっスか!？」

「たぶんここですよ!」

部長の席の後ろにある大きな掛け軸。りんごがずらすとそこには扉が。

「これ秘密の脱出口だな、何故この出口を浦島が・・・」

「女に対する執念じゃねえですか?」

ガウエインに変な敬語で返答する大神、あまりにも予想外すぎる出来事に固まるりんご。しかしりんごは打たれ強い。すぐさま復活すると指示を出す。

「騎士先輩、涼子ちゃん、森野君、騎士先輩の二輪^{バイク}自動車で追いかけてくださいの——」

「済まん、サイドカーは今付いてない」

とそこにガウエインが付け加える。

「な、何故ですよ?」

「久しぶりに付けてみたんだが色々と錆びている場所があったので今知り合いに見てもらっているんだ」

ガウエインが申し訳無さそうにそう言うときすぐにりんごは別の打開策を思い浮かべる。

「なら裏にある自転車で追いかけてくださいの！ 場所は竜宮城・
・・・ちよつと待ってくださいの」

パソコンをいじると右の棚に置かれたプリンターから紙が吐き出されてくる。

「地図です。この通りに行けば最短距離になりますの。ここから目的地までは車で行こうとすれば回り道になりますの。どこで捕まったか知りませんが、流石にここからあまり遠いということは無いと思いますの。だから急げばどうにか先回り出来るかもしれませんの。乙姫さんがストーカーなのか、そうでないならどんな理由で逃げ回っているのか聞いてくださいの。それを聞いてその後どうするかは涼子ちゃんに一任しますの。馬鹿ですが一応それでも依頼人なのでベストを尽くしましょう。というか、一発殴りたいですの」

「任せろ、おまえの分までぶん殴ってやる」

「了解しましたっス」

走り出す二人、その二人の背中に向けりんごは叫んだ。

「私もすぐに追いかけますのよ」

そこでひょいっとガウエインの裾を掴むりんご。

「騎士先輩には先に行ってもらいたいんですの、絶対に竜宮城付近に護衛として駐在している荒事専門部署の方々が居ると思うんですの」

「……竜宮グループ荒事専門部署《戦魚》いくでかなの奴らか」

「調べて分かったんですが部署の最高責任者はあの海淵雷魚という方みたいですが、前任の署長・海間海凶かいま・みきようさんは現在《戦魚》の副署長を務めているらしいんですの」

りんこの言葉にガウエインは口が渴いていくのが分かった。

かいま・みきよう
海間海凶。

通称『朱染しゅぜんの海魔クラークン』や『水淵すいえんの海凶リヴァイアサン』と呼び慕われている屈強の老兵だ。

昔海兵として幾戦もの戦争に身を投じ、生き残った日本兵士の一人だ。

老人とは思えぬ筋力と思考力。

戦艦を体一つで落としたという話も上がっている程の化物だ。

ガウエインはその話は作り話だと祖父に何度も聞いたが、祖父の顔が引き吊っていたのが脳裏を横切る。

「ま、まさかその海間さんと雷魚が、待ち受けていると？」

かなり汗を流しているガウエインにりんごは無情にも頷いた。

ガウエインは後輩を見捨てる事も出来るハズが無く、これから戦魚たちと戦いを身を投じる騎士となった。



「オラ〜♪ さっさと歩けこの種馬〜♪」

「くあ、み、美鮫ちゃん、そんな肉食獣が腐った獲物を見ているような目で僕を見ないでくれー……興奮してしまいます!」

「骨の髄まで腐ってますねー♪」

そんな褐色の肌が目立つ青年・浦島太郎はブカブカの黒服を着ている女の子、美鮫に縄で引きずりながら竜宮城、つまりはラブホの十五階にへと連れて行っていた。

美鮫の兄、愧鮫はこの浦島^{バカ}を追いつけている途中車に跳ねられ、竜宮グループが営業している医療センターにへと運び込まれているのだ。

カツカツと若干苛立ち覚えの足音が美鮫と浦島の背後から聞こえた。

「チィッ! 関東支部荒事専門部署が潰されたっつー話は本当か天^{あま}貝^{がい}」

『はあー、何かそうらいスよ？ 自分が確認しに行ったらどっかのクソガキ共が警察に捕まってる所でしたわ、火炎ビンやら火炎放射器やらね、ああ後ですね高層ビルの屋上からスナイパーらしき人物を見たっつー話も出てるんスよ、考えましたよねえ、電磁力を使った狙撃銃を使用したみたいでスわ』

「んあア？ 多分そりや磁力式狙撃銃系だな、フランス辺りで俺に狙撃してきやがった銃だ」

『はあ！？ …… まあ、いいスわ、狙撃は繊細で距離はおよそ、600メートルくらいスかね、気流や突風も考えてこれだけ――』

「オイ……」

『え、へっ！ な、なんスカ……』

そこで美鮫と浦島は背後から聞こえた元を見た。

そこは暗い階段を照らす黄色い灯りしかなかったが、すぐに声の主が分かった。

「襲った奴らを根絶やしにしろ、それ以外の命令は無えんだよ？ あア天貝？ テメエの身体の中の臓器を全部引きずり出されてえのか、ゴラア？」

声の主はそれだけ言って通話を切った。

「美鮫、早く太郎“さん”を奥の間に入れろ、面倒を増やすな」

なんとも至極嫌そうに『さん』付けして浦島を行かすように指示する。

「アハハー、もうちっと待って下さいよシヨチョー、鰯ちゃんと鯨良のオヤジが掃除してますからー♪」

署長。

この竜宮グループが運営する人がいれば一番に思い浮かぶ人物、竜宮グループ荒事専門部署署長、海淵雷魚しか居なかった。

雷魚はまだ苛立ちが収まっていないのか懷から煙草を取り出す。

そう、かなり苛立っているのだ。

サングラスを掛けているからまだ良いのか、サングラス越しに見える目はギラギラと輝いており、すぐに『誰かを殺してしまいたい』な意思を込めた睨みが空を泳がせる。

もう浦島は雷魚が前に居るだけで息が出来ずに居る、心拍数が莫大にかけ上がり、息を吸う回数も増えてもう口の中は乾燥しまくっている。

が、そんな虎をも睨みだけで殺せそうな雷魚に命知らずが言った。

「ちょっとちょっとシヨチョー！　たばこはちゃんと喫煙所に行ってやって下さいーい」

ノオオオオオ！！？　何を言っちゃったのこの可愛い娘ちゃんはアアア！！。

浦島が美鮫にそんな風に言おうとしたが、雷魚はピタッと手が止まる。

「・・・・・・・・面倒臭え」

「じゃあ仕方ない♪」

「良いのかよっ!？」

思わずツツコンでしまった浦島が青白くしながら雷魚を見ると、詰まらなそうな顔で、

「うるせえ」

「すみませんでしたアアアアアアア!！」

雷魚が一瞥してジャッピンピング土下座した浦島を横切り廊下に出る。

そんな雷魚にまた電話が掛かる。

雷魚は面倒臭そうに携帯を取り出し、画面を見ると【海月^{くらげ}】の文字。

「・・・・・・・・どうした」

『あひゃい！ はいあのそのですね、物凄い速さでこっち向かってくる黒いバイクを発見しました』

かなり焦った感じの少女の声が雷魚の耳に届く。

「黒い、バイク」

そして雷魚はそのバイクに乗る知り合いが一人居た。

『黒軋ガウエインさん、です、確認しました』

そして的中、黒軋だった。

（・・・・やっと思つけたんだ、お嬢様の願いが叶うんだぞ。邪魔する気か・・・・・・）

雷魚は体を引き返す。

「俺が出る、海月も戻っておいで」

雷魚はいつの間にか穏やかな口調に戻っていた、いや、戻そうとしていた。

雷魚はパタンツと折り畳み式の携帯を折り、懐に入れ、吸い始めた煙草を指と指で挟み白煙を吐く。

横過ぎた美鮫と目障りな浦島をまた一瞥して外に出ようとしていた。

「邪魔はさせねえぞ、クソ騎士が」

雷の魚はそれだけ吐き捨てた。



街中をぶっ飛ばして走って来た黒い騎士の黒鉄馬、その黒鉄馬が止まったのは竜宮グループが運営しているラブホの少し離れた場所だった。

何故止まったか、それは単純に運転の邪魔を去れたからだ。

どうやって？

これも簡単。

走っていたバイクの横から爆撃並の衝撃波が襲われたからだ。

グガアドガワン！！ とガウエインは黒鉄馬^{バイク} GALL-10と共に

売り地となっていた空いてあった土地にへと吹っ飛ばされた。

「死んだか？」

そして衝撃波が放たれた方向からそんな声が聞こえた。

「堪ったもんじゃねえよな、後輩の願い聞いただけでラブホの横でおっ破死ぬなんてよオ」

ガタンッ！ と何か重い金属が道路に落ちた音がした。

「超電磁力爆撃式大砲、俺が潰した闇会社の開発した『兵器』だ、使い道がいくつかあると思ったんで残してたが、チッ、ガキ殺すのに使ったア俺も老いたな」

そしてその超電磁力爆撃式大砲を放った男、雷魚は飛んで行った売り地に足を踏み込む。

バズーカのせいかな黒煙が辺りを占めていた。

「死んでねえんだろ、出て来いクソ騎士が」

そう言った時だった。

ブワツと黒い煙を鎧のように胴体から撒き散らして歩いて来た騎士
甲冑姿の青年、黒軋ガウエインだった。

「モロに喰らって骨折無しか？ お前どんな仕組みになって――」

グキイツ！

「——ッ！？」

衝撃。

雷魚の溝に一発の衝撃が走った。

「があああああああああああああああああああああ！
？」

雷魚は貫かれる衝撃に耐えきれず後ろに足をよろめかせる。

「確実に“普通”の人間だった死んでたぞ」

そして雷の魚の前に、騎士が立つ。

「ハアハア、何だあ？ テメエは『普通』じゃねえのかよ？」

雷魚は溝を摩りながら力強く踏み締める。

主の為に、何よりあの乙姫^{こひめ}の為に雷魚は口に加えていた煙草を吐き

捨てた。

「来いよ、雑魚が」

黒い騎士は軋む体を鞭打ち立ち向かう。

「駄騎士が吠えろ」

騎士と化魚ばいごの戦いが始まった。

そして無事ラブホ前に到着した大神と亮士。

「おい、何か向こうで工事やってんのか凄い音したぞ」

「なんか爆弾みたいな感じでしたっスよ!？」

第11話「雷の魚は哀愁の荒波を泳ぐ」(後書き)

ラブホの横でバトル場面突入ですよ!?

何スカこれ!!

自分で描いてびっくりですわ!

感想やコメントお待ちしておりますε||
┐(;
▽
)
L

第12話「雷魚の哀苦（かなしくるしみ）」（前書き）

お久しぶりです！

本当に久しぶりの投稿です、社会人となって初めての投稿でございます！

東北大震災を受け、無事に会社に行けるのか？と心配していました
が全然平気でした。

が、しかし今度は東に大震災が起きるとか起きないとか！？

まったくマジで勘弁して欲しいツスよ！？

そして森野亮士の声優をしていた自由さんが結構アニメに出ています
よねえ（＜ε＞）

まあ『電波女と青春男』のイトコとか（ハム）

伊藤静さんも出てますよねアニメ、今知ってる最新のアニメだと「
そふてにっ」くらいでしょうか（笑）

そして長々とすみません、今回で竜宮グループ編は終了ツス！

次回からはやっと文庫一巻を終わらす話です！

だからと言って次回で終わりませんがッ！

第12話「雷魚の哀苦（かなしくるしみ）」

ボロボロになった娘。

海淵^{かいえん・サカナ}咲奈、それが雷魚の娘の名だった。

咲奈^{サカナ}は雷魚の唯一の『家族』だった。

咲奈は雷魚を大変なついでおり、いつも雷魚の側でテクテクと歩いて近寄ったり、手を握ったして不器用な雷魚を困らせたりしていた年頃だった。

そして、銃に撃たれた時の咲奈の年齢は僅か17歳、これから人生というものを経験していく始めだった娘の命が断たれた瞬間、本当の娘じゃない義理の娘を親愛していた雷魚は“壊れた”のだ。

青空——いや違う。

アレは灰色の空だ。

花畑——いや違う。

色褪せない灰色の花草原。

人顔——嗚呼。

壊したくなる——。

雷魚はとことん復讐を越え、『徹底破壊』を志す。

目に見えるクソッ垂れなゴミ共を殺す。

目の前歩いて奴を殺す。

極道者はなりふり構わず潰し殺す。

マフィアは刻み殺す。

[illegible]

頭の中にはそれしか入って来ない。

雷魚は我が身を削るように潰してきた。

そして潰して来た中で、女を道具のような扱いをする上流貴族のような奴みしたいなゴミを殺し掃除した日、雷魚を見て物怖じしない女性が現れた。

その女性は絶世の美女と言われてもおかしく無い程綺麗だった。あの雷魚も一時、殺人衝動が麻痺したがすぐに殺し掛かろうとした。女性は何の抵抗も無しに雷魚の血塗られた手で首を締められる。雷魚の化物並の握力で喉を潰そうとしたのだが、殺さなかった。

ゴガアンッ!!

竜宮グループが運営しているホテルの横では人体では予想の出来ない動きで戦っている二人が居た。

「はあ——」

ヒュンッと弾丸の如き速さの打撃を放つ極潰しの海淵雷魚、そしてそれを受け流している。

「——ッがッッ!!」

もとい受けを徹底にして攻撃を向ける形で戦うのは御伽学園高等部二年の黒軋くろぎしガウエインの姿があった。

「固えな、黒軋」

スバンッとパンチを尽かさず繰り出す雷魚にガウエインは顔面に受ける。

ガシッ

「あん？」

「頭突きだ」

ガッアン！ と雷魚の脳を震動させる。

「——がッ！」

雷魚の頭に思いきり頭突きを食らわせたガウエインはすぐに後方に下がる。決してこちらから攻撃はせずに受けを待つ。

雷魚は頭突かれた額を押さえながら、血管がブチ切れそうになる程浮き上がりガウエインを睨む。

「く、くく……」

「………？……」

「くくくく、かかかああ！！」

まるで何かに取り憑かれたように雷魚は高笑いを仕始める。そして、

「——ッ！」

ツカッと一瞬にしてガウエインの懐に入り、そして勢いを乗せた一撃がガウエインの溝に入る。

グシャアツと音を立てて吹き飛ばした雷魚はガシツとガウエインの黒髪を掴むと^{むし}筆記取るような勢いで引き寄せる。引き寄せた瞬間に左膝をガウエインの顔面に打ち付ける。

顔面に入った瞬間に骨が砕けた音がしたと思いきや雷魚はすぐにガウエインの横顔を手刀で払った。

普通の人間ならば死んでもおかしくないコンボなのだがガウエインは耐え込んでそして、再びガシッと雷魚の手刀を受け取り腹部にパンチを放つ。

「温ぬりいんだよ!!」

だが雷魚は苦しむ顔を見せる所か笑いながら拳をガウエインの顔面に打ち込む。

そして、殴り込まれた額から血が流れるガウエイン。

「騎士ナイト気取りもいい加減にしろよ、黒軋イ!!」

雷魚はそのまま掌でガウエインの腹部を双打する。ガウエインは衝撃を受け後方に吹っ飛ばされる。そして雷魚はすぐに疾駆して吹っ飛んだガウエインの、“飛んでいるガウエインの足”を掴んでまた強烈なパンチを繰り出す。

ズダアンッ! とガウエインは固い地面に打ち付けられた。

だが攻撃していた雷魚がふと何かに気付いた。

「黒軋・・・・・・・・・・・・・・・・てめえ何で急に反撃してこない」

そう、ガウエインは確かに雷魚の攻撃を受けてから必ず反撃はしていたのだ、それなのに急にガウエインは攻撃してこなくなった。

雷魚がそう訪ねるが土煙でガウエインの姿が確認できない、雷魚は

仕方ないように返答を待たずに帰ろうとするが、

「・・・・・・・・？」

ガシッと雷魚の足首を掴んだのはガウエインだった。

「チツ、まだ死んでねえのか」

完全に殺る気モードになっていた雷魚は生きていたガウエインを面倒臭そうな顔で見た。

とどめをさそうともう片方の足でガウエインの頭を潰そうとした瞬間。

スバツと力強くガウエインは雷魚の足を引き寄せ、そして一気に放り投げる。

グウワン！ と軽く重力を無視するような勢いで雷魚は吹き飛ばされる。

（こオのクソ力野郎がッ！！）

そして流石の雷魚でも空中では為す術も無く塀にグシャアツとぶつかる。

そして暗黙が間を占め、そして互い同時に立ち上がる。

ガウエインは頭から血を流しながらも平然と歩み雷魚に近付こうとする。もちろん雷魚はそんな事を許す筈も無いのだが、何故か雷魚は突っ立っているだけで後は煙で見えない。

ガウエインは雷魚の一步前まで近寄る、またあの強烈なパンチを食

らえば内蔵やらグチャグチャになってもおかしくは無いのにガウエインは恐怖せずに近寄った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何で俺がお前に反撃してこなかったと思う」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・お前、自分の目を触ってみろよ」

もちろんそれに応える筈も無い雷魚は拳を振り上げ、勢い良くガウエインの右頬に殴りつけようとした、だがガウエインは雷魚の拳を呆気なく掴み受け止めた。

「教えてやるよ、・・・・・・・・アンタはもう昔のアンタじゃなかったんだ。もうアンタは自分を見つけた。もう自分を傷つけて無いのが分かったからオレは急に反撃が出来なくなったんだ」

力強く押し込んでいる雷魚の拳が震える。ガウエインはそれを全て受け入れる。

「アンタは、もう人の為に・・・・・・・・あの乙姫この為に泣ける『人間』になってたんだよ」

そして漸く雷魚やいばはガウエインが何を言っているのかを気付いた。雷魚はガウエインに向けていた拳を引き、そして己の目から真下にあ

る頬を触る、すると“あの日”から決して流さなかった『涙』が流れていたのだ。

ガウエインは自分でも何故この雷魚おとしをそんな事を言ったのか分からなかった。

だがガウエインは確かに、昔の雷魚とは何か違うのに気付いたのかもしれない。

※

そんな莫大なバトルが行われていたのに気付かないで竜宮グループが運営しているホテルの中にへと突き進む男女二人組も黒服の人たちと戦ったり、そして余りにも恥ずかしさに鬼気迫る気迫をぶっ放すオオカミさんこと大神涼子の『睨み』でビビりまくったりする黒服たちと会ったりして今は最上階の扉。

「……………涼子さん、あ、あの、何でそんなにキレてるんスか？」

「うるせえ！」

ボカッと亮士の頭を殴る大神、亮士にはまだ乙女の気持ちが分からないらしい。

最上階は下の階とは売って変わって作りが違ったりしていた。そして違うと言えば扉の前に立ち塞がる黒服を着た少女二人組が立ち構えている“だけ”だった。

「その長髪の方、またお会いしましたね。同じ憎むべき対象が一緒の」

その黒服を着ていた少女の一人は浦島をかなり憎んでいる青髪ポニーテールと凛々しい顔つきが特徴の少女。

「逆に意識し過ぎになんじゃナイのー？　キャハハ♪」

そして少女、と言って良いのか分からない程幼い体型をして黒服をブカブカしている女の子はケラケラと笑いながら同僚の少女をからかう。

「青海イルカ（あおうみ・イルカ）と申します、名前の漢字は鰯イルカと書きます」

「荒波美鮫あらなみ・ミサメだよ♪　そう海に豚イルカって書いて海豚イルカって言うんだもんねえー」

「そ、そっちの漢字では無い！　さかなへんの方の鰯イルカだっ！」

「正直どーでも良いー♪」

きききき貴様ア！ と勝手に仲間内で喧嘩を仕始めるイルカと美鮫。そんな二人を見ていた亮士は不思議そうな顔で見ている。

「な、何で俺たちと同じくらいの年齢の人たちがこんな場所で黒服を着てるっスか？」

最もな意見なのだが大神の耳には入って来なかった。今日の前に居る少女から目が話せないで居たのだ。

「（間違い無く、イルカって奴は強い。もう片方の方が分からねえが絶対に油断しない方が良い、騎士先輩から教えだ）」

大神は言い争っている（片方がからかわれている）二人が見てない隙にねこねこナックルを装着させた。

だが見向きもしていなかった青髪ポニーテールのイルカは実に平然と口を開く。

「そんなふざけたグローブでなんとか出来るとでも？」

「——っ!？」

本当に突然だった。

正しく自然体のままでイルカがそう答えたのだ。大神はすぐにイルカを見ると正面から大神と亮士を見据える。

——なんて堂々しく立派なのだろうか。

大神は同じ女として見惚れた。男には無い気品がありしも荒々しい
気迫、綺麗で隙が無い構えと瞳。あんなにも凛々しくなれるのかと
聞きたくなる程に青海イルカは凛々しく綺麗に映っていたのだ。

「なんの理由で竜宮グループに突っかかるか存じ知りませんが、お
嬢様の邪魔立ては許しません、許す訳にはいきません」

そして黒服のポケットから黒い手袋を取り出して手にはめるイルカ。

「……オレと戦うのか？」

「貴女以外に誰と？ まさかその貧弱そうな男と戦わせるのです
か？ 視線に臆する時点で勝負は目に見えています」

ギュッと黒手袋をはめたイルカは力強く握り拳を作り構える。美鮫
は横で微笑んでいるだけだ。

「……いきます」

そうイルカが答えると床下を蹴るように大神の目前に駆ける。

そして黒い線が伸びるように大神にパンチを繰り出すイルカ。だが、

「律義に忠告してから迫るって、待ち構えるのに十分だ！」

「……防いだのですか」

大神は直球に迫ってきたイルカのパンチをねこねこナックルで防い
だのだ。まさか塞がれるとは思わなかったイルカに数秒の隙が生む。

「オラァッ！」

「・・・んっ!？」

大神は尽かさず強烈なパンチをイルカに繰り出す、イルカも素早い反応で防いだ。

ザッと距離を置いた二人。

「大した反応速度ですね？」

「はっ、そっちな！」

そして少し離れた場所で見ていた亮士。

嗚呼、なんか次元が違くない？的に呆然と見ていると横から美鮫が近寄って来た。

当然亮士はビビりまくるのだが、

「対人恐怖症と視線恐怖症ねー、それは本当に大変だねアハハハ♪」

美鮫は笑いながらそう言って亮士を直視しないように語りかける。

「対人恐怖症は近くに人が居たり話し掛けたりされるのが怖いんだよねえ、ごめんねごめんね。でも人間的にはやっぱり言葉というモノが一番相手に効率良く極簡単に伝わる方法なんだと思うんだー♪」

「は、はあ」

あどけない亮士の返答に美鮫は笑いながら進める。

「そっちに確か、黒軋ガウエイン、とか変わった名前を持った先輩居なかったー？」

「い、居ますけど……それがどうしたっスか？」

「今この竜宮城^{ホテル}の近くの空き地で激闘繰り広げてるよお♪ キャハハハ、あの署長と戦ってまだ生きてるってあの人も化物だねえ」

亮士はこの場面で同じ寮暮らしの良き先輩、ガウエインが出るとは思わなかった。だから純粋に亮士はビックビックしながらも美鮫に向き合った。

美鮫の顔、可愛い顔をしていた。だが何処か影のある表情で一体何を感じて、何を思っ言葉吐いているのか分からない顔をしていた。

だから亮士は一度一瞬にして“ある意味違う恐怖”が胸を横切った。

「さーてと、そろそろお嬢様も戻って来そうだし止めに入るかなー♪ そっちはあのスケ番さんを止めてあげてー」

美鮫は幼ながらの笑みでバトルしまくっているイルカと大神を止

めに入った。亮士は少し訳が分からない状態だったがすぐに指示を従った。



警察沙汰にならなかったのが本当に幸いだった。

海月^{くらげ}は遠くからそう思って雷魚とガウエインの戦いを見ていた。

「なかなか倒れんのじゃのう、あの少年は」

見慣れている感じで呟いたのは海月の隣で堂々と立っているのは巨漢であり何処か古みのある顔をした鯨良^{くじら}だった。

「ら、雷魚さんはッ！」

「ん・・・？」

「ら、雷魚さんは何であんな、あんなボロボロになるまでに頑張る

んですか！？ 私は雷魚さんの過去を知りません、何かしらの過去でああなったのは私も深く理解しています！・・・・・・私もそうだったように・・・・・・」

「・・・・海月」

「でも高校生を止める為にバズーカやら爆破やらって、絶対に違います、間違ってます！」

雷魚の今回の行いに疑問を持っていた海月、海月は隠す事の無いように鯨良にそう言った。鯨良は哀しい顔になってポンっと海月の方に手を置いた。

「儂もちつとしか聞いとらん、署長があんなに大々的にやると思わなかった。じゃがのう、恐らく儂らじゃ理解出来んのかもしれんのう、あの人は深い、深い、深淵に居るのじゃからなあ・・・・・・」

「・・・・・・」

海月は鯨良にそう言われると半ば納得のいかない顔をしていたが直ぐに雷魚とガウエインの戦闘を見た。

（じゃが、確かにもうそろそろ時間じゃのう）

鯨良は携帯を取り出し、ある人に電話を掛けた。



「きゃーいやー！ 助けてー！ 犯され……」

そんな声を後に無情に閉まるドア、悲鳴が途切れる。

イルカと大神の戦闘は美鮫の大胆不敵な行いにより終戦させ、亮士も殴られながらも大神を止めた。

そして止め終えた瞬間に竜宮乙姫が到着し、奥の部屋にへとダッシュ＆ダイビングし浦島とやっとの再会。

助けを懇願する浦島を睨む付け殴り行きたくなる大神を亮士が抑えていると艶っぽい女性の声が聞こえると思えば竜宮グループの社長である乙姫の母、竜宮姫子が立っていたのだ。

乙姫に年齢と色っぽさを足したような美人さんで、とてもじゃないが三十歳を越えているようには見えなかった。

その姫子は互いを愛し始めようとする娘を後にして大神と亮士を別室に連れて行き、イルカや美鮫、そして黒服の人たちがお茶の用意を出してくれた。

「あなた達が太郎ちゃんを匿^{かくま}ってたねえ、道理で見つからない訳よ」

「姫子様、角砂糖を持って来ました」

「あら、ありがとうイルカ」

大神と亮士は紅茶で姫子はコーヒーを飲んでいた。イルカや美鮫はお茶を用意するとすぐに外に出て行った。

「結構焦りながら出て行ったけど、何かあったのか？」

大神が紅茶を飲みながら姫子に聞く。

「そうねえ、ちょっとね」

姫子は艶かしい笑顔を見せながらそう言う。亮士は顔を赤くしていた。それを見た大神は若干不機嫌顔になっていた。

（……私が止めに入れば良いのだけど、ね。あの人は）

二人に笑顔を見せた姫子だったが内心は不安の気持ちだった。

その時だった。

「どおれ、儂が赴いてやろうか♪」



「オラアッ!!」

「・・・くっ!」

ドカアッ! と雷魚の突き足がガウエインの溝に入る、だがまたガウエインも突っ込んで来た足の首を掴み引き寄せ殴り落とす。

これの繰り返しだけなのだ、だがこの繰り返しだけで空き地だったこの場所はクレーターやらコンクリートの壁などが大破している。

「ふう、ふう・・・がはっああ!」

「もう、止めたらどうだ、雷魚」

雷魚は己が攻撃を集中し過ぎで防御をしていないのに気付いていなかったのだ。

当然ガウエインの拳撃が雷魚の身体を攻撃され、ボロボロだ。だがガウエインもそれは同じ、ガウエインは通常の人よりも骨が強くちよつとやそつとじゃ壊れない。だが雷魚から受けるダメージはかなりのもの。

ガウエインの十発のパンチを雷魚は一発で放てるぐらいの実力があるのだ。

だからガウエインも己の体力も限界を迎えるのを感じてはいたが感情を露にしないので相手は分からないだろう。

「チイツ！ うるせえんだよテメエはよう」

雷魚は相変わらずガウエインを睨みながらも立ち上がる。

そしてまた殴り掛かろうとした、だがその時。

「そこまでじゃ、雷魚よ」

停止。

その言葉で雷魚は止まったのだ。

これまたガウエインは驚いていた、まさか誰かの言葉で雷魚が動きを止めるなんて、と。

やって来たのは老体とは思えない巨大な体と服越しでも分かる筋肉。そして海に引き摺り込むようなビリビリと海魔クラークンのような威圧感、全てを飲み込んでしまいうような海凶リヴァイアサンの眼光。

信じられない。

こんな人間がいるのかと。

この人の前だと化物が小動物に見えても可笑しく無い、と核心を言える、ガウエインはそう思った。

「……海間^{かいま}さん」

「ちと暴れ過ぎじゃぜ？」

海間と呼ばれた老人はゆっくりと、そして重く深く近寄ってくる。

「姫^{ひい}さんがお呼びじゃ、あそこでお前^{めえ}らを止めに入ろうとした部下から訳を聞いたが、雷魚がワリイぞ」

「……邪魔をされるのが嫌だったので」

「ばーか、お前^{めえ}はそれでも署長か？ 確りしろやあ」

ドバンツと背を叩かれた雷魚は変な曲がり方をして崩れる。完全にくの字に曲がっていた。

「その若い者も着いて来い、話は中で聞けば良いじゃろう」

そう言って促されたのでガウエインは下手に逆らわずに着いて行っただ。雷魚はそのまま倒れたままだったが放置。



「姫^{ひめ}さん、連れて来たぞ」

ガウエインは怪我しまくりのままホテルの最上階まで上がり、別室でお茶を飲んでくつろいでいた大神と亮士を見て安心するガウエイン。

「「騎士先輩ッ!?!」」

「ガウエインさん!!」

大神と亮士、そしてついさっき到着したばかりの赤井林檎もガウエインのボロボロの姿に驚いていた。

三人は先輩であるガウエインに近付こうとしたら、いつの間にか居た竜宮グループの最高責任者である竜宮姫子が長身であるガウエインに抱き着いた。

後輩三人組はもちろん驚いていたが、もっと驚いた事に姫子が泣きながら抱いていることだった。

「「ごめんなさいね、本当にごめんなさい。……あの人の苦しみを貴方に無理矢理押し付けて」

長身なガウエインの胸板に泣きつく姫子は本当に謝罪以上の感情で

ガウエインに語りかけていた。

「あの人は、『自分は壊れている』とか言っているけど、そんな筈が無いわ。壊れていたりしてたら強姦されそうになった私を助け出したりしない。ヤクザの部署を壊し尽くしたりしないの……」

もしこの場に雷魚が居れば必ず『違うッ!』と絶叫するだろうだが生憎とこの場には雷魚は居ない。

姫子是人前を気にせずに涙を流して謝っていた。

海間も数分は姫子の好きなようにさせたが、姫子を慰めるように頭を撫で落ち着かせた。

「すまんのう、姫^{ひい}さんは昔誘拐^{ひい}されての、誘拐した奴らの目的は竜宮グループの稼いだお金を身代金として要求してきたのじゃ。儂も単独で乗り込めば何とかなったんじゃが……何分老いてしまったのう、大事な姫さんを傷付けなくなかったんじゃ。じゃが奴らはそれを見通して、のう」

海間は実の娘のように姫子を抱き寄せた、泣きじゃくる娘を抱っこする父親のように優しく背中を摩る。

「姫さんを犯そうとしたのじゃよ、テレビ中継し、全局の面前での海間は己が握っていた拳から血が滲み流れているのを分からないように、力強く握り締めていた。

「じゃが、そこにアイツが乗り込んで行ったのじゃよ」

そこで、今まで黙っていたガウエインの口からポツリと出た一言で大神と亮士、りんごは納得する。

「海淵雷魚か」

コクリ、と海間は頷いた。

「そうじゃ、雷魚が乗り込んだお陰で儂らも乱入出来たのじゃ・・・
・・・あ奴のお陰で姫さんも汚されんかった」

それからじゃ、と海間は話を続けた。

その後に姫子を誘拐したのが《朱鯨組》^{アカシャチ}という極道一家がしたものだ
だと判明すると雷魚は単身で《朱鯨組》に乗り込み、全焼させた。

《朱鯨組》は元は竜宮グループの荒事専門に計らっていた組だったのだが、行動が荒く、勝手に竜宮グループの女たちに手を出したり、金を勝手に使ったりと大変迷惑していたのだが、当時竜宮グループの初めての男社長であった竜宮海神^{りゅうぐう・かいじん}は親友であった海間海凶^{かいま・みきよう}を雇い入れ、竜宮グループの荒事専門部署を設立させた事に《朱鯨組》との契約を切ったのだ。

だがそれを知った《朱鯨組》は竜宮海神の娘である姫子を誘拐し、億単位の身代金を要求してきたのだが、一匹の化け魚に滅ぼされたのだ。

だが《朱鯨組》は裏との繋がりが深く、雷魚は何十回、何千回と殺され掛けた。

だがアイツは死ななかった。

「外国に行け、と儂が進めたのじゃ。アイツはすぐに外国に行ったのじゃが、さっそく空港でドンパチやりやがったのう。マフィア共の目の敵になって日の本に帰って来よったのじゃ」

「あ、あの人よく生き残れたな・・・」

姫子も落ち着きを取り戻し、今はゆっくりしている。机に並べれた紅茶に手を伸ばす暇も無く大神や亮士、りんごは海間の話を真剣に聞いていた。

ガウエインは治療の為に医務室に連れて行かれた。

「それからじゃ、アイツを儂の席を譲った」

「荒事専門部署の最高責任者である署長、にですのね」

「そうじゃ」

そして海間は雷魚の補佐をする為に副署長の席に座ったのだ。

「まあアイツは滅法喧嘩強いからのう。いろいろと大変じゃったが、掃除するのには便利じゃったわ！　がっはっはっは！」

海間は話を進めて行くと、すぐに誰か来るのに気付いた。

「ははは、楽しい笑い声が聞こえてきましたね。乙姫さん」

「はい、太郎様あ」

部屋に入って来たのは真っ白に燃え尽きた浦島とツヤツヤな顔になって浦島の腕に抱き着いている乙姫だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そーいや居たなコイツ」

「あはは、灰になってますの」

浦島はニヒルに答える。

「ふっ、いろいろ吸い取られましたよ」

そのまま浦島は落ち着きを感じさせる優雅な態度で空いていた椅子に座る。もちろん自分が座る前に乙姫用の椅子を引くのを忘れない。

「なんかとても紳士的ですね」

「しかも、渋いな」

「これはいったいなんなんっスか？」

その皆の疑問に海間と姫子に視線が流れる。海間は『がっはっはっは！ 相変わらず元気な若造じゃなあ』と笑っていた。姫子が疑問に答える。

「あー、この太郎ちゃんね。性欲とかのよこしまな部分を全部吸い取られちゃったから、本来太郎ちゃんが持つてる素の部分が出てるのよ」

「おもしろいじゃろう?」

「いや、おもしろいっていうか、気持ち悪い」

「ふふっ、ほめても何も出ませんよ、お嬢さん」

「ほめてねえよ」

変な浦島になって話している所で海間は姫子に耳打ちして部屋から出て行った。

※

「ジッとしていて下さい、……………署長と戦って無事なんて」

ここは医務室、そこに上半身を裸にされ、何処か異常が無いかを確認していた。診ているのはイルカなのだが愧鯨と海蛇かいだも居る。

「化物だ」

「愧鯨さん！ そんな言い方どうかと思います！」

「そうだぜ兄貴いゝ、でもそんな負け犬、あ、いや、負け“鯨”の遠吠えのように食い付く兄貴もカッコ・・・ブガアツツ！！？」

海蛇は最後まで言えずに愧鯨に殴られる。イルカは鬱陶しそうな目で二人を見ながらガウエインの身体を診る。

（あの雷魚署長のパンチを受けて骨が“折れて”いない！？　しかもただ赤く腫れ上がっているだけ！？）

イルカは信じられないような物を見るようにガウエインの上半身を凝視する。

それに気付いた愧鯨は、

「なんだよなんだよ、男の身体に興味を持つような年頃かあゝ？」

「やあゝい、やあゝい！　変態なタイヘンだゝ」

中学生の如きはしやぎようで騒ぐ愧鯨。そしてそれに便乗し意味の分からない言葉を発する蛇。

「・・・・・・・・^{うろ}煩い雑魚だ」

ぴしゃりとイルカが無表情でそう言うと二人は面白いように時が止まり、動かなくなる。

「……もう大丈夫だ」

ガウエインは再び診察しようとしたイルカにそう言うのと立ち上がり、服を着る。

「ま、待って下さい！　まだ治療が……」

「何も問題は無いですよ、自分の身体は自分が一番知っていますから」

そう言ってガウエインは直ぐに医務室から出て行った。愧鯨はそんなガウエインの反応を面白くなさそうに思いながら出て行ったガウエインの手にしたドアを睨んでいた。

※

竜宮グループの運営しているホテルから出て来るガウエイン。黒服たちの騒動もあったせい客は居なかった。

ガウエインは空き地に置いたまま、もといぶっ飛ばされたままの鉄^バ馬の元に向かう。

雷魚との喧嘩は決して楽な喧嘩では無かった。軽く『戦闘』になっていただろう、よく警察沙汰にならなかったのか知りたいくらい派手に喧嘩をした。片方はバズーカを放ち、化物染みた強さで殴り掛

かってくるに対して、ガウエインは本当に耐えきった。

足取りが重い、果てしなく重い。

疲労。

雷魚との喧嘩で大量の体力、そして、

（骨・・・一ヶ所だけ折れてるな、背骨、あばら、腕骨？ ダメだ。全部のヶ所が軋んで痛い）

軋む痛さを我慢しながら重い足取りのまま空き地にへと着く。

「GALLー10（ガラティーン）・・・ねえ、名前にちなんでこうなったっちゃったのかう？」

だがその空き地には屈強な肉体をしているのが服越しでも分かる老人がガウエインの漆黒に輝く鉄馬バイクを運んで来き。

ガウエインは軋む身体を強引に張り上げ、戦闘大勢を取る。だがすぐに“何か”に捕まれる感覚に襲われた。

（・・・・・・何ッ？）

目の前に“何が”居るんだ？

ずっしりと来る、やって来る。

「なんじゃ……」

バイクを運んで来た老人はガウエインが冷や汗を流しているのに気づく。するとポリポリと頭を掻きながら老人は言う。

「そんな身構えんでくれえ、昔の癖でこっちも気が重たくなるわい」

「………貴方は、海凶さん」

ガウエインのバイクを運んで来てくれたのはどうやら竜宮グループ荒事専門部署で副署長を務めている海間海凶だった。海間は鍛え抜かれた片腕でバイクを、大型二輪自動車を片腕で横に移動させる。

「……すまんかったのう、じゃが若いもん同士でぶつかり合った方が良いじゃろう？」

何が良いのだろうか、ガウエインはそう思ったが口にしないでバイクを受け取る。

「乙姫ちゃんもこの件をいつかは知るじゃろう。その時はきつと謝りに来る、その時もよろしくお願いしますぞ」

ニヤツと深みのある笑みを浮かばせながら海間はガウエインに言う。ガウエインは話を聞きながらバイクの点検をする、そして何も問題が無いと分かるとすぐに西洋兜ヘルメットを被り海間と向き合い口を開く。

「海凶さん、二度とそんな事をしないで下さい。自分が言えることはそれだけです」

ただそれだけ。

それだけを言うとかウエインはエンジンを蒸かし、そして直ぐに走らせて帰路に進んだ。

「『二度とそんな事をしないで下さい』ねえ、それはお前が雷魚アイツと二度と戦いたくないのか、それとも……雷魚アイツをこれ以上苦しめるな、という意味が含まれておるのかのう……」

海間はもうすぐ日が暮れる空を観ながら、そう呟いた。

第12話「雷魚の哀苦（かなしくるしみ）」（後書き）

第13話「ホワイトホース・プリンス・ナイト（白馬王子の近衛騎士）」（前巻）

更新を遅れてすみません！！

『オオカミさんと七人の仲間たち』のDVDを買ったのですが、やっぱ魔女さんが一番可愛かったです！！

今回は二人新しく円卓の騎士が出て来ますが、名前は出ていません。小賢しいようですが名前を予想してください（笑）

分かりやすいかもしれませんが・・・

第13話「ホワイトホース・プリンス・ナイト（白馬王子の近衛騎士）」

今日の地上店は一年生が担当という事でガウエインは地下にある大きな部屋で地上店を映しているモニターを見ながら緑茶を啜りながら見ていた。

そして目の端に少しだけ映るのは同じ御伽銀行メンバー。

頭取はパソコン画面を使ってゲームをしてなかなか奮闘中で、桐木アリスは御伽銀行に関する情報をパソコンを使って整理したりしている。同じパソコンを使っているのにも関わらずここまで差が丸わかりなのは頭取の非労働意欲から湧き出ているのからか？とガウエインは思いながらまた目を泳がす。

279

相変わらずメイドな鶴ヶ谷が部屋を掃除をしていた。

ガウエインは緑茶を一気に飲み干し、掃除をしている鶴ヶ谷を呼ぶ。すると鶴ヶ谷は直ぐに反応してニコニコ笑顔でガウエインから湯飲みを預かる。

「おつう、緑茶を二つだ」

「？・・・誰かお飲みになるのですか？」

「そうだ」

鶴ヶ谷は可愛らしく小首を傾げ、疑問を抱きながら湯飲みで緑茶を入れる。

「緑茶です」

鶴ヶ谷はわざわざお盆に湯飲みを置いてガウエインの元に持って来た。ガウエインは緑茶が入った二つの湯飲みを取り、テーブルに置くと鶴ヶ谷に『座れ』とジェスチャーするガウエイン。

「・・・?・・・」

鶴ヶ谷は不思議がりながらも座る、するとガウエインは緑茶の二つの内一つを鶴ヶ谷の目の前まで移動させる。

「休めよ、地下^{こく}は設備が良いから外との温度が極端に違う。掃除ばかりやっていたら体が持たない」

そう言ってガウエインは入れてくれた緑茶を飲む。

そして座っている鶴ヶ谷に微かに聞こえる『・・・うまい』と呟く。すると鶴ヶ谷もガウエインの気遣いに気付き、目の前に置かれた湯飲みを上品に両手で掴み取ってガウエインに顔を向けると。

「ふふふ、ありがとうございます。ガウエインさま」

可愛らしい微笑みで礼を言う鶴ヶ谷、メイドスキな人ならば理性を吹き飛ばしてしまいそうな笑顔だったのだが、ガウエインは無表情な顔のままコクリと頷いてモニターに眼を向ける。

鶴ヶ谷もガウエインと一緒にモニターを見ていると、地上店のボロ部屋にトレーニングウェア姿の王子が部屋へ入ってきた。

「あの方は王子さまですね」

「白馬王子か……」
はくば・おうじ

鶴ヶ谷は緑茶を半分まで飲むと太股の上に両手で掴みながら置いてモニターに入ってきた人物の名を言うと、ガウエインは虚ろのような目をしながら名を呟く。

「どうやら王子は前に作った『貸し』を返しにきてもらったらしく、りんごが話を進めていく。」

王子はどうやらもうすぐ始まる対抗戦の為に減量をしているらしく、初夏の入ったこの季節に厚手のトレーニングウェアをきっちり着込んで走り込みをしていたらしい。

御伽花市にある三つの私立高校の運動部は定期的に対抗戦を行うらしく、会場はそれぞれの高校が持ち回りで担当している。以前は御伽花市唯一の公立高校も加盟していたらしいが、参加しなくなっただけで久しい。

そして今回の会場となるのが御伽学園と決まっており、会場となれば応援も増えるので負けたくないというのが王子の気持ちらしい。そこで王子は大神をスパーリングパートナーとして来て欲しい、と言うことでこの御伽銀行まで来ていた。

と、そこまで話をモニター越しで聞いていたガウエインだったが、立ち上がり地上店へと繋ぐ階段にへと向かう。

「何かご用事なのですか？」

鶴ヶ谷はガウエインに聞くと、

「少し、王子^{プリンス・ナイト}近衛騎士を会いに行ってくる」

ただそれだけを伝えてガウエインは上がって行った。

「プリンス……、ナイトさまですか？」

鶴ヶ谷がガウエインの言った言葉を疑問に思いながら頭取やアリスに顔を向けると、頭取は相変わらずゲームに夢中で代わりにアリスが鶴ヶ谷の質問に答えた。

「王子近衛騎士おうえいのえきしと漢字で書き、読みはプリンス・ナイトと読みます。
データでは……鶴ヶ谷さんと同じ高等部二年生の――

――」

「えっ！」

鶴ヶ谷はその名前を聞いて驚いていた。

その王子近衛騎士の人物の名は、



ガウエインは地下本店をバレないように別の入口から出て、また地上店であるボロ部屋に向かうと、入口の所には王子を待っている二人組が居た。ガウエインはその二人組の近くまで近寄ろうと足を一

歩踏もうとした瞬間だった。

「おやおや、これはこれはあ、黒騎士ではないかあ」

「・・・本当だ、ガウエインだ」

二人組はガウエインの微かな気配を感じてすぐに振り向く。

そこには王子と同じトレーニングウェアを着ている男子高生と女子高生の二人が居た。男子高生の方は背がガウエインと同じくらいの長身であるのだが、見事に不釣り合いな小さい身長をしている女子高生と共に王子を待っているらしい。

それぞれ色違いのトレーニングウェアで、男子高生の方は紫色の線が入ったトレーニングウェア。女子高生の方は桃色の線が入っているのだが男子高生のトレーニングウェアより洒落気があり『最近の若いスポーツ少女風』な感じのトレーニングウェアだった。恐らくこの御伽花市で一番売られているのは間違い無く女子専用の物が多い。

単にこの御伽花市を牛耳っている御伽学園学園長である荒神洋燈あらがみ・ランブが大の女好きだからか、それとも何か狙いがあって女子専用の物を集中的に力を入れてやっているのか・・・・・・・・謎のままである。

そんな洒落気のある桃色の線が入ったトレーニングウェアを来ていた女子高生は服の線の色と同じ髪色を靡かせながらガウエインの元まで近寄る。

「ガウエイン、何か用？」

小さな身長なので上目遣いになってしまうその少女にガウエインは

男子高生の方を向いたまま答える。

「確かに用があつて来た。同じ『円卓の騎士』としてな」

ガウエインがそう言うのと男子高生は薄ら笑いを浮かばせて足を運ぶ。因みにこの男子高生はトレーニングウェアに入つてある紫色の線と同じ髪色が特徴的である。

「ほほう……それで何用かな黒騎士？」

紫髪の男子高生は狂気染みた眼差しでガウエインに近づいていく、もし普通の人間ならば尋常じゃないこの紫髪の男子高生の眼差しには耐えられないだろう。素人でも分かるような“狂ったような目”でどんどんと詰め寄せられれば恐怖が自然と流れ出るものなのだが生憎とガウエインは『普通の人間』では無いので怯む筈も無く平然と立ったまま喋り続ける。

「あの白馬王子と言う人物についてだ」

そこまで言つた瞬間だった。

スゥーと何かが静かに“切れて”いた。

切れた場所はガウエインの喉元で、綺麗に横線に切られている。

ガウエインは紫髪の男子高生の手元を見てみると、彼の脈の所に小さなナイフを仕舞う所だった。

「残ア念な事に人を殺してはいけないと王子と約束しているのでなあ。殺さない程度に忠告してやったぞ？」

彼は物の数秒でナイフを取り出し、そして綺麗に喉元を“掠り切る”行為をしてやったのだ。そして見えなかった『仕舞う動作』も並の人間神経でやれる筈も無い。

これが『円卓の騎士』の実力。

「王子に関わるなよ？　王子の邪魔をしようと言うのなら黒騎士、貴様を刺し殺す」

「ダメ、そういう危ない言葉も使っちゃダメって王子言ってた」

「おっとそうだったなあ、如何せん言葉と言うのは本当に難しいなあ。やはり話すより殺した方が良い、殺した方が話さくて良いじゃないか、殺しは楽だ。よく言うじゃないか『死人は口無し』とな？　クハハハ」

やはり壊^{いか}れている。

ガウエインはすぐにそう思っているとボロ部屋から出てきた王子は話をしているガウエイン達の輪に入ってきた。

「やあ、黒軋君。何の楽しい話をしていたんだい？」

王子の笑顔にガウエインは少なくとも引くような感覚に陥った。壊れた騎士を従える王子。

（少なくとも、この二人の性格は分かっている筈だ）

ガウエインは疑問に思ったこの二人の性格の取り扱いと、何処か陰

険な感じがする王子にもう一度話を振ろうとすると、

「話は今終わった、走り込みを続けようか、王子よ」

「うん、そうだね。それじゃ二人共行こうか」

「競争」

紫髪の男子高生が話を終えたと王子に伝え、王子もそれを確認して走り込みを続けに御伽学園の校門まで走って行った。勿論走っている王子を見ていた女の子たちは黄色い歓声を上げていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガウエインは王子を守るように走る騎士二人組を後ろから見ながら思想を巡らせていた。



御伽学園は運動施設も充実している。

グラウンドも第五まであり体育館は三つ、武道館、弓道場などもある。そんな豪華施設の中でボクシング部も専用の施設が用意されて

いるのだが、ボクシング部のジムの外観はボロい。

そんなボロいボクシング部のジムの前に立っているのは、上は大きめのTシャツ、手にはバンデージを既に巻いてあり、小脇にグローブを抱えている大神涼子。そしてその隣に立っていたのは黒いコート姿の黒軋ガウエインだった。

「……どうして騎士先輩が居るんですか？」

「……それは偶然重なったただけだ、俺も用事があったてここに来た」
まあ良いですけどね、と大神が呟きながらノックをして扉を開ける。
すると中から熱気と汗のにおいが流れてくる。

「失礼します」

「……失礼します」

先に大神が入り後からガウエインが入って扉を閉める。大神とガウエインが中に入るとボクシング部員が近寄ってきて聞いた。

「あれ、黒軋じゃねえか。それと君は……新入部員？」

どうやらガウエインと同じ二年生なのか、ガウエインを気軽に苗字で呼び掛けてから横に居る大神に気付く。

大神が説明しようとしたときに聞き覚えのある声が聞こえた。

「その女性は王子の練習相手として来てくれた娘だよ、そしてそこで黒く突っ立っている奴は、知らん」

「部長の？……て、スパーリングパートナーって」

「その娘だ。おい、王子っ、姫様の到着だ」

その声主は王子近衛騎士の一人であるあの紫髪の男子高生だった。

「あのッ！」

そして紫髪の男子高生の言葉が気に入らなかったのか、大神はズンと物怖じしないで彼の目の前で来るとギンッと睨みながら、

「姫様とか、言わないでもらえますか？」

「……………」

大神の態度に周りのボクシング部員たちがシンッと急激に静かになった。何故か温度も下がった感じがした。

（まさかアイツッ！）

ガウエインは最悪な想像を浮かばせて一気に走り出す。
ヴァイジョン

なんとかアイツから大神をつ！

その考えでガウエインはすぐに大神の間まで来るとすぐにガウエインは大神を守るように後方にへと下がらせた。

「……………騎士先輩？」

大神も流石に静かになったボクシング部員たちに気付いて疑問がっていたが今は紫髪の男子高生だ。

「……言葉というのは本当に、ほんとー実に面倒だ……………」

ガウエインはグローブを着けている紫髪の男子高生を注意しながら言葉を発する。

「この間のような真似は止せ、“王子に迷惑”を掛けて良いのか？」

ガウエインは一か八かの賭けでそのネタを出すと紫髪の男子高生はチツと舌打ちをすると、ガウエインの背後ろに居る大神に顔を向けて笑顔で、

「いや済まない、以後気をつける事を誓おう」

本当に謝っているのか、と聞きたくなるような笑顔で言う紫髪の男子高生。だが聞けない、その笑顔には『狂気と殺意』に染まっていたから。

その後は何の支障出さないで王子のスパーリングパートナーとして練習出来たのだが、ガウエインはずっと紫髪の男子高生と向き合ってたままで外に居た。他の部員も少し狼狽えていたがきちんと練習して帰って行った。

「何か用なのかあ、用が無ければ俺は王子の元に――」

「待て」

ガウエインは紫髪男子高生の肩を掴もうとすると、逆に腕を掴まれ壁にガウエインを押し付ける。

するとガウエインの目前には怒り狂っていた彼の顔があった。

「抑えきれねんだよッ！　殺したくたくて殺したくて殺したく
て殺したくで殺したくで殺したくで殺したくで殺した
くで殺したくで殺したくで殺したくで殺したくでエッ！
掻き剥き出すこの衝動を抑えきる事が苦痛以外の何でも無えんだ
よ！！　なあ殺して良いかあ？　殺して良いよなあ？　つか殺され
ろよオオオオオオオオオツツツ！！！」

途中までは言葉として聞きとれていたが後半からは奇々な絶叫となつてナイフを押し付ける紫髪の男子高生、ガウエインは黙つて待つ。すると彼は自分が今どんな状況なのか理解してすぐに抑えようと自分の腕にナイフを軽く刺し、痛覚で正氣に戻す。

「ハアハア、クソツ。誰も居ないな」

彼は周りを見渡ししながら腕から流れ出る血を布地で隠す。

「ハアハア、貴様は、ハア、貴様は黙って見ていれば良いのだ、そして――」

何かを口にした彼はすぐに歸路に着いて歸つて行つた。

「そんなに、自分が苦しんでも王子の為に己を抑えるのか」

第13話「ホワイトホース・プリンス・ナイト（白馬王子の近衛騎士）」（後書

どうでしたか？

また個性的なキャラかな、と思って書きましたが、やはり難しいです！

因みに魔女／マジョーリカさんの名前（姓）は『アーサー王物語』に登場するモーガン・ル・フェイから取られています。

そしてモーガンの姉は『円卓の騎士』であるガウェインの母・モルゴースであり、よく映画や小説ではモーガンとモルゴースを同一人物として描かれていたりするのです！

こんな風に『円卓の騎士』たちを色んな元キャラとして使っていきますので、どうかお楽しみにっ！

感想やコメントを待っています！

感想やコメントだけでは無く質問も快く受け付けていますのでどんどん送って下さいまし！

第14話「騎士と王子を護る騎士」(前書き)

マジBluray半端無いッス……何スカあの高画質。『オオカミさんと七人の仲間たち』二巻を買ったのですが、マジ綺麗でした！

マジヨリカさんめっちゃ可愛いです！

そして浦島太郎の声優である浅沼さんって『星空へ架かる橋』の主人公の声じゃないですか(＊|＊)

乙姫ちゃんは『禁書目録』や『超電磁砲』でも登場する初春さんの声ッスし(汗)

声優陣半端無いスね(＜ε＞)

今回は結構残酷な表現がある話なので無理な方は無理をなさらずご覧下さい(涙)

第14話「騎士と王子を護る騎士」

ドスッ！

ドスッッ！！

誰も居ないボクシングジムに響くは余りにも鈍い音。

拳を思いきりサンドバッグを殴り付けた音だった。

その殴り付けた本人の後ろには付き従う『騎士』のように立つ二人組。

「……その腕はどうしたんだい、《パーシヴァル》」

《パーシヴァル》と呼ばれた紫髪の男子高生はヒラリと自らの愛用するナイフで綺麗に突き刺した跡を見せる。

「いやなーに、少し自分の『殺意』が暴走しかけたから“自ら突き刺しただけ”だ」

異常。

まるで端から何も疑問に思っていないように話すパーシヴァル。

「……そうかい」

そして聞いた本人も無関心のように聞き流す。

ドスッ！

そして再び鈍い音が響く。

「計画進行中……？」

「ああ……」

そして桃色の髪を小さいサイドポニーにした少女が静かに聞くと、聞かれた本人・白馬王子は苦り切った声が二人の脳裏に焼き付く。

「思い通りにいかない狼を狩りに行こうか」



黒靴くろきしガウエインは今、マジヨーリカが居る『魔女工房』で暇を持て余していた。

それは何故か。

「『ねこねこナックル改』ですか？」

「そうだヨー！ このグローブから伸びたコードは電気が流れてて、人を殴るとビリビリになるヨー☆」

「おおー！ ですよ！」

「もちろん手は絶縁体で守られてるから安心と大丈夫のダブルセツトなのヨー☆」

「凄い強力ですよ、今回のねこねこナックルはっ！」

「・・・最早、女子高生が持つような代物じゃ無くなってきてるな」

ガウエインは魔女工房にある不思議な形をした椅子に座り、マジョーリカが嬉々（奇々？）とした笑顔でねこねこナックル改を赤井林あかい・りん檣んごに渡している途中で話に割り込む。

「確かに荒事専門になって下さっている騎士先輩が居るので、涼子ちゃんにこのような可愛くもえげつないきょうき・・・・・・・・・・・・もとい凶器を持たせるのは私も納得はしていませんの」

「ノリノリでマカにアイディアを笑顔で提供していた者の発言とは

思わせない口だな。それともいっておきながらハッキリと凶器と発言してるぞ」

「大丈夫だヨー！」

「何が大丈夫なんだ、マカ」

マジョーリカが元気良くヒラリと長いブレザーと共に回転してからピッと人差し指を立ててガウエインに言う。

「たかが五十万ボルトの電流が流れるだけだヨー☆」

「流された相手は“たかが”で済まされない危害だな」

だが生憎と感情が余り無いガウエインにとってその危害さも良く分かっていない状態なので『まあ・・・良いか』で済まされた。

その後はまた別の開発について話が発展していき、ガウエインはマジョーリカに断ってから御伽学園を彷徨う。

「酔う？ ガーイン邪ないカ」

「また俺の呼び名が変わっているな“ケイ”よ」

そして本当にやる事が無いガウエインの前に現れたのはまた奇天烈な恰好をした『円卓の騎士』の一人でもある本名不明である“ケイ”だった。

今日は何故か袴の上にブレザーを着て、鰐ワニの覆面を被っていた。

背後から声を掛けられたので一目見れば仰天ものだったのがガウエインは相変わらず何も反応しないでいつも通りの対応する。
ケイもその変わらない対応につまらなそうに溜め息を吐く。

「何だ、その妻羅無^{つまらな}い犯能^{はんのう}は」

「何か反応すれば良かったのか？」

「……妻羅乱^{つまらん}」

鰐の覆面のアゴをフガフガとしながら袴の懷からプリントを取り出す。

プリントがグシャグシャに折り曲がっていた。

「副会長からだ」

「……」

ケイの“変舌”は無くなっており、ざわめくような不愉快な発音をしないでもな口調で話すケイ。

ガウエインもそのグシャグシャに折り曲がったプリントを受け取る。

「亡妖^{ないよう}は素手に聞かされてると重^{おも}うが、“靈^{れい}の嫌^{けん}”だ」

（“例の件”……）

副会長という名を聞いたガウエインはすぐに顔色を変え（大した変わって居ないが）、グシャグシャになったプリントを綺麗に両手で

折り畳みケイに返す。

「……南^{なん}だ？」

「……副会長には分かったと伝えてくれ、そして現代文はちゃんと勉強しといた方が良いぞ、ケイ」

それを言い残し、ガウエインは御伽学園の校門にへと向かって行った。

残されたケイは覆面であるワニの大きな顎を揺らし、綺麗に折り畳まれたプリントを開くとそこには。

「……！……島^{これ}った……之は現代文のテストプリントだっ多！」

赤い字で『0点』と清々しく書かれてあった。

教師のコメントらしきものあり、そこには『ちゃんとした日本語でお願いします……』と泣く泣く書かれてあった。



「よお、あんた大神さんかい？」

振り向いた瞬間に見えた柄の悪い集団。

まずったか、大神は心の中で舌打ちをする。ここには依頼で来たはずだ、なのに来たのはこいつら。完璧に嵌められた。

大神は男たちの数を数える。合計十五人か、流石にこれは多すぎる。今ここにいるのは大神と亮士だけ。

しかも、最悪なことに大神の目の前にいる男たちの制服は悪名高き鬼ヶ島高校のものだ。御伽花市立鬼ヶ島高校、それは市内唯一の公立校。御伽学園が創立される以前から御伽花市にあったこの高校は、御伽学園やその他の私立高ができたことにより様変わりした。

ほとんどの人間はそれらの高校の流れ、貧しい家でも、そこそこの成績があるか、素行がまずなければ奨学金を受け取ることによって、それらの私立に通うことができたのだ。

そしてそれらの学校に通うことが出来なかった、もしくは素行の悪さにより拒否された者たちが鬼ヶ島高校に流れ込むようになった。

そして今、鬼ヶ島高校は不良の吹きだまりとして近隣高校に恐れられる存在になっている。

「涼子さん、どうしましょう」

亮士がビクビクしながらもどうにか大神の前に出ようとする。視線の多さにやられ物凄いスローモーションで遅々（ちち）として進んでいないが。

どうする、どうする？　大神は内心焦りつつも強気な態度を崩さない。

ここは奴らのテリトリーじゃないはずだ。なのにここまで出張ってくるとは。

「これまたわいたもんだな、一匹見たらうってやつか？」

「ヒヒヒッ、強がっちゃって可愛^{かわウイ}くねえー！」

馬鹿一人が前に出て来た。

この馬鹿は前にガウエインにコンビニの前で群がっていた所を注意され、衝撃の場面を目の当たりにした高山^{たかやま}だった。佐林^{さはやし}と言う先輩とよく一緒にいる鬼ヶ島高校生だ。

「……で、鬼ヶ島の連中がいったいオレになんの用だ」

大神は当然のように無視して他の鬼ヶ島高校生の奴に聞く。無視された高山は不良とは思えない程純粋に無視されて落ち込んでしまい口を閉ざした。

「いやね、うちのボスがお前のこと欲しいらしいんだよ。あとちよっとは反応してやってくれよ……可哀想だろ」

そして答えたのは高山と仲の良い佐林^{さはやし}だった。佐林が言った言葉を聞いた大神はまた焦りが総毛立つ。

「というわけで、ついてきてくれないかなー」

他の不良が嫌らしい笑顔でそう言う。大神は考えて考えて――
――結論が出た。逃げられない。何もまして人数が多いのだ。この数に打ち勝てる程大神は強くない。

「・・・・・・・・用があるのはオレだけか？」

大神さんは静かに聞いた。

「そうだな、野郎が居たってしょうがねえだろ。ほんとともう一人女が来る予定だったらしいがいねえし」

りんごを連れて来なくて正解だった。大神は少しだけ安堵の溜め息。

「分かった。というわけだ。亮士、お前は帰れ。どうせお前がいてもなんの役にもたたないしな」

大神は亮士の顔を見ずに言う。

—
な

「えっ？」

信じられないと大神を窺^{うかが}う亮士。

「だから消えろ、邪魔だ」

—
くな

「でも」

食い下がる亮士。

—
ないで

「帰れって言ってんだろぅが！！ お前がここにも盾にすらならねえんだよ！！」

とうとう怒鳴る大神。唇を噛み締め、拳を握りしめ、これ以上ないほど悔しさに顔を歪めた亮士は絞り出すようにして言った。

「……………分かった……………っス」

亮士は大神に背を向け走り出した。

それを見ながら大神は、

——行かないでっ!!

安堵し、絶望し、心の隙間からかすかに漏れてきた本音に愕然とした。

『行かないで!!』・・・か。

「・・・・・・・・・・ははっ」

思わず自嘲する大神。

「・・・・・・・・・・はははっ」

昔とまったく変わってなかった自分に苦笑いが漏れる。

大神は気がついた。強くなったと思っていたが、ただ自分が強いと自分に嘘をついていただけだったことに。

大神は気がついた。亮士がいなくなるだけで嘘を突き通せなくなるほど亮士を頼りにしていたのに、自分は一人で大丈夫だと自分に嘘

をついていたことに。

大神は気がついた。自分の嘘に気がつきながら、それを押し込めて自分を騙して見てみぬふりをしていたことに。

大神のついていた嘘。自分に偽るための嘘。あまりに情けなさに笑いが漏れる。

「ははははっ」

笑いながら大神は亮士にかけた言葉を思い出す。

『帰れ』・・・か。かつこいいな。

「ははははっ」

この自嘲も、どう猛な笑みに見えているだろう。

・・・なんだ、オレは嘘つきじゃないか。

認めようオレは嘘つきだ。大神さんがぎょろりと視線を向けると、視線を向けられた男たちはビクツとして一步下がる。

ほら、みんな騙されてる。

大神が嘘と嘘の間に出来たわずかな隙間を嘘で埋めている中。むさい男たちだけの中に小柄な身長をして桃色の髪をした女の子が

立っていることに大神は気付いていないまま、オレは強いと嘘の毛皮を被る。

「おいおいこっこいいな、本当に彼氏いっちゃったぞ」

「ふん、はなからあんなやつ頼りにしてねえよ（“こっこいいな”？）」

「高山、高山っ！ お前カッコつける為に早口で言ったから噛んで“かっこいいな”を“こっこいいな”と言ってるぞ！」

「うえっ！！ マジでスカ佐林さん！？ オレそんな事言ったんスカ！」

「言ったからツッコんでじゃねえか。あと大神も不思議そうに考え込んでるぞ」

そう言われて高山は大神を見て、数秒の間を挟んでから。

「やつ……んのかゴラァァァアっ！！」

『『『えっキレイたっ！？』『』『』』

鬼ヶ島高校生の皆はハモるように高山のキレイ加減が分からず、思わずツツコミを入れてしまい。各々赤面しながら高山の後に続いて大神に襲いに掛かる。

「はっ、ただの女だと思ってる痛い目見るぞ」

嘘つき大神オオカミさんは自分は一人で大丈夫だと嘘をつき、頼る者も誰もいないと嘘をつき、自分は強いと嘘をついて……

「てめえら、……オレを怒らせたんだ。ただで帰ると思うなよっ!!」

……大声で吠ないえた。

「オラアアアアア!!」

まず一番に突っ込んで来たのは大声を張り上げて素人丸出しで殴り掛かってきたのは高山だった。

「ふっ!」

問答無用の文字が一番しっくりくる殴る音が高山の溝に入る。

「ぐははははは!! 俺には効かねえぞ大神iiiiiii」

と叫ぶ高山だが、顔は気持ち悪い程紫色に染まり、何か症状が発病したみたい蒼白ほんにんになっていく。殴った大神も少しビクツとして後ずさる。

「高山 ああああ！！！」

愛する後輩が倒れてしまい佐林はすぐに駆けつける。

「大丈夫か高山っ！ うわっ気持ち悪ッ！」

佐林は弱々しく横になった高山を抱き抱えるように浮かせたが、余りにも蒼白になり過ぎていた高山が気持ち悪過ぎてゴンッ！ とコンクリートの地面に後頭部を打つ。

溝と後頭部の強打で自然に高山は倒れた。

「よくも高山 おおおおおおおおおおおっ！！！」

「お前がやったんだろうがっ！」

コントかつ、と大神がツツコミしながらも他の不良もとい鬼ヶ島高校生の連中を相手する。

佐林は後頭部を押さえて悶えている後輩を椅子にしてその乱闘を見物する。決して佐林は強いから高みの見物に洒落込んでいる訳では無く、あんなバトル漫画みたいな展開の中に突っ込む程自分が強いことくらい理解している。だから見物するしか佐林のやる事は無いのだ。後輩を治療するという選択肢もあるが面倒なので快く却下する。

「強えな、大神。鬼ヶ島高校の連中相手に食いついてくるなんてよ」

悶えて椅子になっている高山に返ってくる返答を期待しないで話す佐林。

三人目が丁度大神のパンチを顔面に食らって気絶した。

「つんとうに女かよ、大神」

佐林が暢気にそんな風に言っていると、女に殴られて尻を地に着かされた事で完全に頭に血が登り、懷からバタフライナイフを取り出していた。それに気付いた佐林はすぐに血相変えてそいつを止めようと駆け出す。だが間に合わない。

だがその時だった。

——ジャラリツ……

佐林が聞いたのは鉄の摩り合う鈍り音だった。

そしてその聞いた瞬間にバタフライナイフを持っていた鬼ヶ島高校生は腕に鎖が絡まれていた。

その一瞬の出来事にその場に静寂に包まれた。

大神もそこで逃避すればなんとかあったものののだが、鎖が繋がれている元を見て思考が停止してしまったのだ。

「喧々囂々（けんけんごうごう）」

そう言ったのは桃色の髪が似合うとても可愛らしい小さな女の子だった。

立っているだけで等身大の人形なのではと思わせてしまう程表情が

固まっにげていて、その固まった表情の少女の腕にはとても可愛らしい少女には似にげ気ない鈍りの鎖がジャラジャラと巻き付けていた。

ジャラッと鎖が鳴る。

（あの制服、御伽ウチ学園のやつだ！）

大神は可愛らしい少女と不釣り合い過ぎる鎖を巻き付けている女の子に目を向けて声を掛けようとするが。

「それ……なに？」

腕に鎖を巻き付けた少女がバタフライナイフを持っている鬼ヶ島高校生に問う。

だがその鬼ヶ島高校生は答えない。不審がった大神がその男子に目を向けるとそこにはガタガタと震えている“鬼ヶ島高校生”が居た。よく周りを見渡すと全員が口を閉ざして俯いていた。

なんだこの状況？

大神がそう思っていると、鎖で繋がれていた鬼ヶ島高校生が震える口で答える。

「あああ、いや、そのこれは……………」

「それ……………」

また同じ問いにビクッと少女より大きな身体をした男子高生が戦おのく。

そして何とかこの状況を打破しようと、バタフライナイフを持っていた男子高生が口を開こうとした瞬間だった。

「短刀禁止・・・だよ」

それを咥いたと思ったら少女は勢い良く男子高生の腕に絡まれて鎖を『引き戻した』のだ。

「ぎゃあああああああああああああああーーー
ツツツ！！！！」

グチャツァ！ と絡まれていた鎖を男子高生の腕の衣服と共に『皮膚』を千切り戻したのだ。男子高生は苦痛で絶叫しながら肉が剥がれた腕を押さえ込んで踞る。

ジャラツと少女の腕には相変わらず似合わない鎖が巻いてある。その鎖を良く見れば所々に腐敗した『何かの肉』が挟まっており、かなり不気味と言うより『気持ち悪い』が一番に当てはまった。

彼女が気持ち悪いのでは無く、彼女の周りに漂う空気・空間・感覚

が人を気持ち悪くさせるのだ。

彼女が現れた瞬間に鬼ヶ島高校の不良たちは驚くほど大人しくなった。彼女の異様な雰囲気と壊れ具合が鬼ヶ島高校にいる生徒たちを黙らせたのだ。

どう考えてもあの小さな女の子が行なった行為は絶対に楽しくなるような行為では無いことくらいは馬鹿な佐林や高山でも理解しているつもりだった。

だがその残酷な行為を最愛のように至高の微笑みを浮かばせている少女が鎖を鳴らしていた。

「クスクスクス・・・楽しいなあ・・・壊すの楽しい」

ブツブツと鎖にこびりついた腐肉を見つめながらうっとりとしていた。

おかし過ぎる。

そして果てしなく気持ち悪い。

それを今この場を支配していた。

やがて鎖から目を離すのを勿体無さそうにして、大神を見た。
ビクッ！！ と大神は一瞬にして心臓が跳ね上がった。鎖に対しての恐怖なのか、それとも人の肉を愛しそうにして削り抉えぐったあの小さな可愛らしい女の子に対しての恐怖なのか分からなかった、判断出来なかった。

「アナタの顔を傷つけては駄目なの」

今の大神にはあの近寄ってくる少女の言葉を聞き取る事で精一杯だった。構えすら出来ないでいるのだ。

「アナタの顔・・・綺麗」

ググッと少女は大神の顔を覗き込む。

「人じん品びん骨こつ柄がら」

「・・・えっ？」

「知らない？ 人品骨柄——その人にそなわっている品性」

大神はなぜこの無垢そうで純粹そうな少女が人を『物』みたいな目で見れているのか理解出来なかった。

「サハヤシ、タカヤマ」

「「え、っ!？」」

急に少女から自分たちの名が出るとは思わなかったのか、佐林と高山は変な声で返事をする。

「サハヤシタカヤマ」

「は、はい！」

「ななな何でしょうスカ！」

佐林と高山はすぐにその少女の“辺り”まで近寄る。佐林が繋げて呼ばないで下さいと空気を読まずにツツコミを入れようとしたが、そうすれば次に肉を抉られるのが己になるかもしれないと言わないでいた。

高山は少女の両腕に巻かれている鎖を見てガタガタと震えていた。

「どーしたタカヤマ？」

「あふえっ！？　ななな何がでしょうなんででしょうスカね！？」

（死んだな）

佐林はビビりまくりの高山を心の中で合掌した。だがそんな高山の変な言葉に少女は声を上げて笑った。

「アハハハッ、タカヤマ変な言葉」

「はひいっ！！　ずみゝまゝぜん！」

高山はもう涙声と涙目でまともで居られなかった。

「じゃあ、この子連れて先に行く」

「お、俺たちが連れて行くと？」

「サハヤシ、そう」

少女はそう言って佐林に早く行くように促した。

「あ、あの・・・あなたは？」

佐林は高山と一緒に大神を挟むように立って小さな可愛らしい少女に聞いた。すると少女は至福に満ちた顔と声で返答する。

「私は、これから人品骨柄に値しない『物』を壊すから先に行つて欲しい・・・♪」

それを聞いた佐林はすぐに血相を変えた。意味を分かったからだ。

「早く行かないなら・・・サハヤシタカヤマも壊す♪」

本当に幸せそうにして少女は佐林に腕に巻かれた鎖を見せる。鎖から漂う肉の腐敗臭を嗅ぐとすぐに大神の腕を掴んで目的地にへと向かった。

背後から『あとで“パルツイ”が迎えに来る・・・』と同時に悲鳴と絶叫が聞こえてきた。

「クソツクソツクソツ！　こんなつ、こんなヤバイ事なんて聞いてねえぞ！！」

「うぶう、はあはあ・・・おえあ・・・おぶううう！！！！」

「バカ山もちゃんとしやがれッ！　大神を絶対に逃がすなよ！　逃

がしたら腕じゃなく顔の肉を抉り取られるか、下手すれば殺される
！」

佐林は涙目になりながら必死に大神の腕を掴んで連れて行き、背後からはまた蒼白の顔になりながらも必死に着いて来ている高山が目的の地へと向かった。

大神は必死に嘘の毛皮を深く何度も被り直して、佐林と高山の言う通りに連れて行かれた。

もう……毛皮を深く被るしかなかった。



御伽学園生徒会副会長がケイを通してからの言付け。

“ 例の件 ”

ガウエインはそれを懸念に抱きながら御伽花市を歩いていた。

長身で黒いフードを着ていれば本当に目立っていた。

ピピピピッ♪

無表情のまま歩いていたガウエインは懷から何の特徴も無い電子音が鳴り響く。

歩きながら携帯を取り出して電話に出る。

「……………もしもし」

『僕だよ、黒軋くん』

その声を聞いた瞬間に動きをすべて停止するガウエイン。

「……………副会長」

“副会長”と呼ぶガウエインは道路の通行に邪魔にならないように端に寄って、耳をしっかりと立て副会長の声を聞く。副会長から流れる通話マイクから元気な子供たちの声が聞こえてきた。

「……………初等部か幼等部に居られるのですか？」

『ハハハ、今日は初等部だよ。体育館で皆とバスケットを勤しんでいた所さ』

陽気な副会長の声にガウエインは溜め息を漏らした。それを聞き逃さなかった副会長はガウエインに言う。

『本当に済まないね、初等部に関する書類を届けに来ただけだったんだけど子供たちの元気な声を耳にしてね。遊び心が見事に回帰してきたんだよ』

「はぁ・・・」

そんなガウエインに副会長は急に静かな、重さのある言葉を耳にする。

『西区153の7番地』

「・・・・・・・・・・」

『それじゃあ、僕はバスケから鬼ごっこに勤しむ事にするよ。元気な子供を見るとこっちまで元気になってくるよ♪』

それじゃあ、と言って副会長は電話を切る。

ある事言ったら速終了といった感じだった。

「・・・・・・・・・・」

ガウエインは無言のまま携帯をまた懷に戻して、副会長が言い残した場所にへと向かった。



——足りない。

——まだ壊し足りない。

壊して壊して“彼”の道を開かせたい、邪魔にならぬよう無^{ゼロ}に壊^{もど}したい。

ジャラジャラと血だらけになった鎖を引き摺りながら少女は思った。

『破壊衝動』

人間の様々な事柄により発作的に沸き起こる衝動。物事を壊し尽くしたりしないと“我慢”という苦痛のストレスを味わう。

少女は目にうつる“全ての者・物”を壊さないといけないという衝動に襲われるのだ。自分でもそれはいけない事だと分かっているけど抑えきることが苦痛でしかなく、我慢すればするほど病的なまでに狂い苦しむのだ。少女は自殺を何回も行なった。こんな衝動に刈り立たされて“モノ”を壊すのが嫌だったのだ。

だが実際に壊していけばいくほどそれは至高なまでにストレスの発散と苦痛から救われる唯一の方法だったのだ。

だが唯一、唯一少女が壊さずに見れた“モノ”があった。

白馬王子。

天から授けられた色々なものを詰め仕込まれた王子は壊す対象として衝動が沸き起こらなかった。そして驚くことに彼と一緒に居るだけで我慢というストレスと苦痛が無くなっていたのだ。彼の近くに居れば“普通の女の子”として居られる。生きていけるんだと喜んだのだ。

命を救われたと同じだ。

少女は彼の為ならこの救われた命さえ捧げよう。

彼に害する『モノ』があれば喜んで“壊し尽くそう”。

彼の願いを叶えられるものであれば喜んで全てをあげよう。

この鎖で全部“破壊”する。

王子の近衛騎士^{かれ}として破道^{みち}を切り開きたい。

少女は鎖をジャラツと鈍り音を鳴らして西区にある廃工場にへと向かった。

「大丈夫、……王子は、ただ座ってれば良いんだよ……
……破道^{みち}を作るのが、私と“パルツイ”の騎士としての務
め」

可愛いらしい小さな少女騎士は、駆けた。



場所を見つけるのに以外と時間が掛かったガウエインはやつこの思いで着く。

ガウエインの目の前には大きな廃工場があり、そこから騒がしい乱闘の音が聞こえていた。

鬼ヶ島高校の奴らか？　ガウエインはそう思いながら廃工場の上の階に上がる階段を静かに登り、上から様子を窺うと。そこにはマジョーリカによって改造されたねこナツクル改をはめて殴り飛ばし、電流を浴びせている大神涼子の姿とスリングショットで大神を見事に援護射撃を繰り返している森野亮士が上の階から射っていた。

鬼ヶ島高校生の連中は突っ込んで来る大神を飛んで火にいる夏の虫と、囲もうとするが亮士の鉛玉が邪魔をする。一対一ならば大神も

後れをとることはない。しかも今の大神には新兵器を身につけている。パンチ一発で気絶ものだ。

どんどんと男たちを一撃で沈めていく二人。

そしえガウエインは前髪で隠れていない片目で大神の表情を見た。とても気分の良さそうな動きで相手を沈めていってる大神にガウエインは少し安堵の溜め息を吐く。

「……良いコンビじゃないか」

無表情ながらもガウエインは少し嬉しそうな顔でそう呟いた。

確かに大神の背後を守るように狙撃していつてる亮士は凄かった。的確な狙撃で相手の邪魔をしているのに関心していたガウエインだったが、新手らしき不良が赤井林檎を人質にしていた。会話を聞き取ることまで出来なかったが色々マジョーリカから弱い女の子として護身用の『兵器』を幾つか持たせていることを思い出して、一応飛び出す準備をしていたがバヂバヂバヂイイイイ！！と電流が流れる音がしたと思えばりんごを人質にしていた不良がどすんと倒れ、尚も倒れた不良にスタンガンらしき物で再び向けているりんごが居た。

「えげつない、という言葉が合うか？」

一人ボソリと呟くと、ぴくぴくと痙攣している不良を横にすっきりした良い笑顔で汗を拭くりんごを見て間違いないではないな、と再び頷く。

このままなら大丈夫だな、とガウエインは判断すると身を回れ右して戻ろうとした。

だが、

「いやー大丈夫だったかい？」

そんな声を聞いた瞬間にある“騎士”二人を思い出した。



「……………白馬先輩？」

大神が王子に目をやる。すると王子は心配そう顔で大神に話し掛ける。するとりんごが警戒感を隠そうとせずにスタンガン片手に大神の前に庇うように立った。

「佐藤君が君たちの所に行ったんだろう？ 彼女はね、ボクシング部のマネージャーなんだよ。だからね、僕が振られた所を見てたらしいんだ。彼女は僕が好きだったらしくて、僕を振った大神さんが許せなかったそうだよ。ほんとに巻き込んでごめん」

頭を下げる王子。

「じゃあ、この場所がわかったのは？」

「佐藤君に教えてもらったんだ。彼女が罪の意識に耐えかねて告白してきたんだよ」

「それでは、彼女とそこで転がっている彼らとの接点はなんですか？」

「それには僕にも分からないよ。彼女は真面目な人だったから」

王子は本当に残念そうに言う。その王子にりんごは笑って言った。

「じゃあ、私が教えてあげましょうか？」

その言葉に固まる王子。がどうにか持ち直すと笑顔で聞いた。

「どうのことだい？」

「ここだけの話、あの支店は防犯カメラが仕掛けられてるんですよ。だから、彼女が来たときから暇人の頭取さんが一部始終見てたんですの。で、なんとなく臭く感じた頭取さんはいろいろ調べてみたんですの。私たちに集まってくる情報はかなり多いですし、貸しを使えば聞き込みもスムーズですし、一步も出ないでその場で調べられたらしいですよ？ 奇妙な特技を持ってますし」

流石ですね〜と人事のように言うりんご。

「それですの。彼女が嫉妬を感じたのは本当、彼氏と別れたのも本当ですの。ただ、彼氏の方がしつこく迫っているというのは嘘。そして、彼女の嫉妬を煽ったのはあなた。彼女はあの場面を見てません。見たというのは嘘で、実際はあなたが落ち込んだ様子を見せて、心配した彼女に振られたことを悲しそうに話した。さらに調子を崩した“ふり”をして対抗戦で苦戦してみせて、涼子ちゃんへの心配を憎しみに変えさせる。どうせ、そこまでやるなら負ければよかったですのに。やっぱりプライドですの？」

可愛らしく小首をかしげて聞くりんご。王子は笑顔で返事をしないりんごの推理は次々と的を射ていく。

王子が全ての計画を企てていたことを見抜かれたのだ。

「まったく……。せっかく、限界まで追いつめられた大神くんを颯爽と助けて惚れさせようとしたのになあ」

「びっくりすると陳腐な作戦ですのね」

「まーね。僕もそう思うよ。でもね、とても効果的ではあるんだよ。実際大神君は追いつめられてあと一步で崩れるってところまで行っただしね。そこでかつこよく助けだし、その折れた心を優しく支えてあげれば一丁上がりだ」

ずっと見ていた王子に興味の悪さがすぐに分かる。

「うーん、僕の敗因は君たちの情報収集能力を侮ったことだねえ」

「それもあるんですけど、一番は森野君ですよ。でないと間に合わなかったですの」

「んゝあのヘタレ君がこんな特技を持っていたとはね」

「正直言えば私もびっくりですの」

りんごと王子の会話が終わったところで、大神は聞いた。

なぜオレなのだと。

王子は大神の素材が最高で、磨けば光る容姿に、その強い心。強気な大神を自分の思いのたたにできたら、それは素晴らしいことだと思うらしい。

「僕はね、自分で言うのもなんだけど努力家なんだ。客観的に見ると容姿家柄才能すべてに恵まれているように見えるだろう？ 確かに欲しいものはだいたい手に入れてきた。それでも僕はこの世が思い通りにならないと知っている。それが嫌なので僕は努力する。この世が僕の望み通りに回るように。すべてが僕の思い通りに行くように。そして努力でできないことをなくしていった結果、今の僕があるわけだよ」

「ふん、こいつらもその努力の成果というわけか？ 確かに努力家なんだろうがはつきり言って反吐^{へど}が出る」

「いいねいいね、その反抗的な態度。最初から思い通りになるもの、それはそれでいいんだよ、ただね、やっぱり自分の思い通りにならないものか思い通りになる、その喜びに勝るものはない」

「だから、おまになびかなかったオレを努力で自分のものにしようとしたわけか」

「ま、そういう訳だよ。ちなみに君の質問答えると、そこに転がっている彼らも僕が努力して人脈を作っていた成果だよ。そう、人脈も力なんだよ。表だけでなく裏でも力を持ってないと、なかなかすべてを思い通りにはできないよね。ただ、そこに転がっている役立たずたち、これは努力というまでのことでもなかったんだけど。金であつという間に懐柔されちゃったし。ま、その分使えなさすぎだけど」

全くとあきれ顔の王子は肩をすくめ、そして急に笑顔に戻ると言った。

「で、君たち。時間稼ぎはこの辺までにしてもらおうか。助けが来る前に、君たちを動けなくして大神君と赤井君を持って帰るよ。ま、そのあとは楽しい一時を過ごさせてもらおう」

「断る。作戦が失敗したら、今度は無理矢理に自分のものにしようってか？」

「その通りだよ。力づくでも自分の思い通りにするには変わり無い。さっきも言ったように僕は、この世のすべてが都合良く回るわけがないと知っている。理解している。ただ、理解するのと、納得するのは別物だよ。腹が立つものは腹が立つんだよ、僕の思い通りに行かないと」

「とんだ我儘おぼっちゃまですの。それでなぜ連れ帰るリストに私に加わってますの？」

「いや、君もなかなか反抗的だから、思い通りにすることができたら、とても気持ち良いだろうなと」

「……最悪ですの」

げんなりと本気で嫌な顔をするりんご。

「りんご下がれ、こいつはオレがぶん殴る」

「できるつもりかい？ 一週間もスパarringしてたんだから、僕の力はわかってるだろう？」

「一人ならな……亮士!!」

大神はそう叫びながら走り出す。が、

「おっと、させないよ」

王子は大神の懐に入り込んだ。

「なっ!」

驚く大神。しかし、反射的に殴りかかる。

「当たらないよ」

いったんバックステップで下がりパンチン避けると、再び接近し大神の腹を思い切り殴る。

「ぐはっ」

たったの一撃でよろめく大神。

「確かに、その物騒なものをつけている君のパンチが当たってしまったら一撃でおしまいだ。だけど当たらなければ意味が無い。ちなみに僕はボディしか殴らないから。顔殴ると手が痛いし、顔が壊れるとしらけるしね。ちなみにボディでダウンするのは苦しいらしいよ。僕は経験ないけど」

「うるせえよ」

その様子を見て二匹の犬は王子に襲いかかり、

「邪魔だよ」

その一言ともに吹き飛ばされた。

「っ！ エリザベスちゃん！ フランソワちゃん！ 森野君、援護は？」

上手く大神を盾にして亮士の狙撃をさせないようにして王子はボディにパンチを叩き込む。

「がっ！」

ほとんど気力だけで崩れ落ちるのをこらえる大神。

「どうだい？ お腹が重くなってきたかな？ でもあまり屈まないで欲しいなあ、盾にならないし、まあ、もう一発くらいかな」

王子は笑顔を絶すことなく止めを刺しにはいる。が、その時だった。

カバッ！！ と突如王子は黒い何かに押さえ込まれた。

「くあっ！」

いきなり上からの襲撃により、王子は抵抗しようも無いようにその襲撃者に目を向けるとそこには、黒いフードに片目を隠すほど長い前髪に、無表情な顔をした御伽学園の通称『黒騎士』、黒軋ガウエインだった。

「堕ちたな、白馬王子」

「「「騎士先輩っ！」」」

思わぬ助け舟にりんごと大神、亮士は誰よりも強く、信頼する助っ人が来たことにより安堵の息を吐く。

だが、それがいけなかった

王子が笑っていることを気付いていないことに――。

「《パーシヴァル》、《モルドレット》」

「「はっ」」

王子がその騎士名を呟くと同時にガウエインは廃工場から引き摺らすように“引かれ”たのだ。

ガウェインの視界に映った後輩たちの顔。

希望から絶望に変わる瞬間。

それはあつてはいけない。

ガウェインはすぐに廃工場の外にある錆びた部品を掴む。

「パルツイ、今」

「ああ、分かっているさあ！」

そして言葉を聞いたと同時にガウェインは身を捻るように曲げ暴れるように足を回す。

「こオのっ！」

ガウェインの足が丁度良く相手の手に掴まれていたナイフを弾いた。

「プリンス・ナイトか」

ガウェインは未だに身体に巻かれた鎖をなんとか力で押さえ込みながら相手を確認した。

「《パーシヴァル》、《モルドレット》」

パーシヴァルと呼ばれたのは紫色の髪をオールバックにした少年、そして小さな身体がとても可愛らしく桃色の髪をした少女はモルド

レットと呼ばれた。

「王子の邪魔をするなど、アレ程言ったのだからあああ！！」

パーシヴァルはどこからともなく表したナイフを次々とガウエインの急所に狙い飛ばす。ガウエイン自分の身体に巻き付かれた鎖を激しく揺らして直線上に向かってくるナイフを次々と落として、次に鎖を思いきり引く。所詮は男と女と力なのでモルドレットは苦い顔をして引かれる。

「馬鹿がつ！」

だがパーシヴァルが引かれるモルドレットの鎖を途中で掴み、ガウエインと綱引きの如き引き合いをする。

片手で鎖を引いたパーシヴァルはもう片方にナイフ三本を指に挟み、軌道を読んで今度は正確に狙いを定め。

「死ねッ！」

ヒュンツと凶刃がガウエインに向かう。

「ぐっ」

ガウエインは片腕を盾にして急所を守るようにする。グチュッ！！とナイフがガウエインの腕と肩に突き刺さる。思わず痛みで声を漏らす顔は全然変わっておらず、無表情でナイフを刺されたまま鎖を引こうとした瞬間だった。

ガクツと身体がバランスを崩す。引っ張られたのでは無く、引こうとした瞬間に弛ゆるまれたのだ。

「・・・・・・・・っ!？」

そしてガウエインの前から迫って来たのは片腕を鎖で巻き、まるでボクサーグローブのようにして駆け抜ける勢いでガウエインの顔をぶん殴った。

グチャアッ!! と顔の皮膚が鎖によって挟まれる感触がガウエインを襲う。

そして次に襲って来たのは。

「ふんッ!」

ブチュアッ!! と両方の太股にナイフを突き刺されたのだ。皮膚と筋を綺麗に突き刺されていく感覚が何故か聡明に感じられた。

「・・・・・・・・ツツツ!!!!」

声を押し殺しながらもまだ移動して行ったモルドレットは上手い具合に鎖でガウエインを捕縛した。

「何が円卓の騎士『最強』の名を持つ黒騎士だ・・・・雑魚が王子の邪魔をするんじゃないぞ」

パージヴァルはガウエインの太股に突き刺したままのナイフを勢い良く蹴る。

ギチャアッ! また筋を断つ音が生々しく聞こえた。ナイフの柄まで太股に深く突き刺さってしまった。

「……ッッ!!」

「チッ、悲痛の叫びも上げられないか」

パーシヴァルは鎖で巻かれたガウエインを侮蔑の含んだ目で見たあと直ぐに見向きもしないで王子の元に向かった。

「ガウエイン、我慢」

それだけを言い残し、片腕の鎖を全部使いガウエインを錆びた工場の柱に縛り付けた。そしてジャラジャラと鎖を引き摺りながらモルドレットも王子の元に向かった。

※

パーシヴァルとモルドレットが戻った時には白馬王子は惨めにも横に倒されていた。

「王子ッ!?!」

二人は焦りながら王子の身を心配して近寄る。すると顔に殴られ、電流が流された形跡があった。それをみたパーシヴァルは人間とは思えない程の『殺意』が大神たち向けられた。

「貴様ラァア!!!! 死ぬ覚悟は出来てるかッッ!!!!」

またも数本のナイフを取り出して大神と対峙するが、

「待て、パーシヴァル」

王子がモルドレットに支えられながら立ち上がる。

「おお！ 王子よ！ 大丈夫か！」

パーシヴァルはナイフをすぐに捨てて王子に肩を貸す。王子はパーシヴァルの言葉に耳を貸さずに大神たちに言う。

「トドメは刺しておくべきだったね。おっと動かない方が良いよ。身体が痺れてふらふらするけど、半死半生の大神君に今の僕でも勝てるし、パーシヴァルやモルドレットが居る。その彼、名前は忘れたけど視線が怖いんだったよね。今僕の視線を受けて固まっちゃってるし」

「そこお二人方は」

「赤井君は知ってそうだけど、この二人は王子近衛騎士であるパーシヴァルとモルドレットだよ。本名は流石に言わないけどね、全く、うれしいねえ」

「うれしいだあ」

「当たり前だよ。苦勞すればするほど、努力すればするほど、願い

が叶ったときは嬉しいものだろう？ いや、しぶりだよこんなに苦
労したのは。ほんと楽しみで楽しみで仕方ないよ。君たちを僕の思
い通りに出来たら、どれだけ楽しくて気持ちいいのかな？ どれだ
けの感動があるのかな？ 全然想像もできないよ」

そう言って、心のそこから笑みを浮かべる王子。

「いやいや、強い女の子はいいねえ。ほんと征服しがいがあるとい
うか」

その王子の様子に、大神とりんごは悔しさと顔を歪め、憎しみの瞳
で王子を睨む。パーシヴァルとモルドレットは満足そうに、そして
何処か王子を心配そうに見ていた。

そして大神が口を開こうとしたそのとき、

「ふざけるな！！」

それよりも先にそう言う叫び声が響いた。

「ん？ なんだい？ 邪魔なんでそこで固まっててよ」

王子は亮士を殺気を込めた瞳で睨み付ける。パーシヴァルはその殺
気を感じ取り王子を横から静かに見る。

「ふざ・・・・・・・・ける・・・・・・・・な」

その視線を受けながらも亮士は足を一步踏み出した。

「この・・・・・・・・馬鹿野郎が・・・・・・・・涼子さんはな・・・・・・・・強

いんじゃない」

また一歩踏み出す。

「……強くあろうとしてるんだよ!!」

もう一歩。

「必死に努力して」

一歩。

「誰にも助けを求めずに」

一歩。

「一人で」

一歩。

大神は一歩ずつ王子に向かっていく亮士を見る。りんごはその大神の手をそっと握る。

「初めて涼子さんを見たとき、おれは見た目と中身が合っていないような変な違和感を覚えた。最初はなんでか分からなかった」

亮士は顔を上げ、王子の視線を真っ正面から受け止める。

「でも、側にいるようになって理由がわかってきた。涼子さん・・・
・・・本当はかわいい女の子なんだよ。かわいいものが好きで恥ずかしがり屋で赤面症で素直じゃない。そんな普通の女の子なんだよ」

“普通の女の子”

モルドレットはぎゅっと王子の服を掴みながら大神を見る。

「なのに、嘘について自分を隠して強がっている。自分に、嘘ついて嘘ついて嘘ついて……そうしないと強がれないほど、涼子さんは弱いんだ」

王子の視線をさらされつつもいつの間にか亮士は王子の前、そして亮士は大きく拳を振り上げる

「でもそんな自分が嫌でがんばってるから、嘘ついてでも強くあるうとしてるから、だから……だから涼子さんは強いんだよこのボケがっ!!」

視線にさらされているため、ぎこちなく弱いパンチ。パーシヴァルとモルドレットに離れろ、と命令する。ふらふらの王子にも避けられる。そして王子はカウンターで殴り飛ばされる亮士。しかし唇から流れた血をぬぐいながら立ち上がる。

「なんだい、君は彼女の騎士^{ナイト}のつもりかい？ さっきまで彼女の後ろでこそ隠れていたくせに」

馬鹿にするように笑う王子。亮士はその王子の目をまっすぐ見つめ返す。

「……おれは騎士なんかじゃないよ。……盾にも剣にもなれない、……ただ後ろに隠れてちまちま援護するしか能がない……おれはね」

視線を耐えつつ、再びゆっくりとした動きで王子に向かっていく亮

士。少しずつぎこちなさが消えていく亮士の身体。

「でも……だからこそできることもある」

そして再び王子の前へと進んで行く。その亮士の顔に王子のパンチが突き刺さる。

「ぐっ」

吹き飛ばされる亮士、しかし亮士は倒れない。

「なら、なんだというんだ君は！」

全く自分の思い通りにならない亮士に王子は初めて怒りをあらわにした。

そして怒りのまま亮士を殴り、そのパンチは狙い変わらず亮士の顔にめり込む。が、亮士は倒れずその腕を掴んだ。

無意識だった。

何をしたいのか分からない内に王子に従う騎士二人が駆け抜けた。

あの亮士とかいう奴がやることを逸早く理解して無意識に反応してしまったのだ。

二人はもう分かっていたかもしれない。

今この場でこの亮士を倒してしまえば王子がこれから進む人生に何が欠けることになることを。

パーシヴァルの『殺人衝動』とモルドレットの『破壊衝動』は既に抑えられていた。王子が近くに居ただけでこんなにも落ち着き、余裕が生まれ、王子のこれからの事まで考えられるようにまでなっていた。

パーシヴァルはナイフを、モルドレットは鎖を亮士目掛けて放とうとした時だった。

黒い流星の如き速さでパーシヴァルとモルドレットを亮士から引き剥がした人物が二人を抑え込んだ。

黒軋ガウエイン。

無理矢理鎖を千切ったのか肩に刺さっていたナイフから血液が流血し、太股は大量に血が流れていた。

「黒騎士……」

「……ガウエイン」

ガウエインはモルドレットの鎖を使い二人を捕まえ、亮士に目を向ける。

「おれは……涼子さんを……自分が出来る方法で守る。
おれは、涼子さんの……」

そして王子の腕をつかんだまま残った右腕を振り上げ、

「くっ離せ」

「狩人だっ!!!」

渾身の力で降り下ろした。

「ぐはっ」

ぎこちなさの消えた亮士渾身の一撃は、見事に王子の顔に突き刺さり、そしてそのまま王子は崩れ落ちた。

その様子を見届けた亮士は……

「それに……涼子さんを仕留めるのは……おれだ」

問題発言とともに前のめりに倒れた。

ガウエインは男前に王子を倒した亮士を見て微笑んでいた。それを間近で見たパーシヴァルとモルドレットはかなり驚いた様子でゆっくりと立ち上がった。

「まさか黒騎士が微笑む日が来ようとはな」

「とても貴重」

既にガウエインが二人を押さえ込む力無いのに気付いていたのかガウエインと向かい合う。

「気付いているだろうが、パーシヴァルの『殺人衝動』はかなり薄れてきた筈だ。現にオレはお前に殺されていない、全て急所を狙ったの攻撃だったが俺の動きを計算して放ったことで『上手く急所を外す箇所』をナイフで狙ったことになる。まあ太股は完全に感覚がなくなる程深く突き刺したがな」

「知ったような口を開くな黒騎士、オレは本気で貴様を殺しにいったのだ」

パーシヴァルはナイフを取り出し、不気味な微笑み浮かばせてガウエインに向ける。モルドレットはりんごと何やら話している大神に目を向けていた。

（“普通の女の子”・・・）

モルドレットが感じたように、大神も本当は普通の女の子みたいになりたいんだ。と腕に巻かれた鎖をジャラリと地面に落とした。

そして同時に倉庫の扉が開き始める。

「間に合わなかったか!!」

「そんな・・・」

悔やむ大神たちに王子の声がかかる。

「ぐっ、はは、どうやら僕の・・・勝ちみたいだね」

「てめえ、まだ生きてやがったのか。往生際がわりい!!」

大神は立ち上がり、もう一度電撃を食らわせようとする。が、間に合わない。

錆びた音を立てながら扉は開ききり大神は・・・・・・・・・・現れた人影に絶句した。

そこにいたのは、ガスマスクをつけ、はたきを持ったメイドと、ガスマスクをつけほうきを持った魔女と、ガスマスクをつけたなんの変哲もないこともない燕尾服の少年。そしてガスマスクをつけドレスと西洋の甲冑が組み合わされた感じに改造された征服を着た騎士とオレンジ色をした長い髪をして白い服装に身に包んだ女性がそこに居た。

「せつ、先輩？」

大神がその五人に恐る恐る聞いてみる。それ以外考えられないが、それでも思わず疑問系。

「お待ちせしました」

「ちょっとおくれちゃったかなー？　かなー？」

「いやいや、大丈夫かい？　どうにか大丈夫なようだね？　よかったよかった？」

「・・・・あの適當副会長めえ・・・・・・・・」

「ふふふふ、凄い展開ねえ」

大当たり。この異次元からやってきたような五人にりんごは叫ぶ。

「頭取さん、おつう先輩、魔女先輩、外に誰かいませんでしたの！
？ いないなら迎え撃つか逃げないといけませんの！！」

「ああ、その方たちでしたらそこで皆さんよく寝てらっしゃいます」
外がよく見えるように脇に避ける五人。すると地面に倒れ込んだ六人ほどの男の姿が見えた。咳き込んだり涙を流したりして呻いている。

良く見てみればその六人の中にトリスタンが混ざっており物凄い勢いで涙を流しながら咳き込んでいた。

「えっと……」

「あやしいし、この中に入ろうとしてたからやっつけちゃったのヨ
ー」

ハイテンションなマジョーリカが答える。

「なっ、そいつらはそれなりに使える奴らだぞ！？」

王子が驚きの声を上げる。その間に入ってきたのは『円卓の騎士』の一人にして“最強”の名を持つフェイル・サーベル・ド・ランスロットだった。

「私の前ではそんなものは意味を成さないのです」

「トリスタンは単なる巻き添えだけどねえ、うふふふ」

「そしてフェイルが倒した後はトドメのあちき特製、催涙弾、涙ぼろぼろあもひでぼろぼろ君一号でやつつけたヨー!!」

その様子と恰好を見て何をしたか悟る。

そして頭取が大神たちに説明をすると同時にフェイルは王子の前までカツンカツンッと歩み寄ろうとしたが、

「……なんの真似です……?」

フェイルの前には王子を守るようにパーシヴァルとモルドレットが立っていた。

「主君を護るのが騎士ナイトの務めだろう?」

「王子は護る」

「パーシヴァル……モルドレット……」

最後まで着いて来てくれた騎士パーシヴァル、騎士モルドレット。王子は二人の背を見た。

「……私は『円卓の騎士』の纏め役として使命があります。主君を護るといふ騎士道精神は立派ですが、今回の件は……」

なら、とパーシヴァルはナイフを取り出す。フェイルも腰に差してある愛用のサーベルに手に掛けようとした時だった。

「どうして」

声がした発した元を見ると、そこにはボロボロの王子がパーシヴァルとモルドレットを見て呟く。

「どうして、だい？ どうしてそんなに僕を守ろうとするんだ？ そんな、そんな傷だらけの背中で！！」

パーシヴァルとモルドレットの背中を、いや、傷だらけの姿を見て王子は素直にそう思った。二人がどんな理由でここまで自分の為に何をしてきたのか王子は分からないでいた。

「僕がどれだけ我儘をやってきたのか、僕がどれだけグズのやるようなことをしてきたのか一番分かっているのは君たちだろ！？」

王子は今の自分を再確認する。

「今の僕を見ろ……これが本当の僕なんだ。いくら努力を積み重ねてきても所詮はこの程度……何も僕は持っていないのさ」

王子は立ち上がる。

そしてパーシヴァルとモルドレットの間を通りすぎようとした瞬間だった。

がしっ

王子は服を掴まれてしまう。振り返ればそこには涙を流しているモルドレットの姿があった。

「王子、持ってるよ、王子・・・は、私を“普通の女の子”にしてくれた。王子が居たから、わ、私は“普通”になれたんだ。なにも・・・持っていないなんて言わないでよう・・・」

まるで子供のように小さな声ですすり泣くようにゆっくり、ゆっくりと王子のお腹に顔を埋もらせる。

こんな小さな女の子が僕を守ってくれてたのか。

王子は自分がやってきた数々を思い出す。

パーシヴァルも王子の横に立つ。

「王子よ、オレも王子が居たから人を殺さずに済んだ、暴走した時も王子が止めに入ってこれたから怪我で済ませさせた。普通の人間の生活を送れてこれたんだ」

パーシヴァルはナイフを地面に捨てる。

「恐らく、オレたちは『主君と騎士』という間柄では無く。『友達』という絆で繋がれていたのかもしれない」

パーシヴァルは全ての武器を捨て、抵抗の無い意思を見せた。

「・・・ありがとう」

王子は誰よりも思ってくれる小さな女の子の騎士を背負い、横には誰よりも頼りになる長身の男の騎士を連れて、御伽学園にへと帰った

フェイルも三人を連れ学園に戻ると頭取に言い残し、ルーカンはトリスタンを引き摺りながらフェイルと一緒に戻って行った。

大神とりんごは何とも言えない感じに終わったことに少し不満だった。

だがカッコイイ亮士と一発は殴れたから少しだけ、本当に少しだけ気が晴れた大神は倒れている亮士の元に向かう。

猟師は狼を仕留めることが出来るのかは、赤頭巾ちゃんが暖かく見守ることになった。



パーシヴァルから受けたナイフを全部抜き取り、止血をしているガウェインは今廃工場の裏に居た。

大神やりんご、亮士には自分に大量の血液とナイフが刺さっているのは上手い具合に隠していたのでバレずに済み。今も一人でなんと

か止血している。

だが肩の方はなんとか止血出来たが、太股の方はまだ血が止まらな
いでいた。

子供の頃に親からナイフで切られた感覚を思い出したガウエインは
不愉快と、片目が疼く感覚に襲われながら。さて、どうしようかと
悩んでいた時だった。

「……ガークン」

ピクツとガウエインは反応して、声がした方向に目を向けると、い
つもの魔女の恰好をしたマジョーリカが立っていた。

「ガークンが途中で居なくなってたのは知ってたヨ」

そう言っママジョーリカはどこからともなく取り出した救急箱を開
き、的確な止血方法をして行った。

そして止血をやっている間、マジョーリカは黙々と作業をする。ガ
ウエインも何も言わず止血されていると、ふわあつとガウエインの
顔を抱くようにマジョーリカは抱きつく。ガウエインは腰を下ろし
ているのでマジョーリカでも余裕でガウエインの首に手を回せる位
置だった。

そして数秒そうした後、マジョーリカは手をガウエインの両頬に添
えると真っ直ぐに目をガウエインと合わせた。

「また、身体をボロボロにさせて……死にたいの？」

口調はいつもガウエインと二人で居る時だけ使う普通の口調で話した。それだけマジョーリカは真剣にガウエインに語りかけているのだ。

ガウエインはマジョーリカの瞳に涙が少しだけ溜まっているのが分かった。

「ガークンが後輩たちの為に身体を張るのは確かにカッコイイし、強いし、……私も嬉しくなる。でもそれでこんな、こんな傷だらけになっちゃうなら私は……嫌だなあ……」

マジョーリカはガウエインの横に座り背中^{うで}に手を優しく回して抱き着く。顔をガウエインの顔にくつつく程近い位置に落とし、ぎゅつとガウエインの服を掴むマジョーリカ。

「……マカ」

マジョーリカはもうそれ以上喋らず、静かにガウエインに抱き着いていた。ガウエインもマジョーリカの背中^{うで}に手を回す。マジョーリカの綺麗で長い金髪が当たる。

「泣かないで、マカ」

「……泣いてないもん」

ガウエインの首に顔を踞^{うずくま}せるマジョーリカ。

心配してくれてありがとう。

そして泣かせてごめん。

眩くようにガウエインは言った。

第14話「騎士と王子を護る騎士」(後書き)

王子様を少しだけアレンジ！

ちなみに鬼ヶ島高校生の佐林と高山は大神さんを廃工場まで連れて行った後は仲間に預けて逃げました。

ギャグとシリアスを入れた今回の話は長くなってしまいましたが、これでやっとこさ一巻終了です！

次はいざ！

二巻へ！

感想やコメントを本当に待っています！
お願いします！！

第15話「再・騎士とメイド」(前書き)

久々の更新でございます！

中々書ける時間が無いですね、そして中々オオカミさんのスピノフ小説が発売の『は』の字も耳に届いていない作者です！

新作読みたいですなぁー(ㇿ)

そして魔女さんは相変わらず可愛くアダルトチックですー、(〽
ノ

この『騎士とメイド』編は三話くらいなるかもしれません！

シリウスになったりコメディっぽくなるかもしれません(〽) ;

。ㇿ(〽)

その所はなにとぞご了承くださいましー(〽)

第15話「再・騎士とメイド」

それはなんの変哲もない放課後のこと。

御伽学園学生相互扶助協会て書かれたボロい看板のついた、これまたボロい建物の前でメイドさんが箒とダンスを踊っていた。

るるんとかの擬音——間違ってもレレレではない——を周囲にちりばめたくなりそうなほどご機嫌なメイドさんが、くるくると箒と一緒に回っている。ポリウムのあるメイド服のスカートがふわりと広がる。翼のように二つに縛られた黒髪が風に舞う。

「るるるるるるん♪」

とうとう鶴ヶ谷は口でるるん言い出した。似合っているから大いに良いのだが、ボロい建物——もとい誰も正式名称を知らないというか長いので正式名称を憶えようとしないう御伽学園学生相互扶助協会、通称御伽銀行の地上支店の前にはメイドな鶴ヶ谷おつうさんがお掃除をしていた。

メイデスキーなカメラ小僧たちと、メイドフィールド（一般人は近づけない素敵空間）に阻まれ、近づけないおおかみさんご一行。

「おつう先輩ごきげんですのね。ご奉仕の喜びに恍惚としてますの」

「だな。おかげで近づきツライ事この上ねー。いつものことだけだよ」

いつも通りコンパクトで可愛い赤井林檎の言葉に、いつも通り男らしい大神涼子がため息をつく。大神たちが立ち止まっているのは、鶴ヶ谷が本当に嬉しそうにお掃除しているので、その邪魔をしたくないから。……というのは表向きの理由で、本音の理由はまた別となっている。

「まあ、良い人なんだけどな。あれはあれでありがたいし」

「そうっスよねー、料理も上手いっスし」

腰巾着、金魚のフンの名を欲しいままにしている森野亮士が続いた。実際、御伽銀行所属メンバーで鶴ヶ谷のお世話になっていない人はいないのだ。御伽銀行の地上地下の施設がいつも綺麗で清潔なのは、炊事洗濯掃除など家事大好きな鶴ヶ谷のおかげなのだ。恩返しという行為に目がなくて時たま奉仕の喜びにトリップするのさえ無視すれば、鶴ヶ谷は完璧なメイドさんなのだ。

そういう訳で毎週火曜と木曜にここで見れる鶴ヶ谷のお掃除は名物となり、かなり本物っぽいメイドが見れる素敵スポットとして、メイド目当てのカメラ小僧が集まってくるのだ。

そして地上支店からガラガラと扉を開いて現れたのは。長身で黒一色でまとめ上げられた制服を着た『騎士としての風格』を持った少年、黒軋ガウエインが出て来た。

メイドスキーマな人たちはメイドさんメインでここに居るのだが、騎士とメイドという絶妙なコラボレーションがマッチしていて、お似合いである二人を見に来ている人たちも居るのだ。

「騎士先輩ですの」

「今日は当番だったな」

当番制で決まっている二年生組は、鶴ヶ谷と同じクラスであり同じ二年生でもあるガウエインは小屋の中に居たみたいだった。

「まあ、いつまでもこんな所でこうしている訳にもいきませんので、行きましょうですの」

「おう」

大神たちは今日は当番で無いが、何もないときにも地下本店に入り浸っている。茶も出てくることだし、おやつもあるし、テレビもあるしと至れり尽くせりでありにも居心地がよいのだ。

そういう訳でくると回り続けていた鶴ヶ谷は出てきたガウエインと何か話をして、また再び小屋の中に戻ったガウエイン。そして大神たちは鶴ヶ谷に向かって歩いていくと。大神のつり上がり気味できつめの瞳が視界の隅にいつも通りでない飛行物体を捉えた。

「あれは……?」

その小さく丸い何かは鶴ヶ谷の方へと……………

「あっ、あぶねえっ!!」

叫び走り出す大神。

大神の目には謎の飛行物体が今の軌道だと鶴ヶ谷に直撃することに気がついたのだ。

「え？」

鶴ヶ谷はその大神の様子に？マークを浮かべつつ、大神の視線の方向に何事かと目線をやり、目前まで迫った丸い飛行物体を目撃した。しかし突然の出来事に反応できない。

「きゃっ」

反射的に目をつむり、身をすくませる鶴ヶ谷。そして今にもその飛行物体が鶴ヶ谷に当たろうとしたとき……

ゴガッ

と何かが当たる音を立て、謎の飛行物体——野球のボールが地面へと重力に従って落ちた。羽根のように柔らかな髪を摩る感覚が鶴ヶ谷に感じさせる。

なんだ？ と大神が今起きた出来事に反応出来ずに居た。

鶴ヶ谷を覆うように盾となった黒軋ガウエインが撫でるように手を置いていた。

ガウエインは小屋に戻り、再び鶴ヶ谷に話を振ろうとした時には野球のボールが鶴ヶ谷に向かっていているのを目にし、理解する前に行動、長身の身でありながら人間技とは思えない飛躍的速度で鶴ヶ谷の前に“駆けた”のだ。

ボールは鶴ヶ谷に当たる寸前にボールの回転を逆にするように手刀の平面で撫でるように止め。最後に掌でボールを覆うように鷲掴み

した。

その速技はやわざと妙技みょうぎにりんごと大神、亮士は声を上げて感激した。

「もはや人技じんぎを通り超した瞬間でしたの！」

「流石だぜ騎士先輩っ！」

「凄過ぎっス！」

ガウエインは鶴ヶ谷に怪我が無いか（ここぞとの場面ですつと触りたかった鶴ヶ谷の髪を思い存分に）確認していた。

「ビデオカメラがあれば今のをテレビ局に送る事ができましたの」

「その考えに行き着くお前にも驚きだが、いやマジで凄かった騎士先輩」

「か、かつこ良すぎっス！！」

後輩が先輩の凄さを目の辺りにしている中、未だ心配そうに（恍惚に）して焦燥な面持ちで（無表情のまま）優しく鶴ヶ谷の怪我を調べていなかの最終確認する。

何が起ったのか分からずしばらくきょとんとしていた鶴ヶ谷だが、ガウエインが目の前で、しかも顔と顔の距離が数センチの間で髪を撫でられている事に気付くと同じタイミングで自分の身に何が起きたのか理解した。

若干赤面になり恥ずかしながらもガウエインと一歩距離を起き、頭

を下げる鶴ヶ谷。

「あっ、ありがとうございました」

鶴ヶ谷のまっすぐな視線がガウエインに向かう。キラキラ輝く感謝の視線。

もし亮士りょうしがこの視線を浴びていれば哀れに身を縮み込ませていたかもしれないな、とガウエインが思いながら至極名残惜しそうに撫でていた鶴ヶ谷の綺麗で柔らかかった髪から手を放した。

「騎士以前に、男として女性を守るのは当たり前だ。……そして何より」

そう言ってガウエインはまっすぐな視線を向けている鶴ヶ谷に返すように視線を合わせ。

プリンセス
「姫を護るのが騎士の務めだ」

この場面でにこやかに微笑んで見せれば女を落とすスカしたイケメン野郎にでも変身できたのだが、落とす気を微塵に思っていなかったガウエインは真剣な顔でそう言った。

「わわ、わたくしはメイドで、決して姫などとは」

そして当然、真剣な眼差しでこう打ち返されてしまっただけ鶴ヶ谷も反応に困っていた。だがそんなモノ騎士は問答無用に踏み潰し、

「女性は皆、お姫様だ（そう祖父に教えられたしな）」

そんな事を思いながら言っている事は本人のみぞ知る事で、鶴ヶ谷

は耳まで赤くしていた。

そんな鶴ヶ谷おつうと黒軋ガウエインの周りに桃色なオーラが滲み出そうになった瞬間。

「どこぞのギャルゲーかッ!!」

ツツコミが入ってきた。

「あっ、トリスタン先輩ですの」

りんごが空気を見事に打ち壊した人物の名を呼んだ。

ガウエインと同じ『円卓の騎士』の一人である取須弾^{トリス・タン}は金髪を揺らしながら見入っていたメイドスキーの人達から湧いて出た。

「オイオイ君は鶴ヶ谷おつうちゃんを取って食べようとする獣にもなるつもりかい、ガウエインくん？」

「（何か口調おかしくないっスか？）」

「だいたい『女性皆、お姫様だ』？ こんなこっ恥ずかしい台詞を言うなんてどんな神経してるんだよ、フフフ、笑っちゃうね！」

「（そんな言い方ダメですよ森野君、ああやって個性を出さないと出番が減っちゃうんですの）」

「だ、ダメダメ、全くなつてないよガウエインくん……ここは

「そんな桃色フィールドを展開させられていると、ここにいるチェリーボオイズ達には毒だッ！ チェリーの耐性の薄さ舐めんなよ！？」

「知るか」

「そうだよ知るか！　なんで俺こんなチェリーなボオイズ共の為に熱弁してるのか分からんわ！　それもこれもお前が俺を構ってくれないからだバカヤロオオオおお俺を構ってええエエ〜！！」

ヒュンツと尋常じゃない飛び付きでガウエインの懐に入ったトリスタン。そして目をキラんとさせながら抱き着こうとしたトリスタンに黒い衝撃が腹部を襲う。

「グヴァあ！？」

自分でも引くような呻き声を上げて転がる。転がっていった場所に群がっていた男子陣は『面倒事が始まりそうな予感、いやトリスタン絡みだから始まるな』と感じ取り早々に散らばった。

「悪い、お前の腹部に服が覆ってあったから蹴ってしまった」

「ゲフツ、ゴホッ！　ハアハア・・・衣服着用してるから当たり前ではッ！？」

「抱き着こうとするのが悪い」

まあ妥当だよなあ、と大神たちは大きく頷く。

それに、とガウエインは続いて言葉を吐く。

「今日学校に来てからやけに俺にキメ顔やドヤ顔を向けてきてどう
いう了見だ？ 不快だ」

確かにやっていました、と鶴ヶ谷はまだ赤くなりながら頷く。

「だがまだそれは良かった範囲だったかもしれないな……」

「良かった範囲って、まだ酷いことがあったんスカ!？」

ああ、とガウエインは言いながら疲れた顔で、

「帰ろうとした瞬間」

※

『じゃあまた明日な、黒軋』

『ああ、また明日』

『またねー』

『また明日……ふう、早く俺も部屋に……』

ガラガラー

『おお、おお、まだ居たかガウエインちゃん!』

『なんだお前は』

『いやトリスタンだけど、いい加減よそそしいのやめにしようぜ!』

『分かった』

『それでよ、ガウエイン』

『なんだお前は』

『えっ、よそそしいの治ってねえけど!?!』

『これがお前に対する友情表現だ』

『おう、ま、マジかよ、嬉しいじゃねえかー／／／／／』

『(コイツ馬鹿だ)』

『それでよガウエイン、見てくれよコレ、俺が書いたサインなんだ。うひょおマジで恥ずかしい、でも初めて見せるのはガウエインについて決めてたん、だぜ／／／／／』

『(コイツ馬鹿だ)』

『これ上げるから』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『いやよお、俺もなかなか顔立ちだからモテちゃんだよねえ。だから付き合う変わりにサインあげて「それ俺だと思って何でも好きなようにしてくれ（キメ顔）」ってやるんだあ』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『いやハッハッハ、モテるのはツライねガウエインちゃん（ドヤ顔）
♪ それではアドゥゥゥ♪』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

※

「不快に愉を付けて不愉快だ」

それは痛々しい話だ、と後輩達は可哀想な目でトリスタンを見た。

「どう反応すれば良いのか分からなかったから“仕方無く”トリスタンのサインを鞆に入れるしか無いという屈辱的な経験をした」

「優しいんですね、騎士先輩は。私だったら破ってゴミ箱にポ

イですの」

ものすごい笑顔でもものすごい事を言うりんご。可愛らしい姿をしていて中身はドスく・・・ドス黒いです。

「何で言い直したのにまた言ってるんですのー!!」

「うおっ、どうしたりんご？ 空に向かって」

「い、いえ。何でもありませんの、オオカミさんでお馴染みですの」

「それ言っちゃ駄目っス！」

「あらら、ストップが入っちゃうのですの？」

「見事に入ったっス」

後輩のやり取りを横目にガウエインはトリスタンに声を掛ける。

「それで言い寄ってくる女性は居たのか？」

それを聞いたトリスタンはクワツとガウエインに顔を向けると、確かに整った顔立ちのトリスタンの顔が歪みに歪んだ泣き顔になっていた。

「イケメンなのに、こんな残念な顔になるんですのね・・・」

「うわ、ホントひでえ」

ガウエイン。相変わらず騎士甲冑姿のライダーズーツに注目されながらの帰宅だ。愛用のバイクである黒色に染まった大型自動二輪車『GALLー10』の後部から買い物袋を取り出した。荷物などを入れるスペースがGALLー10の後部にあるのだ。他にも科学の力で超進化させたバイクの性能もあるらしいが、今は関係ない。

ガウエインは宿主である村野夫婦の夫である村野若人むらの・わかとが大きくて邪魔になるにも関わらず駐車出来る場所を提供してくださったらしい。ガウエインも深い礼を何度もした記憶がまだ残っている。

そうやってガウエインはバイクを駐車し、買い物袋を掴んでおかし荘の横に建てられてある庭付きの比較的大きな家の玄関に向かう。

すると足下に寄り添う気配を感じ、長身の目線から見下げると、可愛らしく甘えてくる亮士の獵犬であるフランソラとエリザベスが居た。絶対に重そうな程に詰め込まれた買い物袋を片手で両方掴み、空いた片方の手でエリザベスとフランソラを撫でるガウエイン。

ハッハッハッともっと求めるようにゴロンとお腹を見せて『もっと撫でて♪』アピールを仕始めた。

ガウエインは小さく微笑みながら再度エリザベスとフランソラを撫でまくる。

愛でまくったガウエインは一人満足してポンポンと二匹の頭に軽く叩いてあげ、終了の合図を送る。

すると少し名残惜しそうな目をするも聞き分け良く引き下がった。そして、いざ中へ、と玄関の前に立つと、ガラガラと扉が開いた。

「あっ、ガウエインさんじゃないっすか。今買い出しの終わりっすか？」

出て来たのは村野夫婦の親戚であり、同じおかし荘に住んでいる亮士だった。

「ああ、亮士はこれから犬の散歩か？」

「そうっス、そう言えば若人さんが調味料欲しがってたっスよ？」

「分かった」

それでは行ってきましたっス！ と口調こそヘタレのままだがオドオドとした感じではない学校とは違う落ち着いた亮士がリードを持って外に出て行った。

ガウエインは買い物袋を持って邸内の奥にへと向かうと台所で主夫パワーフルスロットルの村野若人の姿があった。最初見た時から『こんな優しそうな表情をもった男性』は見た事が無かったガウエインは本当に色々してもらっている。

「若人さん、すみません。遅れてしまいました」

「ああ、ガウエインくん、全然大丈夫だよ、寧ろ逆で早かったよ？」

「いえ、そんなことは……」

「ふふふ、僕は別に気にしてないから大丈夫！ それより雪女がガウエインくんに話あるって言っていたよ。そっちに行っておいて」

本当に仏様でも見ているかのように優しい若人にガウエインは感涙（もちろん無表情）しながら荷を若人に預け、ダイニングにいる雪

女の所に向かう。

ダイニングで氷を沢山入れたサイダーをがぶ飲みするこのおかし荘の宿主にして若人の妻である村野雪女が座っていた。大きなテーブルの上には何やら資料に関する本が二、三冊置かれてある。

「ぷっはぁー！ やっぱ冷たいサイダーは良い！ 喉を潤わせてくれるわ」

豪快な飲みっぷりを見せた見事な男気溢れるこの女性ひとを見て、やっぱり元気な人だ、と思いながら雪女の近くにあるイスに腰かけた。

「・・・？・・・小説読んでいたのですか？」

「ああ、私以外の奴らがどんな文章で気持の流れや思いで小説を生かしてんのか研究中だ」

と美しく整った大人の笑顔で返事を返してくれた雪女にガウエインは『なるほど・・・奥深い』と頷いて見せた。

そこで何やらずっとニヤニヤしながらガウエインを見ている雪女の視線に気付く。

「いやなーに、お前は意外にモテるんだなって思ってたよ」

「・・・？」

「いや買い物に出して悪かったな、部屋に戻って休んで良いぞ♪」

（いつも問答無用に買い出しをさせていた“あの雪女さん”が俺に気遣いの言葉だとッ？）

「……んん？　今なんか失礼なこと思わなかったか？」

「すみません、いつ見ても綺麗な女性だな、と思ってしまいました。そうですね、結婚なされた女性をそんなふしだらな考えを向けるなんて失礼以外何ありません。すみません」

「綺麗な女性か、ふふふ、口達者になったじゃないか」

「ありがとうございます」

違う考えだな、と鋭い洞察でそう思った雪女だったが、このおかし荘に入った時から随分と喋るようになったガウエインの成長に少し嬉しかったようで、まあ良いや、と深く突っ込まなかった。

その後は雪女と軽い雑談をしてガウエインは自室にへと向かった。

「ふう……」

溜め息とは、そんなに疲れたのか今日は？　と一日のやり取りを思い出し、トリスタンのせいだな、と疲労の原因を思い出していた。辺りも暗くなったし、部屋で勉強やらをやらなければと自室の扉を開けると……

「お帰りなさいませご主人様♪」

黒と白とちよつとの赤で構成された男を惑わせる魅惑の存在。

扉の向こうにはメイドが居た。

第15話「再・騎士とメイド」（後書き）

如何でしたかな？

今回は騎士とメイドのLOVEい展開にッ？

いやあ、おつうさんの声優さんが今放送されている『fate／Zero』でこの作品の主人公の名前の元となった『忠義の騎士』さんの主君なので少しやる気おきます！

ガウエイン……本物であるガウエインはどんな人物で、どんな性格だったのか、wikiでしか知らない自分ですが、やっぱりガウエインは一番大好きな『騎士』だと自分は思いますね（＾―＾）

トリスタンやランスロット、皆騎士として生きていたのに国が違えど、『かっこいい』と思いました。

何故ならばこんなに暑く喋っているのかすみませんでした（▽、；
）

次回も早く更新したいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676n/>

騎士と魔女と御伽之話

2011年11月16日20時44分発行